

I. 5M35

319

39

# 太宰府史鑑

上

明治  
37 1 7  
内交

而 牖



燭 矣

遠

源長成題



叙

明治三十五年菅公一千年の大祭典に相當するを以て敬神愛國の士は翕然として協  
合し爰に菅公會の設立あり大に祭典の準備を畫策す是に於て太宰府史編輯の擧起  
る余等其囑托を負ふ然れども余素と寡聞加ふるに馬齡既に耳順を超へ老朽其任に堪  
へずと雖も居常其神徳の高遠なるを景仰すること久し今や實に千載一時の盛運に  
遭遇し感激措く能はず鞠躬盡瘁して聊か以て其梗概を編纂し太宰府史鑑と名く抑  
太宰府の事蹟たる其興廢は邦家の盛衰に係り重大の關係を有す即ち上編とし就中  
菅公の左遷は最も其因縁深し其一世の芳蹟は中編とし天平廣嗣の擧兵天慶純友の  
叛亂壽永安徳帝蒙塵及武藤少貳の經歷文永弘安元寇の掃攘降て天正年中岩屋紹運  
の義死等の如きは下編として之を發出し斯る我太宰府の事蹟は決して空しく堙滅  
に歸すへきにあらざる況や明治復古の鴻業の如きは徳川氏の季世元治慶應の間に方  
りて三條相國五公卿か此地に流寓せられしに基因せしに於ておや是れ菅公の神徳  
萬世無窮の國體を奉護し忠君愛國の至誠より感發する所以にして我か太宰府の事

蹟は實に國家の重典名教の實訓なりとす冀くは大方の有志士文詞の拙陋を咎めず敵愾護國の感念に於て萬一の參考に供することを得ば余等畢生の幸榮何事か之れに加へんや聊か其概旨を紀して叙とす

明治三十二年十一月三日

高原謙次郎 敬識

### 緒言

往古我邦西海の重鎮たる太宰府の名の始て國史に見れしは實に推古之朝十七年に在り然れば此府創置の遠く其已前にありしこと素より知るべきなり中世天智之朝之を都督府と稱し聖武之朝之れを鎮西府と呼び清和之朝詔して之を外朝と云ふも皆我太宰府の謂にして禮樂征伐天子より出て九國二島の祭政を統督し兼て隨唐三韓の諸國を茲に控制し所謂鎮西の都府なりとす恭しく惟るに天祖の神勅に豊葦原の瑞穗の國は是れ吾子孫の君たるへき國たり寶祚の隆なる當に天壤と窮りなしと宣へるは是れ其建國の體たる天下唯此れ一君、一君唯此れ一統、君は民を安するを以て職とし、民は君を奉するを以て分とす、蓋し此民たるや天祖の以て一君に寄する所にして而して一君の因て立たせらるゝ所たり故に君は唯た克く此の民を安んじて以て天祖の命に報すへし之れを敬神反始の道と云ふ祭政惟一なる所なり民は天祖の土に居り天祖の食を食ひ唯此れ皇統を奉し此の一君を輔けて以て其義を盡す民の能く此の一君に事るは乃ち又神を敬する所以なり君は民を安んじ民は君を奉し

以て天祖の國を保ち以て天祖の恩に答ふ此れ我か邦徹上徹下萬世不易の大道なりとす然れとも世に升降あり運に盛衰あり一治一亂從て國勢の消長は免るへからざるも其不易なるものは終に不易ならざるを得ざるなり

皇祖神武日向の高千穗峯より起りて大和國橿原宮に創業し玉ふや實に天祖の遺澤により撥亂反正の功六歳にして成り山河の勢により之れか守令を設け珍彦を以て大和の國造と爲し天祖を靈時に祭りて以て其天德に奉ず其公明の心其隆盛の業海宇を混一にして天祖の遺業を表彰し豊功偉烈誠に萬世に基する所たり崇神之朝又た以て神を敬し民を安んじ内武垣安彦の亂を平げ外四道に將軍を派し叛盜を靖定す十一年異俗來化し六十五年任那入貢す爾來三韓我皇化に嚮ふこと久矣景行之朝東征西討大に國威を張り以て天業を經綸す成務之朝山河を界ひし國縣を分ち國郡に造長を置き縣邑に稻置を置き之れを撫綏す應神之朝九年戊戌武内宿禰を筑紫に遣し以て百姓を監察せしめ又た其十三年壬寅宿禰をして九國を統治せしめ兼て北海の政を秉らしむ此れ蓋し太宰帥の淵源なり宣化之朝元年に至り那津(今の博多津なり)邊

に官家を建て諸國の貢調を集貯し大伴盤津及其弟狹手彦連に勅して新羅を伐たしむ狹手彦は軍兵を率ひて任那國に渡り盤津は筑紫に留りて國政を秉る蓋し此の官家なるもの即ち太宰府の始にして則ち推古之朝に至り始めて其名の顯れしなるへし孝德之朝五年正月に於て蘇我臣日向を以て筑紫太宰帥に任す此れ太宰帥の始て國史に見れしものたり天智之朝に至り栗前王、蘇我赤兄臣、栗隈王、相踵て此の職に任し大に府制を皇張し其管下に國司、郡領、里長、を立て戶籍を造り田法を定め關塞、斥埃、驛傳、を置き軍團、築城、兵備、を整え防人、烽火、警虞、を儼にし大化の政綱舉り紀目整ひ百度皆定る是れ固より治天下の大權にして百王の遵守すへき天祖繼承の大業を基する所たり蓋し文學は應神之朝に肇り釋教は欽明之朝に起り歷朝の文物典章煥乎として觀るへきに至りしなり就中天智の中興府制を擴張し百度備具せしは其功最も偉なりと云ふへし大寶令は制度儀文全く備り彬々として其善美を盡し職官制は體統相管屬して天子に歸し朝權の下に徙らんとを防く所以なり實に知太政官事の如き太宰帥の如き歷世敢て之れを人臣に委せず必ず親王にして之れに任す稍や故

なくんはあらず元正之朝藤原不比等の辭して受けさりしは素より其所なり其後文德之朝に至り之れを藤原良房に授け玉ひしより外戚の家往々之れに任す其の大宰帥の如きも文武之朝に至りては直大壹石上朝臣鷹を以て筑紫の惣領とし踵て大納言大伴宿禰安麻呂之れを兼務し元明之朝粟田朝臣眞人之れに專任す此れ時勢により材英を選ひ擢任すと雖とも抑も亦た朝權下に徙るの端を爰に萌せしものと謂つへし聖武孝謙兩朝に及び國力を佛敎に樂費し僧玄昉内道場に居り寵を擅にす此れ太宰少貳藤原廣嗣か兵を擧げし所以にして天平の亂は朝權下に徙り紀綱紊亂せしに原因す又た太宰府を廢し鎮西府を置く所以なりとす(天平十四年正月五日太宰府を廢し廢十二月辛卯筑紫鎮西府を置く同十)光仁桓武之兩朝天下の政令は噉日再ひ天に中するか如く七年六月辛卯復た太宰府を置く)天下清明なり嵯峨淳和之兩朝深く心を民事に盡し公卿多く國守より出つ府制も益す皇張し上下の間近くして才能の選明なりしことを見るへし蓋し民は國の本なり故に大に府制を更正し其管する國司郡領の選最も其人を得るに在り然して當時の公卿及府帥大少貳の如き皆克く民事に習ひ一誠事に從ひ後世統禱の比にあらさり

きは是時兵農一途事あれば則ち尺一の符を下して以て兵を徵發し事平けは甲冑を脱し兵仗を所在の兵庫に納めて農に歸す宇多醍醐村上之三朝皆其意を政事に留め府制益す擴充す延喜天曆の治績は後世の及ふことなき所然りと雖も延喜中菅公之筑紫貶謫を見又た太宰大貳源悅か赴任せざるを罰し且つ三善清行か封事を上せて時事を極論して殊に沿海の弩師を精選せんことを請ふに至る之を要するに寛平六年新羅の賊船か對馬島に寇せしを討攘せしより以後邊警久しく歇み依て太宰府も亦無事なり從て小康に安んし府政張らす權勢衰耗し府帥は徒に大臣貶謫の地とあり大少貳の如きも其任補の命あるも赴任するを好まず府の形勢稍や昔日に異なるに至りしは是れ典章文物の美は美なりと雖も朝權の下に徙りて紀綱の漸く振はさりしことを徵するに足れり藤原氏世々朝權を擅するに及び門地門流の風盛にして才賢路絶す其の最も失とする所のは兵馬の任を賤とし之れを擧げて源平二氏に委し號して武門武士とし其品流を分ち昇殿を許さるに至るにあり然して彼の源平二氏なるものは兵馬の任を負ひ屢々功を邊陲に立て朝廷の兵權を握り積威方隅に

被りしにより所在英雄豪傑の士皆樂みて之か用を成爲し終に自から君臣主僕の分を生し其進退黜陟必しも之れを朝廷に掛けざるに至れり獨り是のみならず諸國殷富の莊園は皆公卿の占有する所となり自から其吏を遣し或は地方の豪傑をして之れを宰せしむ諸國の守司も既に其政を行ふとを得す又た多く其任國に之かす身京師に居り其隸吏をして已れに代りて事を行はしむ府帥大少貳に於ても亦た然るか如し朝廷之れを不問に措きて省せず民政墮廢し治らす而して世襲封土の風漸く興るに至れり鳥羽之朝諸州の武士の源平二氏に屬するを禁せしは痛く其弊の在る所を矯正せんと欲するものゝ如くなるも而も其弊の因する所を究めず弊を救ふの術に於て既に踈なり啻に其困蹶を取るに過さりし是れ後生自尊の風漸く生し上下隔絶し天子政を親にせず而して藤原氏常に大臣大將の官職を私し之れを俊傑才英に與へず天子は必ず我家の出なり台鼎は必ず我家の有なり莊園は必ず我家の地なりとし其營する所唯た朝廷京城の中に於て一家の榮權を貪り京外一步の事は措きて問はず内は増徒法を犯し兵を弄し盜賊火を放ち人を殺すも正すと能はず外は梟雄

の徒富豪の族郷曲を武斷し邊方に離叛するも討つとあたはず事ある毎に之れを武臣に委して功を邊境に立てしめ功成て復た時に賞せず武臣は則ち私恩を其間に樹て終に京外の民をして武將あることを知て朝廷あるとを知らざらしむるに至る是れ紀綱漸く振はず大權下に移るの致す所たり後三條之朝乾綱を振ひ外戚を抑ゑ大權を收むるに意ありしも短祚其志を成さず眞に我邦の不幸なり白河法皇政を院中に決せしより朝綱益々亂れ後白河之朝に至り大亂乃ち起る帝又た白河法皇に倣ひ政を院中に執り五帝(二條、六條、高倉、安徳、後鳥羽)を擁立して二十餘年の間争亂屢生す其所以を原ぬるに藤原氏政權を專にせしより承和(皇太子恒貞王の廢位、東宮、帶刀伴健岑の流竄)延喜(菅公の)安和(中務少輔藤原)の變あり皆藤原氏か其家を私し皇胤を動搖するにより起る保元の亂に至りては天子(後白河)上皇(崇徳)と位を争ひ藤原氏兄弟(賴長、忠通)權を争より生ず平治の亂は則ち藤原氏の權を争ひ相仇するより出つ當時の君相保國安民を以て心とせず皆其私を營み遂に武臣の手を籍りて以て之れを行はんとす武臣已に功を立て威權已れに歸す則又た相呑噬して已ます平清盛か太政大臣となり其子弟親屬朝貴に列するもの數

十人莊園天下に滿ち天下の兵半は其隸屬となるか如きは是なり即ち高倉之朝治承三年に於て權大納言藤原隆季太帥に專任す世之れを希代の例とす於此而して天下の實權實力は皆賤む所の武臣に歸し而して君と藤原氏と皆之れを失ふに至る既にして朝廷頼朝義仲等の諸源を引きて平氏を殛し又た頼朝義經を引きて義仲を殛し又た義經行家を引きて頼朝を殛さんとす頼朝反て義經を殺し朝家に迫りて總追捕使を奏上し國司に守護を置き莊園に地頭を置けり是より天下の政權遂に朝廷を去り全く覇府に徙り實に我太宰府の名實亦た全く廢止するに及へり是れ後鳥羽之朝文治元年乙巳十一月のことなりとす之れを要するに我太宰府の創置たる宣化之朝元年にありと假定し保國安民郡縣を以て九國二島の政務を統理すると恰も一百二十七年にして天智之れを釐正し又た五百二十三年を経へ遂に廢府に及ひ土地人民を舉げて以て覇府の掌握に歸せり此間都合大凡六百五十年之れを内にしては歷朝の遣唐使及海外留學生の如きは渾て茲に於て往復せり之を外にして隋唐三韓の外賓は率ね茲に於て接待せり文教の輸入、釋教の東漸、茲に於て吸収せり其治績の著明な

る多々なりと雖も就中天平五年に於て遣唐使下道朝臣眞備歸朝して大學助に任し踵て天平勝寶四年に於て太宰大貳となり此地に於て大學釋奠の禮を行ひ大に文教を宣布し武道を講習す延喜菅公の垂跡は太宰府の名に大なる關係を及せしとは論を俟たず降て後一條之朝寛仁三年太宰權帥藤原隆家は太宰の警固所を守り刀伊賊の來寇を討攘して以て偉功を奏せり又た堀河之朝承徳年中權中納言大江匡房太宰權帥を兼ね嘉承年中專任して政を布き民を治め恰も六個年に及ひ府治を振起して再度觀るへきあらしめんとせしも奈何せん時弊の來ると久し遂に挽回すると能はさりし然れとも其變する所以の故に就ては時運の盛衰、風俗の淳漓、政事の美惡、人心の離合、兵農の貧富、強弱、教法制度の弛緩、興廢等に原因するものなきにあらざると雖も其終に變すへからざるものは皇統なり天位なり眼を轉して皇室の盛時を顧れば當時反亂の臣なきにあらざりしも踵を回らさずして皆其誅に伏せり降て武臣政を執り朝廷は廢府と共に虚器を擁し天下に爲すと能はさりしも天位の犯す可らざりものは依然たりき其前後鳥羽上皇一たひ北條氏を討んと欲して成らざりしも文永



弘安の外寇に際して府制已に廢すと雖も當時憂國の武士は我太宰府の故址により之を懲し之れを攘ひて以て我邦固有の武威を中外に宣布なしたり後醍醐の朝に至り再び北條氏を討して成れり而して旋た足利氏の爲めに奪はる是より天下の權再び朝廷に復せず其末世即ち元龜天正の際に至りては海内裂けて八九となり我九州に於ては島津、大友、龍造寺、筑紫、秋月、等の群雄各所に割據し戰鬪爭掠虚日なく我大宰府の地は其要衝に方り常に兵馬の馳驅場となり人民は恰も俎上の肉の如く屠殺せられ焼焦せられ掠奪せられ溝谿に流轉し塗炭に伸吟しても其顛ふ所を知らず其訴る所を知らざりし此際に當り當時の英傑高橋紹運は岩屋の孤城を嬰守し七百の郎等と共に鮮血を灑き殉戦して以て豊臣氏の軍を迎へ僅に九州を一定するを得以て徳川氏の世に及へり然り而して昔時都府樓、學業院、水城、荊萱の故址は今尙ほ田畝の間に歴々存在し過客をして敵愾護國の熱涙を灑かしめしと茲に六百八十四年の久矣に及へり嗚呼思ひて爰に至りなは我邦建國の綱紀は全く弛緩して遂に緊張すへからざる乎否を決して然らざるなり徳川氏の季世文久慶應の際に當り海内

再び擾亂せんとす故三條相國等の五公卿は京師の亂を避けて長藩に下り又た長藩より來りて我太宰府の地に流寓恰も三箇年に及ひ天下忠君憂國之士期せずして茲に集まり當時の大問題たる幕府征長の解兵、薩長兩藩の和調は、暗々裏々に秘訣を結へり果哉乾坤旋轉し五公卿は此地より雲興龍騰して以て復官歸洛し伏見の一戦王政復古の鴻業爰に開き太宰帥宮有栖川親王は征討大都督に任し關東へ下向し玉ひ關東奥羽の地日ならずして平定し天下始めて昔時太宰置府の舊日月に復し名實適合するのみならず踵て列藩の諸侯は版籍を奉還し廢藩置縣以て今日立憲政體の紀謨確立し征清の一舉以て國威を海外に飛揚し東洋の霸權を掌握せんとする盛運に遭遇せしも亦た一時の故にあらずして後鳥羽、後醍醐、二皇の志之れを今日に發して其源は天祖神孫列聖の深仁膏澤民心に淪沁固結するもの數千年を経て斬せず漸せず萬世君臣の大範終に踰ゆへからざりしなり論して爰に至りなは我太宰府の歴史は我國體名教の寶鑑にあらずして何そや宜く之れを編纂して以て中外に發彰し國民の精神を修練涵養せざるへからざるなり于時菅公一千年の遠祭近きにあり敬神

愛國の士翕然として協合し菅公會の組織爰に整ひ先以太宰府の歴史を編輯し之れを同好の士に頒布せんとす余剪劣自から揣らす其編史の任末に加り拮据勉力僅に其梗概を蒐輯協撰して之れを三編に別ち太宰府史鑑と名く冀くは大方有志士の參考に供するを得なは幸甚聊か所感を書して以て緒言とす

明治三十二年十一月三日

江島茂逸敬白

# 太宰府史鑑上編目次

## 神祇

奉幣、神託、奇異、秘災、

## 府官

官制、職制、官位令、撰叙令、管國官制、考課令、府帥大少貳補任、僚伏白丁、給事力、公廩稻、儲用物、借貳稻、驛傳馬、漏剋、給印、給鈴、府帥貳趣任式、上表、

## 貢進

奉獻物、貢綿使、諸國貢調庸、別貢雜物、府貢御贄物、

## 警虞

官衛令、軍圍、築城、防堤、關塞、烽火、所在兵庫、定額軍馬、弓矢防人、飛驒使、兵備訓練、弩師、邊要儲穀、緣海衛戍、射田法、衛卒料米、隨身兵、資私糧、唐通事、

## 來朝

歸化、來聘、賞賜、授產業、

## 遣使

遣隋、唐、渤海、新羅使、發歸、漂流、

田 秩

太宰職分田、公廩田、蕃客儲米、國分寺料、秩限祿令、

賑 給

褒賞、旌節、地子交易法、起證文、義倉、續命院、

刑 罪

禁制、法制、訴訟、鞠獄、遁逃、斷罪、配流、贖罪法、征戰、

祥 瑞

赤馬、三足雀、白鳩、白雀、白雉、慶雲、

災 異

地震、疫癘、水旱、風蝗、神嶺神池ノ鳴動、

文 學

春秋釋奠、學業院、博士、學生、

釋 教

諸寺ノ開基、堂塔建設及修理、布施、寺田地、入唐僧、除災祈福、吉祥悔過法、

詩 歌

凡 例

一 往古太宰府の事蹟に係りしものは重に太宰府徴(伊藤常足著)太宰考(上野勝從著)の兩書を基とし之に參するに伏敵編靖方溯源(併に山田安榮著)其他の史書を以てし之れを神祇、府官、貢進、警虞、來朝、遣使、田秩、賑給、刑罪、祥瑞、災異、文學、釋教、詩歌、の十四項目に區分し上編として編纂す其事項を分つに臨みては其事の重なる項に部入す故に一事蹟に於て他の二三項に跨るものあるへし故に府制中の事蹟は其梗目を摘み年表として卷首に冠し讀者の閲覽に便にす

一 菅廟の緣起に系りては太宰府史の最も關係を有せしものなれば其材料を神庫に保存ありし古文書及び諸書に就き其大要を掲述し中編を以て之れを發す

一 太宰府治制中に起りし天平年中藤原廣嗣の擧兵、天慶年中、藤原純友が擾亂降りて壽永安徳帝の蒙塵、武藤少貳の遺跡及び文永弘安元寇懲攘水城の防禦へ溯りて觀世音寺の創設、其他名所舊址の緣起を駢録し最後に天正年中岩屋落城の始末を具し本史の餘波として下編以て之を發出せしは太宰府の名を始終するに在るなり

一 往昔太宰府に係る文書其他古址に關する史乘は頗る洪濬にして牛汗棟充當ならざるも本編發彰の目的たる之れを單簡なる史書とし全く世をして太宰府其者の感念を起さしむるにあり故に其事蹟に係りては什に一二を蒐輯して以て其要旨のある所を示すにあれば文詞の野鄙なると句調の拙劣なるは編者深く其罪を謝する所なり

明治三十二年十一月三日

編者 識す

### 太宰府史年表

應神天皇九年戊戌 夏四月武内宿禰を筑紫に遣して百姓を監督す  
此れ蓋し太宰府の淵源なり  
十三年壬寅 武内宿禰をして九國を統治せしめ兼て北海の政を采らしむ此れ蓋し太宰帥の基本なり  
宣化天皇元年丙辰 官家を筑紫の那津に造り敷を著へ邊要に備ふ此れ蓋し太宰府の始なり  
二年丁巳 新羅任那に冠す將に命じて赴授せしむ  
欽明天皇十五年甲戌 有至の臣を百濟に遣し軍を合して新羅を討しむ  
十七年丙午 百濟王子惠を筑紫に護送し筑紫の大君に其津路要害を成らしむ  
二十三年壬午 新羅任那の官家を滅す  
敏達天皇十二年癸卯 日羅を召して任那興復を圖る日羅至る百濟橋に人を遣して日羅を殺す  
崇峻天皇四年辛亥 群臣に詔して任那の興復を議し帥を發して筑紫に赴かしむ  
推古天皇八年庚申 皇師四征新羅を撃ち任那を救ふ新羅復叛く仍て再征を議す  
十年壬戌 來目の皇子を將軍と爲して新羅を伐たしむ病あり果さず  
明年當麻の皇子に代る  
十五年丁卯 小野妹子を隋に遣す鞍作福利を以て通事とす  
十六年戊辰 小野妹子を遣り報聘使嬰世清以下十二人妹子に隨て來朝す妹子を遣して隋使を送る  
十七年己巳 百濟國の沙門欣彌惠等十人歸化す勅して元興寺に止しむ  
四月庚子 筑紫太宰奏す百濟僧侶八十五人投化すと此れ太宰府の名始めて國史に見へしなり

上編太宰府史年表

二十六年戊寅 高麗朝貢し隋の倂及物を獻す  
二十九年辛巳 新羅奈末伊彌實を遣て朝貢す  
舒明天皇二年庚寅 大仁、大上君、三田君、藥師惠日を遣り始て唐に遣す  
四年壬辰 大唐高表仁を遣し三田君を送りて來朝す此時學問僧實雲、僧旻、及勝鳥養新羅送使之れに従ふ  
孝德天皇大化元年乙巳 百濟朝貢す禮物備はらざるを以て之れを却す  
二年丙午 關塞、斥候、防人、驛傳給與の制を定む  
五年己酉 蘇我臣日向を以て初て太宰帥に任す  
白雉二年辛卯 新羅の朝貢使知萬沙食等唐服を着け筑紫に至る貢て之を却く  
齊明天皇六年庚申 新羅唐將蘇定方と兵を合して高麗百濟を伐つ百濟援を乞ふ天皇難波に幸して軍器を備へ戰船を造らしむ  
六年辛酉 天皇船師を帥ひて四征し七月筑紫朝倉宮に崩す是に於て皇太子深服して制を稱し軍政を總へ將を遣りて百濟を救ふ是歲就羅始て來貢す始て新羅の關を置く  
天智天皇元年壬戌 皇師高麗に領して唐新羅の侵襲を防ぐ又た會て來朝せし豐璋を百濟に送還して立て王と爲し軍須を調して百濟を救ふの用に充つ  
二年癸亥 四征の師新羅を伐つ前軍唐兵に値て利あらず既にして百濟亡び王豐璋難波を避て高麗に赴く其遺臣氏禮城に會し遂に人民を率ひて我邦に移る  
三年甲子 防人及烽を對馬、登岐及筑紫に置き又た水城を築きて外寇に備ふ  
五月百濟鎮將劉仁願朝散大夫鄒務儉等を遣り表圖及獻物を進む朝延務儉等を襲賜す  
四年乙巳 百濟人を役して城を長門筑紫に築き外寇に備ふ是歲大野及様の二城成る百濟鎮將高來朝す

五年丙寅 九月丁丑筑紫太宰三位屋垣王薨あり土佐に流す  
 六年丁卯 對馬の金田城を築き外寇に備ふ十一月乙丑百濟の鎮將劉  
 仁願司馬法聰等心して來朝せしむ今年境部石城等、唐使と筑紫の郡  
 府に還る  
 七年戊辰 栗前王筑紫率に任ず  
 新羅沙喙資金東殿等を遣し進調せしむ新羅王及び使臣へ物を賜ふ  
 差あり  
 是歲唐高麗を滅し安東都護府を平壤に置く  
 八年己巳 蘇我赤兄王筑紫率に任ず  
 九年庚午 長門の一城筑紫の二城を修築す  
 十年辛未 栗隈王筑紫率に任ず  
 唐の使人郭務儼等六百人來朝す  
 天武天皇元年壬申 筑紫太宰栗隈王太友皇子の學兵を辭し玉ふ  
 五年丙子 六月栗隈王薨去せらる  
 三位屋垣王筑紫太宰に任ず  
 六年丁巳 十一月太宰府赤馬を獻す  
 是月天下に大赦す  
 十一月壬午 八月筑紫の太宰百三足在ありき  
 筑紫太宰丹比真人等大鐘を貢す  
 十二年癸未 太宰府三足在を貢す  
 十三年甲申 大に太宰府邊要の軍須を曉す  
 海外の警備を嚴にす  
 十四年乙酉 九月直廣駐在伯耆郡廣足太宰の使者となり郡司及百姓  
 の消息を巡察す  
 十一月筑紫太宰の請により備用物純一百疋、絲一百斤、布三百端、唐  
 布四百常、鐵一萬斤、箭竹二千連を筑紫に送下す  
 持統天皇元年丁亥 太宰府新羅高麗百濟三國の男女及僧尼六十二人  
 を獻す是を武藏國に居らしめ生業を安ぜしむ  
 九月甲申新羅王子霜林等來朝す太宰府天皇の崩を霜林に告ぐ

三年癸卯 秋大風樹を抜き年穀を傷く  
 太宰府管内諸國年穀登らず詔して調庸の半を免す  
 新羅王其國王の喪を告ぐ朝廷賜物を賜ふ  
 慶雲元年甲辰 三月信濃國梓弓一千四百張を以て太宰府の警備に充  
 つ  
 八月太宰府有勳位者、請ひ番直軍團を作る  
 三年丙午 太宰府管九國大風樹を抜き穀を損す  
 元明天皇和銅二年己酉 二月太宰府に勅し筑紫觀世音寺の營作を檢  
 校せしむ  
 五月乙亥 新羅使金信福等來朝方物を貢す 右大臣藤原不比等新羅使  
 を辨官國內へ引きて迎接す此れ大臣始めて番客に面對せしなり  
 三年庚戌 正月丙寅太宰府銅鏡を獻す  
 豊後國連見郡殿見郡山崩る  
 其罹災者を賑給す  
 四年辛亥 詔して天下に大赦し大に録算孫卿者を賑恤す  
 五年壬子 日向薩摩風雨災の者へを調庸を免して賑給す  
 靈龜元年乙卯 太宰府官人家口皆課役を免す  
 軍須を太宰府に賜ふ大に邊備を警む  
 豊後伊豫の境買成を禁す  
 薩摩大隅二國の買成年限を定む  
 二年丙辰 四月太宰府に詔して飛騨給符を傳ふ  
 八月梓弓五千三百七十四張を太宰府に充て益す邊備を整ふ  
 百姓家に白銅を賑するを禁す  
 元正天皇養老元年丁巳 高麗百濟投化の遺民を存恤す太宰帥多治比  
 真人池守の善政を褒して綾絹絁布を賜ふ  
 是歲高麗百濟二國の人民本國の兵亂を避けて歸化するもの甚だ多  
 し太宰府は朝旨を奉じ其遺民を救恤して生計を營み其身を終らし  
 めたり  
 二年戊午 十月遣唐使多治比真人等歸朝す

二年戊子 太宰府新羅の調賦を獻す新羅皇子霜林を筑紫館に饗し物  
 を賜ふ差あり  
 三年己巳 太宰府年入百七十四人及牛皮、鹿皮を獻す  
 太宰府の史生を増す  
 大伴宿禰大沼田を西海道に遣し政績を巡行して宛狂を申理す  
 八月淨廣肆河内王筑紫太宰帥に任ず  
 石上磨を筑紫に遣し新城を監造して外寇に備ふ  
 筑紫防人の綱年限者を替ゆ  
 四月新羅王彌陀、觀音勢至の三像を獻じて先皇の喪を吊ふ  
 衣裳を筑紫の太宰府に賜ふ  
 太宰府粟田真人朝臣に勅し學問僧明聰觀智等へ新羅の師友を送る  
 かに給各一百四十斤を賜ふ  
 四年庚寅 七月辛巳太宰府國守皆還任す  
 筑紫太宰河内王に詔し新羅使大奈末金高調等に其慰勞物を賜る  
 九月丁酉大唐の學問僧智宗義德淨願等筑紫に來り隨て上京す  
 五年辛卯 直廣肆筑紫史益功績を賞して食封及絁絹を賜ふ  
 六年壬辰 筑紫率河内王に詔し新羅の沙門を大隅阿多とに遣し佛敎  
 を傳へしめ又大唐使郭務儼所造の阿彌陀の像を上送す  
 八年甲午 夏四月甲寅朝臣淨大肆を以て筑紫太宰河内王を送り並  
 に賜物を賜ふ  
 九月淨廣野三野王を筑紫率に拜す  
 文武天皇二年戊戌 太宰府をして大野某肆朝智の三城を修治し邊警  
 に備ふ  
 三年己亥 太宰府をして三野稻敷の二城を修めしむ  
 四年庚子 直大壹石上朝臣磨を筑紫總領とし直廣肆小野朝臣毛野大  
 貳なる  
 大費二年壬寅 太宰府へ梓弓を請ふ  
 遣唐使多治比真人の一行を發航す  
 太宰府所部國祿已下及郡司を專ら監臨するを聽く

三年己未 船船を太宰府に賜ひて邊備を嚴にす  
 四年庚申 正月丙子渡島津輕國司諸君鞍男等六人を鞍轡國に遣し其風  
 俗を觀る  
 太宰府白馬を獻す  
 五年辛酉 筑紫邊要の民戎役に勞し及死亡者を矜恤し本年の調庸を  
 免す  
 四月七道按察使及太宰府をして諸寺を巡行し隨便合併せしむ  
 太宰府管内諸國疫瘡大に行はる  
 新羅朝貢使大使一吉淦金勝等筑紫に來朝す太宰府は太上天皇尊禮  
 を示し之を放還す  
 六年壬戌 日向大隅薩摩の三國類に軍役に遣ひ兼て年穀登らず飢寒  
 に迫るものを賑給す  
 日向大隅薩摩の三國の兵士集賊を征す  
 大隅薩摩二國の集人六百二十四人朝貢す饗を賜ふ各風俗の歌舞を  
 奏す西長に叙位賜祿差あり  
 聖武天皇 渤海國の使來る  
 神龜四年丁卯  
 五年戊辰 渤海の使者方物を奉る朝廷之れに書及物を賜ふ  
 天平二年庚午 大隅薩摩兩國の百姓は自個せしむ  
 諸國の防人を停め兵船三百艘を裝ひ海を越へて新羅を討しめ大に  
 之れを敗る  
 三年辛未 太宰府始て登岐對馬に醫師を補す  
 四年壬申 始て造客備司を置く  
 新羅使軒奈麻、金長孫等來朝す  
 六年甲戌 太宰府疫死者多し依て府園の諸寺に於て金剛般若經を誦  
 讀して疫癘を攘ふ  
 新羅の朝貢使級代資金和貞太宰府に來り隨て入京す  
 七年乙亥 新羅朝貢す其王城國と改稱するを以て之れを却く  
 太宰府管内諸國疫癘大に行はる

詔して部内の神祇に奉幣し府大寺及び諸寺金剛般若經を讀しめ疫氣を攘ひ併せて疫民に賑給し湯藥を加ふ殊に本年の貢調を免す  
 大宰府管内諸國々別兵衛一人、安女一人を貢す  
 八年丙子 大宰府管内諸國比年公事稍繁勞役少からず疫疔行れ五穀登らず依て本年の田租を免して民命を恤かしむ  
 九年丁丑 大宰府管内疫疔時行はれ百姓多く死す食疫の家を賑恤し併せて湯藥を給す  
 遣新羅使大判官壬生使主守太磨歸朝して新羅失禮の狀を奏す公卿を召し議して其狀を伊勢の大廟及諸社に告ぐ  
 是歲筑紫の防人を停め筑紫人を差して壹岐對馬の邊防に充て坂東來皮の者を遣す  
 十年戊寅 六月新羅使金想純等來る大宰府之れを襲して放還す  
 十一年巳卯 對馬島に天馬出づ  
 十二年庚辰 太宰小貳藤原廣嗣上表して時政の得失を指し天地の災異を陳し僧正玄奘及右衛門督下道眞備を除くを以て可か爲す  
 廣嗣遂に兵を擧げ官軍と戰ひ過れて高麗に入りんと欲す果さず還り諒に伏す國別に觀世音菩薩の一軀を遣て攘亂安民を祈念す  
 十四年壬午 正月辛亥太宰府を廢し右大辨紀飯野已下を遣し廢府の官物を以て筑前の國司に付す  
 十五年癸未 十二月辛卯始て筑紫鎮西府を置き癸未從四位石川朝臣加美を以て將軍とし外從五位大伴宿禰百世副將軍と爲る  
 十六年甲申 鎮西府將軍、列官、主典の職位を制す  
 鎮西府に驛鈴二口を給し及鎮西府の印一面をも給す  
 十七年乙酉 復た太宰府を置き石川朝臣加美大貳と爲り多治比真人手養大伴宿禰三申并に少貳と爲る  
 八月巳丑太宰府管内諸司印十二面を授く  
 孝謙天皇 大宰府管内諸寺の墾田を定む  
 天平勝寶元年巳丑

二年庚戌 藤原清河遣唐大使に大伴古磨同副使に任せらる判官主典各四人任命ある  
 三年辛卯 遣唐使種色百十三人殺位差あり  
 伊勢大神其他諸國の神社に奉幣して遣唐使の安全を祈る  
 是歲十一月吉備眞備遣唐副使に任す  
 四年壬辰 正月巳卯太宰府白鹿を獻す  
 新羅王子韓阿食金泰廉眞調使大使金暉及送王子使金彌首等七百余人乗船七艘にて來朝軍を謝す朝廷之を聽る因て入朝の制を定む  
 山口忠寸入唐遣新羅使に任す  
 遣唐使發航す  
 六年甲午 正月十二日唐僧眞祥彦道照等の徒船八十余人太宰府に着し歸化す  
 遣唐副使吉備眞備歸朝す  
 〇四月庚申太宰大貳に任し隨て學業院を建て大に文教を布く  
 遣唐副使大伴古磨使をして歸朝奏言す  
 南島の樹牌を修飾せしむ  
 藥師寺の僧行信八幡神宮主神大神多磨等と同意して厭魅す太宰府檢知して遠流す  
 七年乙未 筑紫の怡土城を築く  
 太宰大貳吉備眞備をして其事に當らしむ  
 天平寶字元年丁酉 四海道に兵士一千人を以て太宰府防人に充て邊海を鎮成せしむ  
 二年戊戌 太宰府公廨を治む  
 遣渤海使小野田守歸朝して唐安祿山の變を奏す依て太宰府に命し防備を嚴にせしむ  
 渤海大使楊承慶已下二十三人田守に隨ひて來朝す之を越前國に安置せしむ  
 三年巳亥 太宰府及諸國をして大に船艦を造らしむ  
 太宰府をして行軍式を造らしめ將に新羅を伐んとす

新羅の征討を香推宮に告ぐ  
 八月廿九日南風烈し太宰府管内管倉及百姓の廬舎を顛壞す  
 九月新羅の歸化人を救恤す還んことを欲する者は根を給して放却す  
 十月藤原河清を迎ふる使判官内藏忌寸全成渤海より却還す渤海國使高南申相隨て來朝す  
 四年庚午 正月渤海國使高南申入朝して方物を獻す  
 四海道巡察使紀牛養大に太宰府の警備を戒む  
 吉備眞備四海道使となり太宰の所管八ヶ國の軍兵を檢案し田租を免して大に陣法を訓練す  
 新羅使遣金貞卷朝貢す 朝廷眞美朝獲等に命じて其罪を問ひ之れを卻還す  
 〇令人を太宰府に遣し兵法を大貳吉備眞備に授けしむ  
 五年辛丑 遣唐大使藤原清河歸朝す  
 唐使高元度來朝す  
 大宰府四海道七國に命し軍器を造り兵士を檢し陣法を練習し三年の田租を免し新羅を征せんことを  
 六年壬寅 正月乙酉藤原眞先を太宰府に遣し唐國大使沈惟岳等を府に擧し大使以下賜賚あり  
 大使は隨て入京す  
 太宰府に命し綿襖胃を造らしむ  
 始て太宰府に醫師を置き香推宮に奉幣して外征を祈る  
 七年癸卯 正月高麗大使王新福等來朝す  
 二月新羅國道級食金體信以上二百一十一人朝貢す前約に背くを以て之を却く  
 八年甲辰 七月新羅使金才伯等九十一人太宰府に來る紀午養を遣り來意を詰り放還す  
 同月唐國大使韓相彩日本僧戒融を送りて渤海より新羅に來る  
 稱徳天皇天平 太宰大貳佐伯宿禰今毛人怡土城を築く專知官に少貳

采女朝臣淨庭水城を修理する專知官となる  
 神護元年乙巳  
 二年丙午 九月百姓の疾苦を採訪し前後交替の訟を判斷し太宰府をして勘檢せしむ  
 〇太宰府の警備に東國の防人を通置配成す  
 神護聖雲 太宰府防人の制を改定す  
 筑前國怡土城成る  
 二年戊申 太宰府軍事を言ふ曰く肥後國八代郡正合院の北畔蝦蟇陣列廣七丈計り南向して去り日暮去る所を知らずと  
 太宰府に勅して觀世音寺の墾田を收め百姓に班給す  
 三年巳酉 太宰府學業院子弟從學者の爲めに列代の諸史を請ふ詔して之を許す  
 三月乙未太宰府給世萬屯を京軍に貢給す  
 光仁天皇寶龜元年庚戌 正月甲申太宰府管内大風あり官倉及百姓廬舎顛壞するもの一千三百余口に及ぶ其破損の百姓を賑給す  
 筑前國の官員太宰府へ歸するを停む  
 新羅使金初生等來朝す  
 在唐大使藤原清河及學生期衡等新羅使により郷書を贈る  
 二年辛亥 三月戊午太宰府白鹿を獻す  
 日向大隅薩摩及壹岐多禰博士を遷替して學術を授く  
 三年壬子 對馬國年榎難風に遭て沈没す  
 太宰所部の公卿を以て填補す  
 豐後國速見郡藤原山崩瀾を坑む其罹災者を賑給す  
 四年癸丑 渤海島須非等朝貢す表文無禮なるを以て之を却け又た航路を定む  
 五年甲寅 前右大臣大宰大貳正二位勳二等吉備眞備等  
 新羅使禮部卿沙食金三玄以下二百三十五人來朝す表文の違例なるを以て渡海料を給して又た之れを放却す  
 日向薩摩兩國大風雨北極災者を賑給す

閏八月 遣唐使佐伯富嗣今毛人船肥前松浦郡合坂田浦に泊し信風を得ず博多津へ引返し十一月大宰より送りて節刀を進む副使大伴宿禰立判官海上真人三狩等は府に留りて順風を俟て航海す此歳大宰府に勅して新羅の漂船を救恤せしむ

七年丙辰 陸奥國俘囚三百九十五人を大宰府所管諸國に分配し又た出羽國俘囚三百五十八人を大宰管内及讃岐國に配す

八年丁巳 使を渤海に遣し來使の大宰府に由らすして越前に到るを詰問す

遣唐判官小野瀨野、大伴繼人及前入唐大使藤原清河の女喜娘等四十一人歸朝奏す

九年戊午 十月新羅の賀正貢調使蘭蘇等來朝す大宰府驛傳奏上す十一月大宰府に勅し唐客高客林等五人新羅の貢調使と共に入京せしむ

十二月癸未 大宰府白鳥赤眼を獻す

十年己未 大宰少監下道朝臣長久道新羅使として渡海す遣唐判官海上三狩等を迎ふが爲なり

七月長久等遣唐判官海上三狩を迎へて歸朝す

十一年庚申 覆書を新羅王へ賜ひ使者表書なくして入朝するを禁す

大宰府の邊備を申或す大宰府官司の任限を五年に抑す

桓武天皇 左大臣兼大宰帥藤原魚名罪に坐して大臣を免す延暦元年壬戌

六年丁卯 三月四日皮時大隅國阿蘇郡曾乃峰上火炎大燄燿雷の如し亥時に及び光稍止唯黒烟を見る然後臺下五六里沙石委積二尺計り其色黒し

九年庚午 大宰府に命じて鐵冑を造らしむ

大宰所部航民八萬八千余人を賑恤す

十年辛未 豐後、日向、大隅の諸國大に饑饉並に之を賑給す

十一年壬申 二月新羅使歸藩す覆書を國王に賜ひ使者の表書なくして入朝するを禁す

て入朝するを禁す

十五年丙子 肥後國阿蘇郡健甕命神靈池水旱經年未だ曾て増減せず今故なくして水涸減じ二十餘丈の奇異あり

十六年丁丑 正月戊子朔大宰府白雀を獻す

前殿に於て侍臣に宴を賜はる

歸化百濟人の子孫の課役を除く大宰府の使部を改正す

十九年庚辰 流來の異裔人が所貢の綿種を大宰府の管内の諸國及其他へ賜ひ播種せしむ

二十年辛巳 大宰府華人を進むるを停む

大宰府大野山寺四天王の像及堂舎法物を併せて便近の寺に遷す

二十四年乙酉 遣唐判官三棟朝臣今嗣等歸朝に向ひ海上に於て難風に遭ひ肥前松浦郡鹿耳島へ漂着す

平城天皇 歸化の夷俘六百四十人を遣して大宰府の防人に充つ

大同元年丙戌 諸國の諸客館を修造す

遣唐使高階武人遠成唐憲宗に謁す

大宰府大少監大少典各一員を増す管内諸國水旱疾疫毎年相仍る殊に田租を免じて窮弊を濟す

嵯峨天皇 十二月新羅人對馬を窺ふ之れを捕ふ

弘仁二年辛卯

三年壬辰 正月新羅船數三艘對馬國下縣郡佐須浦に來る大宰府即ち軍士を發して之れを豫防す四人を捕獲し他は皆還去る

閏五月紀三津を遣新羅使とし遣唐使とし遣唐使海上の保護を求む

七月遣唐使藤原常嗣副使小野葉博多津を發し海上難風に遭ひて大宰府に引返す

十二月三津津朝復命す

四年癸巳 三月新羅人肥前の直島島に來り士民と闘ふ大宰府新羅の譯語一人を對馬に置く

五年甲午 大宰府の醫師を復す

三月遣唐使航海の安穩を神社佛閣に祈る

十月新羅人辛波古智等博多へ漂着し歸化す

六年乙未 九月遣唐使藤原常嗣歸朝し天顔を拜し節刀を進む

十月丁巳 遣唐使藤原山下宿禰武登等高麗船に駕して歸朝す

七年丙申 大宰府を以て毎年初三千疋を進めしむ

四月遣唐知乘船乘事官原堀成等所駕の第二船大隅國に廻着す

十三年壬寅 對馬島に博士一人を置く

十四年癸卯 大宰府管内諸國佃田營田の制定る

淳和天皇天長元年甲辰 多額島の大隅國に隸するを停む

二年乙巳 大宰府明法博士の官位を定む

二品行彈正尹兼大宰帥葛原親王上表して子息の王號を捨んとか乞ふ詔して之を許す

肥後國阿蘇神池再奇異あり大宰府の書生をして郡司の事を權任せしむ

三年丙午 七月七日慶雲筑前國怡土郡に見ゆる

四年丁未 大宰大貳朝野宿禰へ鹿取錢を賜ふ

五年戊申 筑前國難波郡安其買か孝節を旌表して叙位及戸田の租を免す

九年壬子 大内記小野朝臣兼大宰少貳に任す然れとも詔あり赴任を許さず後承和元年遣唐使として唐國に航す

仁明天皇承和元年甲寅 大宰府司の公廨を管内六國に班給す

慶雲筑前國那珂郡に見る

二年乙卯 大宰府に命じ給中胃及袴を造り遣唐使の用に充つ

空岐島に防人を置く

大宰大貳小野守建謀して假命院を建設す

三年丙辰 紀三津を新羅に遣し遣唐使海上の救護を求む新羅報書して之れを受けず

遣唐大使藤原常嗣海上難風に遭ひ大宰府へ引返す

五年戊午 大宰府に勅し園分寺神護等に於て供養し以て遣唐使の安穩航海を祈念す

大宰府の進進を改定す

大宰府の管内地子交易綿一屯直稻八束に定む

筑前筑後肥前肥後豊後五ヶ國疫癘流行す貧窮者を接びて賑恤す管内の諸國饑饉

六年己未 大宰府をして新羅船の風波に耐へしむるものを造りて克く捕獲を制して不虞を禦かしむ

大宰府をして大唐の所奉贈大元帥の畫像を進上せしむ

七年庚申 大宰府所造の新羅船六隻の内一隻を對馬島に配附す

新羅人張奉高馬額を進む

二月唐人張繼明等入朝す

四月新羅人遠山知等一百四十四人來化す

八年辛酉 十二月大宰府に命じて新羅人張寶高私藏を却け程根を給す

府曹百四口を以て對馬の防人を兼れ又た邊報混濁すること勿らしむ肥後國阿蘇郡神靈池に怪異あり諸社に奉幣して且つ徳政を施き災言を除きて以て不虞に備ふ

九年壬戌 正月新羅人李少員等四十人筑紫の大津に來着す大宰府其來由を問ひ糶米を給して放歸せしむ大宰大貳藤原倫上奏して四條を起請し新羅人の渡航を禁ざんと請ふ朝議其商估の貿易を許し又開田墾地を禁じて邊防を嚴にす

十年癸亥 大宰府白鳥一雙を獻す

大宰府管内に饑饉及東四悲田を設置して病者及窮民を賑給す詔して成兵を筑紫に置き新羅の觀望に備ふ

對馬島の防人新羅の警備を言上す

十二年辛巳 新羅人實麻州本國漂蕩入五十余人を押領して來着す

十四年丁丑 十月天台宗入唐僧圓仁及弟子僧性海惟正等新羅船に駕して歸朝大宰府に着す

十五年戊辰 五月壬申大宰府白鳥を獻す依て年號を嘉祥と改む

嘉祥二年己巳 對馬に醫師を置く

滋野貞主上旨して太宰府官僚の怠慢を戒す  
 大唐人五十三人多く貨物を賣して來者す  
 文徳天皇 正月戊午太宰府少貳權朝臣高宗白鼠一頭を獻す  
 仁壽二年壬申 宮内卿滋野貞主上表して太宰府の重鎮府官責任の在る所を箴む  
 三年癸酉 五月壬寅太宰府に詔し觀世音寺彌勒、佛寺並四天王院、香椎廟、及管内國分寺に於て大般若經を讀み祈念せしむ  
 六月癸亥一品太宰帥葛原親王薨去す  
 壹岐島女子伴部刀自實三子を産む勅して正税三百束及乳母一人を賜ふ  
 太宰府穀三萬八千七百石を出して管内諸國の袍着に惠せしものに賑救す  
 寶衡元年甲戌 太宰府腹赤魚を貢す  
 二年乙亥 日向守嗣等王兵を發して推討使田口朝臣房富を殺さんとす詔して其官爵を免す  
 三年丙子 三月新羅人漂着す太宰府糧を給して放歸せしむ  
 天安元年丁丑 五月一日大風暴雨官舎悉破背苗朽失九國二島悉く破傷す又大肥後國瀨田城院兵庫自鳴倉十一字火あり  
 六月庚寅對馬島上縣郡縣主帳下部川知摩。下縣郡縣大領直浦主兼賴三百許人を率ひ守立野連正等。館を圍み正學及び從者防人を射殺す制を太宰府に下し其罪を治む  
 七月辛亥制を太宰府に下して對馬島の賊類に却入れられし賊黨及び獄中死亡無妻子女を免す  
 二年庚寅 筑紫の防人を戒して在京及府下部斯人を便充す  
 清和天皇貞觀元年己卯 正月廿一日筑前國志摩郡兵庫鼓自鳴庫中弓矢聲あり外に聞ふ  
 二年庚辰 三月十四日太宰府詔を奉じ觀世音寺及國分寺に於て無遮の大會を施行す  
 四年壬午 七月大唐人李延壽等四十三人來着す太宰府に勅して

安置供給せしむ  
 五年癸未 新羅沙門光著、尊嵩、清願等博多に若す勅して之を鴻臚館に安置し糧米を資給す  
 六年甲申 諸國調庸の儀を廢制す又阿蘇神社に奇異あり  
 唐僧法惠をして觀世音寺に住せしめ以て唐通事の事に備ふ  
 七年乙酉 對馬國下縣郡の高山に於て銀礦を鑿つ  
 八年丙戌 太宰府管内の諸寺をして一七日金剛般若經を轉讀し火疫を豫防す  
 阿蘇神社に奉幣し城山四王院に讀經して外寇を祈禱す  
 寇聞あるを以て豐前長門及太宰府の關所を嚴にす  
 九年丁亥 正月廿九日豊後國速見郡龜見山神池に奇異あり  
 五月十一日肥後國蘇我郡に又た奇異あり  
 天台の入唐僧宗叡歸朝す  
 十年戊子 太宰府白鹿を獻じ之を神泉苑に放つ  
 十一年己丑 五月廿二日夜新羅の賊船荒津に來り豐前の貨物を掠む坂上瀧守を太宰府に遣し諸州の戰士を鴻臚館に移して新羅に備ふ  
 伊勢、石清水、及五畿七道の諸社に奉幣して外寇を祈る  
 中務卿三品兼太宰帥親王男子に姓を賜はんと上表せらる  
 十二年庚寅 對馬島下縣郡人ト部乙屎廢新羅に捕へられ送歸りて其罪問を言上す  
 新羅の寇聞あるを以て壹岐に兵器を給し對馬に選士醫師を置き、太宰府の沿海諸郡山陰道の諸國に命じて守備を申戒す  
 太宰府殊に對馬島に選士五十人を置き不虞を戒備す  
 肥前國杵島郡兵庫震動し鼓鳴二聲の怪異あり  
 使を字佐、香椎、宗像其他の諸社及諸山院に遣して邊警を告ぐ  
 新羅の歸寓者酒清宜堅等を東國に配徒して内接の患を絶す  
 太宰大貳藤原冬嗣輝燧を備え且つ豐前長門の馬を取出すとを禁せん詔す對馬守小野春風兵衣糧食を備へんと請ふ併に之を允す  
 太宰大貳藤原元利應等謀叛して新羅に通ず之を拘禁す

十三年辛卯 壹岐島兵風鳴動す  
 肥前國杵島郡兵庫震動す  
 太宰府醫師博士の選限及叙位法を定む  
 太宰府管内國司卒死者は殯斂料を停め賜物を賜ふ  
 九月新羅人酒清等二十人を諸國に配置して生業を授く  
 十四年壬辰 渤海使者來る使を石清水社に遣して外事の雲靜を祈る  
 置香を渤海使に賜ひて遣り歸す  
 太宰府の貢納儀を廢す  
 十五年癸巳 筑前國班田の制定る及太宰府警備田、府儲田、調庸錢の制を改正し軍須を備ふ  
 壹岐島進府の雜物を停め其水田一百町を以て對馬島の年糧に充つ  
 太宰府々中飢疫の者を賑給す  
 山陰道の諸國及太宰府に命じて兵備を嚴にせしむ  
 新羅の人三十人乘一艘對馬に漂流す之を鴻臚館に送り情狀を審察して放歸せしむ  
 渤海人薩摩國に漂着す糧を給して放歸せしめ兼て新羅の凶賊を警備す  
 七月渤海國人權宗佐門孫等肥後國天草に漂着す太宰府人を遣し衣糧を給して放還せしむ  
 九月新羅人三十人對馬島に漂着す太宰府其情を審察して放歸せしむ  
 十六年甲午 三月四日夜雷震響を發し通響動き連朝天氣晦冥雷暗夜の如し于時沙を雨らせ色聚雲の如し終日止まず積地の厚或は五寸或は一寸不稼爲めに枯損し魚鹽皆死す人民死魚を食する者或は死亡し或は病む  
 六月大唐人權安等三十六人肥前國松浦郡に歸化を乞ふ太宰府に勅して安置供給せしむ  
 七月二日地震す薩摩國開聞神社自燒し煙瀟瀟天灰砂を雨らせ震動の聲百餘里の外に聞ゆ

十七年乙未 太宰府に勅して對馬島に分つて島分寺を造る  
 三月廿八日勅して傳燈大法師位安宗を遣し太宰府彌勒寺に於て一切經、大乘經、大小律及緣外經を安置せしむ  
 六月大島二肥後國玉名郡倉上に集り四に向ひて鳴く群鳥數百潮池郡倉倉草を啄拔す  
 十八年丙申 太宰府所管肥後國に白龜を獲たり公卿表を捧て慶賀す  
 太宰帥在任行平の詔により肥前松浦郡直島に島司を置き海門の要務を掌らしむ  
 筑後國の出衆の不足を肥後國の正税を以て其數を足す  
 閏二月十七日延曆寺傳燈大法師位安宗等入唐求法として太宰府に若す  
 七月大唐人楊清等三十一人荒津に若す太宰府勅を奉て安置供給す  
 陽成天皇元慶元年丁酉 五月九日太宰府官肥後國に白兔を獲たり之唐人駱漢中來朝す衣糧を給して旅情を慰む  
 七月大唐人羅錫等六十三人傳多津江來着す太宰府勅を奉じて安置供給す  
 二年戊戌 使を伊勢大神及筑紫の諸社に遣して邊警を祈る  
 太宰權少貳藤原直仲に詔して警備の事を擡行せしむ  
 藤原房雄を太宰府に遣し防備を處辨せしむ  
 豐前國規矩郡探銅鐵を鑿つ太宰府の貢納を沙金に代へて永貯す  
 三年己亥 太宰府、豐前、長門の販馬を禁す民部大輔藤原房雄太宰權少貳兼左近衛權少貳を兼ね太宰府に赴任して戎事を警戒す  
 四年庚子 太宰府警備不嚴の聞あり因に少貳藤原房雄を罷め肥後守に還す  
 五月渤海大使婁文籍來朝す菅原道真、島田忠臣詔を奉て鴻臚館に延き應接贈答す  
 七年癸卯 七月三日の夜筑後國に群盜起り筑後守上都朝臣御西が館を圍み御西を射殺して財物を奪ふ太宰府司還境して追勦せず符を



下して還す  
 八年甲辰 彈正少弼安部麻主已下太宰府に下り筑後國凶賊の罪を治す  
 大宰府貢納乏し細を以て轉進するを許す  
 九年乙巳 十月九日太宰府上日陰雨晦合連明雨を見る粉々層砂境内に下り水陸苗稼草木枝葉皆焦枯す  
 光孝天皇仁和元年乙巳 閏三月丙戌太宰管内諸寺奉勅して仁王經を講説し保國安民の祈念を行ふ  
 新羅國使判官徐善行、餘事  
 高興等三十八人肥後國天草に著す福心を包藏す依て書辭違例を以て之を放却す  
 唐南太宰府に來る王臣家使及宮内吏民の貨物を賣買することを禁す  
 十月九日太宰府上す肥前國六月より雨降らず七月十三日夜陰雨晦合雨聲の如し連明府砂交境内に下り水陸田苗稼草木枝葉皆焦枯す  
 又た薩摩國に於て同月十二日夜晦冥衆星見へす砂石雨の如く下る云々  
 又た八月十一日雲霧留の如く燒炎甚熾して砂を雨らせ雲尚ほ夜の加し十二日辰より子に至り雷電砂降止らず砂石地に積り一尺已下に及ぶ田野埋瘞して人民騒動す  
 同月大府商人太宰府に著す府之れを保安す  
 二年丙午 太宰府の貢小柑子貢進の時を定む  
 石清水社に怪異あるを以て太宰府に命じて益す邊備を嚴にす  
 三年丁未 太宰府の貢國産は舊によりて陸道を取らしむ  
 宇多天皇寛平五年癸丑 新羅の海賊追討の事を以て農事を廢するにと勿らしむ  
 六年甲寅 二月懸星見る  
 四月新羅來寇す九月五日新羅の賊船四十餘艘對馬に達す守文屋等

友擊て之を破る因て善友を賞す十三日太宰府に警師を増置す又た太宰府の飛騨使に勅符記を賜ふ  
 八月二十一日參議左大辨兼勸解由長官菅原道真遣唐大使に右少辨無式部少輔大外記長谷雄副使に任す  
 九月十四日遣唐大使菅原道真請ふ公卿をして遣唐使の進止を議定せんと尋て勅して菅原使を止む蓋し唐の亂の故を以たり  
 七年乙卯 五月渤海國使使禮再來朝す  
 八年丙辰 九月一日慶雲太宰府の所管薩摩國に見る  
 醍醐天皇昌泰二年己未 太宰府肥後國の史生を省き警師を置く  
 太宰府上す怪異爾國の頓生す  
 延喜元年辛酉 正月廿五日右大臣菅原道真太宰員外權帥に左遷す同三年癸亥二月廿五日罷所に遷す  
 八年戊辰 渤海國使使禮來朝す  
 九年己巳 檢進唐物使を停め太宰府に附す  
 十一年辛未 太宰大貳源悅の赴任せらるるを許す  
 十四年甲戌 式部大輔三善清行封事を上せて時事を極論す其第一條沿邊の警師を精選せんことを請ふ  
 十七年丁丑 太宰府冠服を報す  
 十八年戊寅 高麗の始祖王建國を建つ  
 四南方群星二三夜見る又た長比賣神社、住吉神社大鼓の如く鳴動す  
 高御祖名神社内亂發炎光照耀東をさして飛去る  
 十九年己卯 太宰府交易唐物使當麻有樂孔雀を獻す  
 渤海國使使禮再來朝す  
 二十一年辛巳 六月天皇敵國降伏の四字を親書して筑前宮崎宮に納む  
 二十二年壬午 新羅の使者を却還す  
 二十三年癸未 新羅人對馬島に到着す太宰府をして放還せしむ  
 延長五年丁亥 延喜式成り府制其他待蕃の諸事を定む  
 七年己巳 新羅使張彦張對馬に來り朝貢を請ふ尋て之を却還す

渤海國の使使禮登舟後國に來り東丹國の使者と稱す存問使を發し其由を詰問して放還す此後渤海朝貢遂に絶つ  
 八年庚寅 太宰府、御守郡大野四王寺の四僧を撰補し新羅祈禱の用に充つ  
 朱雀天皇承平五年乙未 太宰府に命じて新羅に備へしむ  
 新羅王金假高麗に降り新羅遂に亡ぶ  
 六年丙申 吳越主錢鏐の使者來朝す  
 七年丁酉 高麗書牒を贈る尋て太宰府を駭して使者を却還す  
 天慶二年己亥 三月太宰府高麗廣野省に牒して使者を放歸せしむ  
 三年庚子 此年伊豫探訪原野友風をなす朝廷左近衛少將小野好古武藏守源經基右衛門藤原隆家大藏春實等をして追討使として發向せしむ純友逆賊せんとし敗れ走りて太宰府に入り累代の財物を奪ひ館舎を燒き亂暴到らざるなく太宰府浦の城に籠りて兵を以て自ら備る好古は陸地よりし隆家春實は海路よりし追りて大に戦ひ數多の賊兵を斬る賊軍更に船に乗りて逃る官軍之れを追撃して大に之を敗る純友扁舟に乘りて逃れて伊豫に歸り隨て謀に伏す  
 五年壬寅 新羅船七艘陸破に來る  
 八年乙巳 太宰府奏す吳越船、肥前國松浦郡柏島に來ると太宰府浦鹽所に引きて驗察す  
 村上天皇天曆八年甲寅 寇聞あるを以て薩國中に除目を行ひ薩摩原朝忠を太宰大貳に兼任す  
 天德元年丁巳 右少辨菅原文時、鴻臚館修築の意見を上す  
 圓融天皇天元三年庚辰 宋人始て來る  
 五年壬午 僧齋然宋に之て法を求む  
 一條天皇承延元年丁亥 十二月十二日入宋僧齋然歸朝太宰府に著す長徳元年乙未 宋人七十餘人若狹國に到着す之れを越前に徙し明年明法博士其罪過を勘核せしむ  
 三年丁酉 六月延壽高麗の艦狀に報せず益す邊備を嚴す  
 十月一日太宰府降奏す高麗人入寇す諸社に奉幣して外寇を攘ふ

十一月太宰府賊三十餘人を捕ふ明年太宰府賊徒を勸討す  
 四年戊戌 太宰府高麗の賊船を追伐す  
 太宰府貢賀島に下知して南蠻人を追捕せしむ  
 長保元年己亥 八月太宰府に命じて高麗の賊を討たしむ大藏春實戰功あり對馬及び筑前の地を賜ふ  
 四年壬寅 七月太宰府に勅して高麗人の歸化を許す  
 五年癸卯 十二月に太宰府をして二十一社に奉幣して外寇を攘はしむ  
 寛弘二年乙巳 八月太宰府に勅して宋商の留寓を許す  
 三條天皇長和二年癸丑 宋の牒書到る太宰府其送る所の貨物を京師に上す  
 三年甲寅 太宰府海寇を擊つ  
 一條天皇寛仁三年己未 三月廿七日刀伊の賊船五十餘艘來りて對馬を焚掠す對馬守遠時太宰府に通報し賊船を逐て登岐を侵す登岐守藤原理忠難に殉す僧常覺脱れ出で狀を太宰府に報す  
 四月七日賊船して筑前怡土郡に到り志摩早良二郡を暴掠す府兵防戦利あらず文屋忠光多治久明等苦戦して賊を却り八日賊船多海に入り能古島を奪ひ博多に迫る太宰權帥藤原隆家部將に命じて警固所を守らしむ前少監大藏種村、藤原明範、平爲賢、平爲忠、前少監藤原高、備仗大藏光弘、藤原友近等之に赴く此日變報京師に達す九日賊船固所を攻む我軍射て之れを卻り賊又轉して筑前を襲はんとす十日十一日風濤猛惡賊船古島に墜り散りて出づ陸家間に乘し沿岸の守備を嚴にし船艦を條補し乃ち少貳平致行、大藏種村、藤原致孝、平爲賢、平爲忠等に命じて進撃せしむ十二日財部弘延等能古島を攻め賊を外洋に走らす致行、種村等舟師之を追ふ十三日賊肥前松浦郡を犯す前肥前介源知之を助く府又水軍を増發して赴援せしむ賊遂に敗退し俘虜を乗せて高麗に赴く十七日太宰府外等を騷擾す十八日太宰府に勅して守禦祈禱せしむ二十一日伊勢以下十社に奉幣して外寇を攘ふ廿五日太宰府冠平を奏す廿七日復太宰府に命じて

津防を嚴にす  
 五月高麗人米斤送を筑前に拘禁す  
 六月朝廷鎮四將士の軍功を議し井に降虜の事を措辦す 七月太宰府に命して警備所設せしむ  
 七月十三日前太宰少監大藏種材を壹岐守と爲し其戦功を賞す  
 八月太宰府發す我俘高麗より還ると  
 九月高麗使鄭子真我俘を送り至る 明年朝廷報書を與へ太宰府に命して予其を遣還す  
 四年庚申 宇佐八幡に奉幣して災變を攘ふ  
 白河天皇承暦二年戊午 宋國宋商孫忠によりて物を朝廷に獻す  
 四年庚申 高元王上書して醫を求む書辭違例を以て聽かず  
 堀河天皇寛治元年丁卯 異賊船來寇肥後守経隆を討攘ふ  
 嘉保元年甲戌 是より先き前太宰權帥藤原伊房人を私に遣して貿易す事覺る因て其罪を治す  
 承徳元年丁丑 異賊船肥前國松浦郡及筑前の海岸を侵す太宰府之れを討却す肥前藤津郡東伊佐平治兼元戦功あり録を賜ふ  
 嘉承元年丙戌 正月大江匡房太宰大貳に再任して治を布こと六年大に府制を擴張す  
 天永二年辛卯 七月廿九日太宰大貳大江匡房大藏卿に遷り隨て發す  
 鳥羽天皇元永元年戊戌 宋國宋人孫俊明鄭清等に附して書を贈る  
 近衛天皇久安三年丁卯 蒙古の蔡羅孛極烈國を建つ大聖古園と號し十二月祖元皇帝と稱し天興と號す  
 仁平元年辛未 左大臣藤原長宋商に沙金を贈る  
 後白河天皇保元三年戊寅 平清盛太宰大貳に任す尋て其族筑後守平家良を代官と爲し府事を處辨せしむ肥後國住人日向太郎通良役はす清盛勅を奉し追討便として筑後守平家良を遣し通良以下三百餘人を族誅す  
 二條天皇永暦元年庚辰 高麗人對馬の商人を拘禁す  
 高倉天皇嘉應二年庚寅 後白河法皇福原に幸して宋人を見る

承安二年壬辰 宋明州刺史方物を獻す外記之を卻んと欲す明年太政大臣平清盛之れに贈酬す  
 三年癸巳 平重盛資金を宋の明州育玉山に送る  
 治承三年己亥 權大納言藤原隆季太宰帥と爲る此れ希代の例とす  
 安徳天皇養和元年辛丑 二月十三日菊池緒方、白杵、月次、松浦の諸源起りて太宰府を燒く  
 壽永二年癸卯 八月十七日車駕太宰府に警蹕し岩門少卿大藏種直が居城を以て行在とせらる  
 九月緒方惟能叛きて行在を犯す車駕之を避け水城を出て管崎に行幸し藤原秀遠は山鹿の城に遷御せられ遂に車駕屋島の行在に駐せらる  
 後鳥羽天皇元暦二年乙巳 此より先き對馬守親光平氏の難を避けて高麗に在り是に至りて源頼朝使を高麗に遣し親光を迎へ還す  
 文治元年乙巳 四月平氏滅亡の後源頼朝太宰府に來りて鎮四の事を處理す頼朝職を辭す土肥實平鎮四の事を兼行す  
 十二月源頼朝總追捕使を奏上す  
 二年丙午 十二月十日民部丞天則遣鎮四九國奉行と爲り太宰府に來りて政務を執り太宰府制全く廢す  
 後建久三年壬子 前右近衛大將源頼朝征夷大將軍に任じ兵馬の權を執る  
 同六年乙卯 鎮四の奉行天野道景職を辭す明年大友左近將監能直奉行と爲り小貳武藤小次郎資頼鎮四の事務を治め太宰府を改めて守歸所と稱し其號令録合六波羅に仰く資頼少貳の世襲し武藤と謂はす少貳を以て氏とす  
 太宰府の創置宣化の朝元年にありと假定し九國二島の祭政を統理すると恰も百二十七年天智の朝大に府制を恢復し又た五百二十三年を終へ此間都合六百五十年にして遂に府制全く廢するに及へり

# 太宰府史鑑中編目次

- (一) 叙 論
- (二) 菅原の系統
- (三) 菅公の時代
- (四) 菅公の事蹟
- (五) 結 論

## 附 錄

菅 蠡 抄

四月十日公藤大夫の先妣周忌追福の願文を爲る

五月左大臣源融奉勅太政大臣の官職の事を公及春淵永貞、大藏管  
行等に向ふ

同月九日公は太政大臣職掌有無非史傳之中何れの職にか相當する  
の議を製して之れを答上す

九月天皇紫宸殿に出て明經博士等をして五經を論せしむ

公重陽宴に紫宸殿に侍し向しく「玉燭歌」を賦して應製す

十二月廿五日夜公金吾納言四十年佳會を祝して「水形白鶴」を賦す

光孝天皇和元年乙巳 公年四十一

二月丁未仁和改元す

三月公相府文亨に始て世既新書を讀み同く詩を賦して應製す

四月公奉勅仁王會兜願文を作る

八月十五日天皇神皇苑に幸す侍臣に詔して詩篇を獻せしむ公之れ  
に屬る

九月公重陽の宴に侍し應製す

同廿六日公阿州平刺史に隨ひ河西の小莊に到り數杯の後清談の間  
多進士をして晚秋二十詠を題せしむ

十二月二十日公木工九平遠良先考修功德兼賀慈母六十齡願文を  
爲る

此年醜關天皇生る

二年丙午 公年四十二

正月十五日公内宴に侍し「聽官妓奏柳花怨曲」を賦して應製す

同月十六日公殿殿守に任し出て外任となる蓋し「博士難、撰詩、有  
所思」の結果遂に並に及ふ是れ公に於ては他日太宰府左遷の先容  
を爲せしものたり

同日後朝公卿大夫公の外任に趣くを錢基經公を請るに「明朝風  
景困何人」を吟せしむ公僅に一聲を發し涙流呼咽す家に歸りて通  
夜睡らず默然而止病か如く宵塞と云ふ

二月二十日公源中納家室藤原氏所天大相國に奉爲する修善功德願

文を爲る

四月七日公初て讃岐に花分州府を巡視す

七月十三日公清和女御源氏外祖母多治氏七々日追福願文を爲る

九月重陽公讃州の府衛に在りて小飲詩を賦す

十一月公寒早十音を題す同人貞貞類四字を用ゆ

此月庚申夜公旅館に諸小兒と向く三戸を守り「靜室寒燈」を賦す

此月十七日公正五位下に叙す

同月二十七日清和女御源氏修功德願文を爲る

十二月二十六日公宮道友兄弟母氏の五十齡を賀する願文を作る

同晦日公讃岐に在りて年を送り「旅亭除夜」を賦す

三年丁未 公年四十三

公讃岐に在りて年を迎へ「旅亭歳日招客同飲」を賦す

正月二十日公感ありて詩を賦す是れ宮中内宴の月なり

七月晦日大地震海水陸に溺り人多く死す公地震辭を作る

八月大内重惟異多し同月二十五日天皇崩す公謂ひて京師に入り其  
諱圖に走り木宅田園殘菊下自ら詩を詠す十一月十七日皇太子定春  
親王大極殿に即位す時に歳二十有一是れを宇多帝とす帝の即位す  
るや基經攝政を辭す帝詔を賜ふて之れを慰む詔文に「阿衡」の字あ  
り基經大に怒る帝甚た憂懼を備す公書を基經に呈して百方調停し  
阿衡の紛議收り基經をして奉命せしむ

十二月公更に讃州に歸らんを欲す「寄尚書平右丞」の詩あり

宇多天皇和四年戊申 公年四十四

公京師に在りて年を迎へ題て讃州に歸任す道次播州明石驛に到る  
所に紀行のあるあり

四月讃州大に早す公雨を城山神に祈る

五月六日公神文を作りて之を祭る即日雨盆を傾く

八月天皇仁和寺を遊り高野山眞然導師と交る

九月九日公「題白菊四十韻」又偶吟あり

十二月廿六日公立春を賦し同懺悔會三百八言を作る

欠

MISSING

四月十日公藤大夫の先妣周忌追福の願文を爲る  
五月左大臣源融奉勅太政大臣の官職の事公及善淵永貞、大藏善行等に問ふ

同月九日公は太政大臣職掌有無 井史傳之中何れの職にか相當するの職を製して之れを答上す  
九月天皇紫宸殿に出て明經博士等をして五經を論せしむ  
公重陽宴に紫宸殿に侍し同しく「玉燭歌」を賦して應製す  
十二月廿五日夜公金吾納言四十年佳會を祝して「木形白鶴」を賦す  
光孝天皇仁和元年乙巳 公年四十一

二月丁未仁和改元す  
三月公相府文春に始て世説新書を讀み同く詩を賦して應製す  
四月公奉勅仁王會兜願文を作る  
八月十五日天皇神泉苑に幸す侍臣に詔して詩篇を獻せしむ公之れに關る

九月公重陽の宴に侍し應製す  
同廿六日公阿州平刺史に隨ひ河四の小莊に到り數杯の後清談の間多進士をして晚秋二十詠を題せしむ  
十二月二十日公木工九平遠其先考修功德兼實慈母六十壽願文を爲る  
此年醜朔天皇生る

二年丙午 公年四十二  
正月十五日公内宴に侍し「聽官妓奏柳花怨曲」を賦して應製す  
同月十六日公殿守に任し出て外任となる蓋し「博士難、既詩、有所思」の結果遂に茲に及ふ是れ公に於ては他日太宰府左遷の先容を爲せしものたり  
同日後朝公卿大夫公か外任に趣くを錢守基經公を詰るに「明朝風景園何人」を吟せしむ公僅に一聲を發し涙流吁咽す家に歸りて通夜睡らず默然而止病か如く有塞と云ふ  
二月二十日公源中納家室藤原氏所天大相國に奉爲する修善功德願

中親賢公事蹟年表

文を爲る  
四月七日公初て讃岐に在りて小州府を巡視す  
七月十三日公清和女御源氏外祖母多治氏七々日追福願文を爲る  
九月重陽公讃州の府衙に在りて小飲詩を賦す  
十一月公寒早十音を題す同人身負類四字を用ゆ  
此月庚申夜公旅館に賭小兒と同く三月を守り「靜室寒燈」を賦す  
此月十七日公正五位下に叙す  
同月二十七日清和女御源氏修功德願文を爲る  
十二月二十六日公宮道友兄弟母氏の五十壽を賀する願文を作る  
同晦日公讃岐に在りて年を送り「旅亭除夜」を賦す  
三年丁未 公年四十三

公讃岐に在りて年を迎へ「旅亭除夜」を賦す  
正月二十日公感ありて詩を賦す是れ宮中内宴の月なり  
七月晦日大地震海水陸に溺り人多く死す公地靈辭を作る  
八月大内重恒異多し同月二十五日天皇崩す公謂ひて京師に入り其諒闇に走り木宅田園殘菊下自ら詩を詠す十一月十七日皇太子定春親王大極殿に即位す時に歳二十有一是れを宇多帝とす帝の即位するや基經攝政を辭す帝詔を賜ふて之れを慰む詔文に「阿衡」の字あり基經大に怒る帝甚た雲霧を備す公書を基經に呈して百方調停し阿衡の紛議收り基經をして奉命せしむ  
十二月公更に讃州に歸らん欲す「寄尚書平右丞」の詩あり  
宇多天皇仁和四年戊申 公年四十四

公京師に在りて年を迎へ題て讃州に歸任す道次播州明石驛に到る所に紀行のあるあり  
四月讃州大に早す公雨を城山神に祈る  
五月六日公神文を作りて之を祭る即日雨盆を傾く  
八月天皇仁和寺を遊り高野山眞然導師なる  
九月九日公「題白菊四十韻」又偶吟あり  
十二月廿六日公立春を賦し同儕梅會三百八首を作る

寛平元年己酉 公年四十五  
 正月元旦 讃州に在りて年を迎へ「戯小郎」の詩あり  
 同十六日公「殿官妓賜歌」又「明群臣侍内宴賦花鳥共逢春、乃製一詩寄上前渡洲田別駕」の詩あり  
 同十八日公齊日の詩あり又侍侍藤氏封戸施入園覺寺願文を爲る  
 此月朝廷始て四方拜を行ひ寛平を改元す  
 五月五日公「端午文人」を賦するの詩あり  
 八月十五日公「思賢有感」の詩あり  
 九月公「重陽日同諸小郎客中九日書懷」の詩あり  
 十一月公九詠の詩あり  
 此月公「庚申夜應詩述所懷」の作あり  
 公讃州に在りて此年を送る  
 二年庚戌 公年四十六  
 公讃州にありて年を迎ふ  
 二月秋を罷て京師に歸る  
 三月公雅院に侍し「賜侍臣于曲水之飲」を賦して應製す  
 九月公重陽の内宴に侍し同く「仙潭菊」を賦して應製す  
 閏九月公「燈下即事」を賦して應製す  
 十一月公奉勅太政大臣第に幸して病を視るの勅書に答るの書を製す  
 同十九日公太政大臣病の爲めに度者を賜て加人を免するを謝するに答るの勅書を製す  
 十二月四日公江州志賀崇福寺綵繪願文を作る  
 三年辛亥 公年四十七  
 正月關白藤原基經薨す昭宣と諡す  
 二月公散位初て昇殿を聽く公同月侍讀となる「上呈諸侍中」の詩あり  
 同月廿九日公藏人頭に補す  
 同三十日公藏人頭を辭する表を上る

三月三日公「上巳對雨說花」を賦して應製す  
 此月藤原時平參議に任ず  
 同月九日公式部少輔に任ず藏人頭故の如し  
 四月十一日公在中辨を兼ぬ少輔故の如し  
 同月廿九日公重て藏人頭を解かんを請ふの状を獻す  
 十月廿一日公「禁中初雪」を賦して應製す  
 四年壬子 公年四十八  
 正月七日公從四位下に叙す  
 三月三日公宴に侍し同く「花時天似醉」を賦して應製す  
 三月公「惜卷」の絶句あり  
 五月時平檢非使別當爲る  
 此月公奉勅して類聚國史二百卷を撰ぶ  
 五月十六日公奉勅鹿島を放却する願文を作る  
 七月公「代牛女惜曉更」を賦して應製す  
 九月九日公宴に侍して「群臣壽獻」を賦して應製す又後朝「秋雁掃聲來」を賦して應製並に序あり  
 同月二十日公安鎮四の赴任を送るの詩あり句中に「無兄無弟身初老」の語あり  
 十二月五日公左京大夫を兼ぬ  
 同月廿一日公諸公主中宮爲する修功德願文を作る  
 五年癸丑 公年四十九  
 正月公内宴に侍し同く「開春樂」を賦して應製す  
 二月天皇御製梅花を題して「臣等」に賜ふの句中に「今年梅花減去年」の歎あり依て公は長句を獻上して貝に其所由を述ぶ  
 此月時平中納言に任じ右大將を兼ぬ  
 同月十六日公進んで參議に任じ同日に式部太輔を兼ぬ  
 同月廿二日公左大辨を兼ぬ大輔元の如し是れ公家業を繼ぎ博覽多才を以て天皇登庸するあり  
 此月公釋奠して禮講古文孝經同く「以孝事君則忠」を賦して應製す

三月十五日公御解山長官を兼ぬ  
 四月三日公春宮の亮を兼ぬ  
 閏五月十八日公奉勅時仁王會咒願文を作る  
 七月朔日公春宮の亮を作る  
 同月七日公「七夕秋意」を題して應製す  
 八月公釋奠して禮記を講するを聽き同く「養養老」を賦して應製す  
 九月重陽の夜公「感寒虫」を賦して應製す  
 十一月二十五日、公中宮の令旨を奉り第一公主四十齡を賀する願文を爲る  
 六年甲寅 公年五十  
 二月勅して「既梅花之題」を賜ふ公之れを賦して應製す  
 三月勅して「上巳櫻下御製之詩」を賜ふ公恩旨を奉りして詩一首を獻す  
 七月公紀長谷雄と共に御製「七夕祈秋穂之詩」を奉和して上す  
 八月廿一日公遣唐大使に任ず參議勸解山長官兼守左大辨行式部權大輔春宮亮故の如し同日紀長谷雄遣唐副使に任ず  
 九月公重陽宴に侍し同く「天淨藏寶洞」を賦して應製す  
 後朝又「兩夜紗窓」を賦して應製す  
 同十四日公状を上げて僧中座の事を奏し遣唐使の進止を議定するの状を上す初隨遣唐使を止む蓋し當時唐國內亂を生じ航海の危険なるによるなり  
 同月廿五日菅家の門生吉祥院に於て公の五十の賀を修む中一老翁來り願文に添るに沙金を以てし告げずして去る是れ帝か公の賀を述らしものなり  
 同月廿七日公「秋盡感菊」を賦して應製す  
 十二月十五日公は侍從を兼ぬ大辨、大輔、長官、亮、故の如し  
 此月渤海大使表文藉再來朝す公奉勅、鴻臚館に迎接す文藉公の所

作の詩讀を見て嘆して曰く「風調白樂天」  
 七年乙卯公年五十一  
 正月十一日公近江守を兼ぬ  
 二月公釋奠して論語を講するを聽き同く「爲政以德」を賦して應製す  
 三月三日天皇神泉苑に幸し櫻花を觀日上巳宴を群臣に賜ふ公同く「煙花曲水紅」を賦して應製す  
 同月廿六日公春宮に侍し令を奉りて十事の題目を賦す三刻にして成る  
 七月七日天皇「七夕」の題を賜ふ公應製す  
 九月九日公重陽の宴に侍し同く「秋日懸清光」を賦して應製す後朝又「花有淺深」を賦して應製す  
 十月十六日公奉勅時仁王會咒願文を作る  
 十一月十一日春宮權太夫を兼ぬ  
 此月皇太子令あり公をして讃州客中詩集兩軸を啓進せしむ  
 八年丙辰 公年五十二  
 正月公清涼殿の内宴に侍し公卿文人と同く「春先梅柳知」を賦して應製す  
 同月六日天皇雲林院に幸し子日の賦あり公供奉し諸臣と同じく「花開理管絃」を賦して應製す  
 四月公春宮に侍るの次又た令を下して曰く去年十首既急遽を知る今當時二十物を取り重ねて題詠の詩律を要せらる公令を奉り西二刻より戌二刻に及んで篇數成り上覽に供す皇太子甚だ美歎す  
 七月五日公隱者をして檢稅使可否を反覆せしめんとを請ふの状を上る  
 同月公遣た囚人拘放を奏する状を上る  
 八月十六日公南源相公先考大臣周忌法會願文を爲る  
 同月二十八日公民部卿を兼ぬ權太夫、辨、侍從使等元の如し

九月九日公重陽の宴に侍し同く「菊花催曉醉」を賦して應製す後朝又同く「秋深」を賦して應製す  
 同月十一日太宰府奏す慶雲見ると  
 十月公奉勅公卿隨國慶賀を賀するに答ふる勅書を作る  
 此年紀長谷雄文選を請す此時公文選に倣點して秀才淳茂に與ふ  
 九年丁巳 公年五十三  
 正月公内宴に侍し同く「殿前梅」を賦して應製す  
 三月公第三皇子齊世親王に陪し「花亭勸春酒」を賦して應製す  
 同月十九日公奉勅雜樂を三宴に供施す仍て詩を作る同日又臨時仁正會別願文を作る  
 六月十五日時平大納言に任す左大將を兼ぬ  
 同日公源光と共に權大納言に任じ右大將を兼ぬ又氏の長者となる  
 七月三日皇太子敦仁親王禪を受く于時年十有三此より先き宇多帝世を避れて佛門に入らんと欲す乃ち公謀り遂に位を讓り公と時平との二人をして之れを輔佐せしめ自から文書を内觀して奏することし剛誠を新帝に授け禪位の翌日薨逝して僧となり仁和寺の御室に住す是れを寛平法皇とす  
 同月十三日公正三位に叙す  
 同月十六日公中宮太輔を兼ぬ民部卿故の如し  
 此月公藤原實根推鸕の狀を上せて大内記を授んことを請ふ  
 八月十五日夜公同く「秋月如桂」を賦して應製す  
 九月九日公重陽の宴に侍し「觀群臣揮毫」を賦して應製す  
 後朝又朱雀院に侍し同く「閑居樂秋水」太上天皇の製に應じ並に序文を作る  
 十月三日皇太子即位是れを醍醐天皇とす  
 此年管原輔正生る  
 醍醐天皇昌泰元年戊午 公年五十四  
 正月公清涼殿の内宴に侍し同く「草樹暗迎春」を賦して應製す  
 二月天皇清涼殿に御し群賢の治要を受く紀長谷雄侍讀す此時天皇

歳十有四時平二十八公と相共に上皇の勅命を受けて幼帝を輔佐し萬機を攝行す  
 四月乙巳昌泰と改元  
 六月三日天晴して入面を知らず  
 九月四日公太上天皇に諸納言等をして共に外記に參せしめんことを請ふの狀を上る  
 同月九日公重陽の宴に侍し群臣と同く「菊有五美」を賦して應製す  
 後朝又宴に朱雀院に侍し同く「秋思入寒松」を賦して太上皇の製に應ず  
 同月十九日公重て太上皇に諸納言の所疑を決する狀を上る  
 此月上皇雲林院の山性に幸す時に和田律師桃源の仙杖を獻す公其取行を作る  
 十月法皇吉野宮淵に行幸す公應從し數篇の詩歌あり  
 同月十七日公第九皇子の詩亭に陪し「對殘菊待寒月」を賦す  
 二年己未公年五十五  
 正月三日天皇朱雀院に幸す公供奉し群臣と同く「春雨洗華」を賦して太上皇の製に應す  
 同月公は内宴に清涼殿に侍し同く「鶴出谷」を賦して應製す  
 二月天皇太上皇に朝觀して朱雀院に幸す公應從して同く「殿前梅花」を賦して太上皇の製に應す  
 同月十四日公右大臣に任す右大將、民部卿、中宮大夫等故の如し  
 同日大納言時平左大臣に任し天皇の外祖藤原高藤及仁明の子源光は共に大納言に任す  
 同月廿七日公上表して初て右大臣を辭す  
 翌廿八日天皇中使左中辨在原友干をして其表か返さしめらる  
 三月三日公朱雀院柏梁殿に侍し同く「惜殘春」を賦して太上皇の製に應す  
 同月四日公は再び上表して右大臣を辭す然れども尤されず同日中使右少辨をして其表を返す

同廿八日 は又重て上表して之れを辭す併に尤されず即時に之を返さる  
 六月廿六日公奉勅臨時仁正會の別願文を作る  
 九月九日公重陽宴に侍し同く「菊散一盤金」を賦して應製す  
 同月晦日公「殘菊」を賦して太上皇の製に應す  
 十月公朱雀院太上皇の勅を奉して重て尊號を停んと請ふの狀四條を作る  
 此年天皇神泉苑に幸せんと欲す公諫て之を止む  
 三年庚申 公年五十六  
 正月公内宴に侍し同く「香風詞」を賦して應製す  
 同月天皇朱雀院に行幸す公應從す太上皇帝と謀り公をして關白たりしめんとの内詔ある公固辭して已ます太上皇詩題非御衣を賜ふて退出せしめらる時平切かに其旨を聞き大に恨むと云ふ  
 二月六日公上表して右近衛大將を罷んことを請ふ帝允さす天使藤原實根をして表を返して之れを優慰す  
 七月薨屋出つ  
 八月十六日公の三代家集二十八巻を獻す 天皇親感御製の詩を賜ふ公應て御韻に次して奉獻す  
 九月九日公重陽宴に侍し同く「寒露深」を賦して應製す後朝又同く「私恩」を賦して應製す天皇御感の餘り御衣を賜ふ恩賜の御衣是なり  
 十月公「冬日感庭前紅葉」を賦して秀才淳茂に示す  
 同月十日公又重て上表して武官を辭す帝命許して許さず公重て辭することを得ずして止む  
 同月十二日三善清行書を公に寄せて「天道革命の運君臣尅賊の期近つくなし公に急流勇退を勸告す然れども公は此まで表を上すること四回旨の嚴重を慎み清行の贈言を願ひず現んや清行は翌十一月に至り革命議を上り荒誕無稽を爲して公の榮耀を嫉妬するに出でしをや時平は此より先き上皇の才賢を寵するを如く見

咀を加ふも雖も其驗なし此時に丁り時平密に源光、藤原定國、藤原實根等と相謀りて百万諸國を容る天皇稱之れを疑ふ又時平が妹皇后たり能を得るを以て故に内外通行はれ公の身の危きこと恰も火山に座するか如くにして此年を終る  
 延喜元年辛酉 公年五十七  
 正月朔日薨す  
 同月七日公從二位に叙す  
 同月二十五日公選に太宰權帥に左遷す同日源光右大臣となる  
 上皇之れを聞き大に驚き將に帝を諫て之れを容せんさす其夜駕を命じて禁闕に幸す時平等早く之れを察し故に看門の徒をして固守て開かざらしむ更深上皇空しく還る  
 二月朔日公は勅使左衛門佐藤原武興等の衛士に隨せられ京師を發す公を送りて攝津國に至り武興は馬より下りて公の前に涙を垂れて別れを告げて去り獨り左衛門少尉善友衛門、二人を率ひて筑紫送送行す公は此月下旬太宰府に到り邪外の淨妙院所謂觀寺に入りて門外一步を出ずして隨憶して命を待つ不出門の作あり  
 四月公偶自詠の詩「離家三四月」の語あり又樂天北隱三友詩を讀みて感あり長篇を作り詠々呼嗚悵悵當時の實蹟史と謂ふへし  
 七月十五日延喜と改元す  
 八月公は開元の詔書を讀みて詩を賦し又「閑旅雁」の詩あり  
 此月京師に於て藤原時平大藏善行奉勅、清和、陽成、光孝の三代實錄五十巻を撰ぶ公其撰に預ると雖も斯書の成立に消いて調邊に値ふ故に其名を除く  
 九月九日公關地に在りて九日の作あり又た昨年今夜重陽の宴に侍せしことを想ひ「去年今夜侍清涼」の作あり  
 公又た一日幼男幼女を慰むるの作あり  
 此月公親意百韻あり公の巡關中に係る周圍外物の慘怛と公の意中の哀痛なるを溢出して餘蘊なし公の關居の實蹟史と謂つへし  
 同月十九日公「秋夜」を賦す

同月廿二日京師より家齊到り陸奥守藤原滋實の計を告ぐ公之れを  
哭して長句を作る

十月公東山小雲一賦す

十一月又京師より家齊至る公之れを讀みて七律の詩を作る

公又白晝陰を賦し「露夜思家竹を賦す又「隱鐘聲」の一絶あり前の  
「今月今夜」の一絶と聯珠して公一片の誠心を發露す

十二月十四日式部卿本康親王薨す公奉哭の詩あり

同月十九日立春す詩を題して意を道る

此月公南館夜聞都府禮佛懺悔の一絶あり

斯の如にして公は延喜元年の日月を滿地に送らる

二年壬戌 公年五十八

公は太宰府の遷謫に在りて年を迎へ

正月歲日の感慨を賦すの詩あり

二月公は手から菊を植へ「種菊」の詩あり

此月一山僧あり公の隨居を訪ひて杖子を贈る 公感ありて其詩を題  
す

同月十九日公偶一絶を賦し「郭四路北賈人聲」云々の句あり

又公に夜雨を題する十四韻あり又風雨の作あり公は神慮の身を  
以て一初小人の爲に「陷穽せられ忽然此の悲むべきの境遇に投し衣  
食の路さへ全く杜絶し零落困窮を狀す」からざるものあるを見ら  
るへし

此頃通事李彦環公に唐物竹編鉢を送り來る公詩を賦して之れを謝  
す

○公大内記小野美材の計を聞き古調一篇を作る

八月公の幼男某夭逝す公之れを哀み一絶を賦す末句に「唯無童子  
讀書聞」の語あり

九月公「題官舎幽趣」の六韻あり又「秋晚題白菊」「晚望遠寺」「同  
秋日」「代月替」「九月盡」の諸作あり

同月十五日公「秋夜」の一律あり句々悲慘、字々悽愴殆んど座讀に  
耐へざるものあり

隨て公に滅燈の二絶あり公は本と讀書の人なるか故に最も燈光を  
要す

然るに膏油盡きて書を讀むこと不能漸く寒窓の下に於て纒に月明  
を假ることさへありし迄に生活の窮窮なりしことを知らる

此冬公に病中の二個作あり曰く病退衰老到。愁趣隨居來。此感透無  
處。一觀音念一圓知るへし公は其身の不運を天に祈り佛を念して其  
障難を除却せんことを求めて驗なき而已か。周圍の事物は益々其悲  
觀を添ふのみにして遂に絶望的の傾向を惹起すに至れり此れ其個  
作のある所以なるへし

公は殆んど出家の如き生活を爲し深く觀世音を信し不斷齋戒して  
精進を務め兼座を食はず酒盃を把らず朝夕只法華經を誦讀しつゝ  
斯る慘怛苦楚の現境に呻吟して以て延喜二年の歳を滿土に送らる

三年癸亥 公年五十九

公は體風して解けざる 萬斛の愁を抱き再び新春を迎へられしも始  
終一室の裏に發居して未だ曾て山野の間に放策せしこともあらず  
如何ぞ能く其健康を保持せん身軀瘦削して衰態を現はし加るに脚  
氣さ瘡癩を以てせしこと彼の夜雨の作に於て知らるへし

二月公「隨居卷書」を賦す

其詩に曰く。盈城溢郭幾梅花。猶是風光早歲華。雁足黏將經繫信。  
鳥頭點著憶歸家。是れ公の病中最後の作にして公は病中尙ほ戀々  
として梅花を忘るゝ能はず遂に梅花を以て絶筆となすに至れり公  
十一歳にして始て梅花の作あり梅花を以て起り梅花を以て卒る首  
尾相結する所謂つへきなり結末の「憶歸家」の三字は公が末期に及  
ぶ迄無難發覺して歸洛の命あらんことを俟たれしものあるを知る  
其中情實に惻怛に堪へざるものあるなり

此より先き公は其病の瘡へざるを知り左遷後の詩作を集め國の中  
に納め公の知音なる中納言長谷雄に贈らる長谷雄之れを見て天  
を仰て歎息し其深恩絶妙にして天下無雙なるを言へり今世に傳る

菅家後草是なり

二月廿五日の曉天公隨居の官舎に薨す公の遺命に隨ひ府官家人相  
謀りて安樂寺に葬る今の廣所是なり

附 録

六月京師に風雷あり七日七夜に亘る

四年甲子 公没後二年

二月皇子保明を立て皇太子とす時に二歳世藤原藤子時平の妹なり

三月法皇京字を仁和寺に營む金剛界三十七尊及外院天竺三殿耶の  
形を安す

法皇其側室に禪居す之れを御室御所と云ふ

此年法皇叡山于光院に幸し御室を造る

五年乙巳 同三年

正月三日帝法皇に朝謁して仁和寺に幸す

同四日帝時平が館に幸し大饗あり

八月十九日安樂寺に於て始て公の神殿を營む味酒安行動を奉して  
之を奉す其後藤原仲平相續きて奉行し

同年十九年に於て遺體發功す

九月天皇金峰山に幸す

十一月左大臣時平等奉勅延喜格を撰ぶ時平自から其序を作る

六年丙寅 同四年

三月釋增命天台座主なる法皇山に上りて之れを賀す

七月大納言右大臣藤原定國卒す定國は天皇の外舅なり

七年丁卯 同五年

此年法皇熊野に幸す

八年戊辰 同六年

十月藤原實根卒す

九年己巳 同七年

四月左大臣藤原時平薨す時年三十九

十年庚午 同八年

六月天下大旱

十一年辛未 同九年

正月朔日蝕す

十二年壬申 同十年

此年菅家萬葉集を進む

十三年癸酉 同十一年

三月右大臣源光逝去す

此年公の嫡子故從五位下右大辨大學頭高祖卒す歳三十八

十四年甲戌 同十二年

五月二日京師大火六百七十七戸連焼す

六月大水あり

十五年乙亥 同十三年

此夏天下瘴流行す

七月五日二鼓日暈なし形月の如し

十六年丙子 同十四年

五月廿一日大風雨鴨川溢る

十七年丁丑 同十五年

十二月朔東大寺火あり講堂僧房百二十四間焼く

十八年戊寅 同十六年

此年洪水淀川海の如し舟行を止む

八月法皇大學寺に於て灌頂の事を行ふ

十九年己卯 同十七年

七月五日帝僧増命を仁壽殿に命し金剛般若經を受く

此年安樂寺公の神座成る藤原仲平之を奉行せしなり

二十年庚辰 同十八年

五月渤海使裴璆又來朝す正三位を授けて贈國せしむ

二十一年辛巳 同十九年

十月僧空海に誡して弘法大師と云少納言平惟扶勅となり高野山に  
登りて之れを宣す



二十二年壬午 同二十年  
 此夏大に旱す  
 延長元年癸未 同二十一年  
 正月十一日延長と改元す  
 二月無品上總守齊世親王出家す  
 三月廿一日皇太子保明親に薨す時に年二十一  
 此年帝大に悟る所あり  
 四月二十日詔命を下して公の本官を復し正二位を贈り併せて昌泰  
 四年正月廿五日の宣命を燒却せらる  
 五年丁亥 同二十五年  
 十月左大臣藤原忠平奉勅延喜式五十卷を撰ぶ  
 八年庚申 同二十八年  
 六月廿一日京師に雷電あり藤原清實平希世清涼殿に於て震死す  
 九月二十日天皇位を太子に譲る二十九日天皇崩す聖算四十六歳  
 關寺の邊に葬る仍て醍醐天皇と稱す即位三十三年  
 朱雀天皇承平元年辛卯 同二十九年  
 六月八日京師大震降る  
 七月十九日宇多帝崩す  
 二年壬辰 同三十年  
 此年平將門東州に反す  
 四年甲午 同三十二年  
 此年伊豫掾藤原純友反す  
 天慶三年庚子 同三十八年  
 二月將門謀に伏す  
 四月純友太宰府を亂掠し浦城に據る朝廷小野好古を遣りて之を討  
 す純友雖て謀に伏す  
 村上天皇天曆元年丁未 同四十五年  
 六月天皇公の遺徳を追慕して京師右近馬場へ崇祀す是を北野祠と  
 す

一條天皇正曆四年癸巳 同八十七年  
 五月二十日天皇公の徳を尙ひ左大臣を贈る勅使散位菅原幹正太宰  
 府安樂寺の廡所に就きて宣命す  
 十一月二十一日尙又公に正一位太政大臣を贈る勅使菅原朝臣爲理  
 太宰府に下りて宣命す  
 寛弘元年甲辰 同九十八年  
 十月天皇始て北野祠へ行幸す蓋し神驗を感ずるによるなり

# 太宰府史鑑下編目次

## 史 傳

- ◎太宰少貳藤原廣嗣の擧兵
- ◎藤原純友太宰府を擾亂す
- ◎安德帝太宰府の蒙塵
- ◎元寇の襲來太宰府警護所の防禦
- ◎武藤少貳の家系及太宰治方治亂の概蹟
- ◎岩屋城主高橋紹運の遺蹟及地方治亂の概狀

## 官 社

- ◎官幣中社太宰府神社
- ◎官幣小社竈門神社

## 故趾舊跡

- ◎竈 門 山
- ◎染 川
- ◎幸 橋
- ◎勝 禪 寺
- ◎岡 見 山
- ◎佛 頂 山
- ◎石 踏 川
- ◎原 山 寺 址
- ◎智 光 寺 址
- ◎寶 滿 山 城 址
- ◎小 岳 山
- ◎思 川
- ◎横 岳 山 崇 福 寺 址
- ◎探 題 の 城 址
- ◎釋 心 蓮 の 塔

太宰府史鑑下編目次

- ◎淨戒座主の宅址
- ◎般若寺址
- ◎湛慧禪師墓
- ◎淨明寺
- ◎松峽宮址
- ◎水城堤防の址
- ◎學業院址
- ◎四王寺山
- ◎國分寺
- ◎天拜山
- ◎天拜山の古城
- ◎續命院址
- ◎城山
- ◎紫野
- ◎釋迦院址
- ◎隈厩墓
- ◎快嘉律師の墓
- ◎威徳寺
- ◎太宰府址
- ◎觀世音寺
- ◎山王社
- ◎白川
- ◎衣懸天満宮
- ◎天拜山菅原神社
- ◎飯盛山の古城
- ◎御笠の森
- ◎蘆城
- ◎臨泉庵址
- ◎金剛兵衛盛高墓
- ◎辨君の墓
- ◎有智山無量教寺址
- ◎都府樓の址
- ◎戒壇院
- ◎苜荳關
- ◎善正寺址
- ◎金掛梅
- ◎武藏寺
- ◎湯町の温泉
- ◎漆川
- ◎天山

### 太宰府史鑑下編年表

後鳥羽天皇文治元年 三月廿四日安徳帝長州壇浦に崩す  
 二年 六月十五日安樂寺廿一代の別當安能僧都平家に同意せしと頼朝より感命を下す十二月七日頼朝文書を安樂寺へ下す  
 三年四月詔を奉て安徳天皇と稱す  
 建久二年 長門に勅して阿彌陀堂を建て安徳帝の冥福を薦す  
 七年 武藏資頼太宰少貳に任す  
 安貞元年 少貳資頼職を辭す資能嗣ぐ  
 二年 八月廿五日少貳資頼卒す  
 龜山天皇文永五年 正月一日高麗の使者潘阜等筑前に來り蒙古の書及び國書方物を太宰府に奉す  
 關正月資能其書を鎌倉に致す  
 六年 三月七日太宰府の報六波羅に至る  
 八年 九月十九日元の趙良弼太宰府に至る直に追還す  
 九年 二月廿五日太宰府の守護所管下將校をして肥前筑前の要害を警備せしむ  
 十年 三月趙良弼復た太宰府に至る京に入るを待せず去る  
 十一年 正月元洪茶正に命じ高麗の遣艦を監督せしむ  
 三月元祈都洪茶を以て海陸軍に將たりしむ  
 五月元兵一萬五千人高麗に至る十月五日元の軍艦對馬佐須浦に來る  
 十一年 十月十七日太宰府の警報六波羅に達す、十九日賊軍水陸並に進む  
 二十日大風雨賊艦悉く碎け其兵多く溺死す餘賊皆遁る  
 建治元年 元の使者杜世忠太宰府に來る  
 十一月幕府北條實政を太宰府に遣し元寇の防禦を督す  
 三年 十二月元再舉を圖る  
 弘安二年 六月廿六日元將夏實范文虎等を齎らしむ太宰府に至る北

條時宗之を博多に斬る  
 四年二月十八日少貳資能海防を申取す  
 五月三日元軍合浦を發す六月賊軍對馬壹岐を陥れ筑前博多に至る  
 七月一日夜颶風大に起り賊兵悉く溺死す生て還るもの僅に三人七月十三日少貳資能元兵と戦ひ疵を蒙り遂に卒す  
 伏見天皇正應元年 八月二日少貳資能卒す條時宗嗣ぐ  
 花園天皇延慶元年 正月廿五日少貳資能卒す眞經嗣ぐ  
 永仁元年 三月北條兼時鎮四の探題たり  
 後醍醐天皇元亨元年 九月幕府少貳眞經及び大友貞宗に命じ鎮四警固の庶務を協理せしむ  
 正段二年 三月後醍醐帝船上に幸す少貳眞經大友貞宗菊池武時と官軍に隨せんと密奏す後賊軍に屬す菊池武時之を討て博多に死す  
 建武二年 十月足利尊氏反す軍敗れて四州に走る  
 延元元年 二月菊池武時少貳資能を三木に討ち奪て内山城を陥る眞經自殺す有智山中常原等の佛殿坊舎此時の兵火にかゝりて燬亡す  
 武放尊氏と多々良濱に戦ふ軍敗れて肥後に退く  
 四月廿六日尊氏太宰府を發し進て京師を侵す尊氏高橋光種仁木一色三人を九州檢斷職とす六月四日一色道隆菅原和歌所に山地三十町を寄附す  
 後村上天皇 興國元年眞親王征西將軍となり肥後に駐り奪て太宰府に移る  
 正平五年 五月少貳資能後に入り菊池新田の諸族と戦ふ  
 六年 七月足利直冬太宰府に在り  
 十三年 正月探題一色直義頼朝を古洲城に攻む  
 八月元亡ふ明主朱元璋位に即き使を遣す太宰府納れず  
 十四年 三月頼朝菊池に叛き武光の軍を遣る  
 五月廿八日頼朝兵を太宰府に舉ぐ  
 七月頼朝菊池武光と筑後國大原に戦ふ  
 十六年 正月大島居男龜松丸少貳武氏と争ふ其兵來り攻む龜松丸水田

に走る  
 十七年 七月頼朝菊池武光と大宰府に戦ふ  
 七月廿九日河野六郎通直大宰府に來り征西將軍に謁す  
 十月菊池武光征西將軍宮を奉り大宰府に入り足利の兵を退く  
 足利氏常九州探題に補せらる  
 廿二年 三月菊池武光有智山城を攻む頼朝遣れて大友に倚る  
 三月廿八日頼朝菊池武光と島海に戦ふ  
 長慶天皇 建徳二年二月今川貞世九州の探題たり  
 十二月十五日少貳頼朝卒す冬資嗣ぐ  
 文中元年 三月今川貞世菊池武光を高真山に討つ武政兵を出し貞世  
 夜須郡小田原に戦ふ  
 後龜山天皇 文中三年三月三日、足利義滿菊池を討つ和議成り九州  
 平定して京師に還る  
 天授元年 少貳冬資生葉城を築く  
 八月冬資義滿に背き武政に通し今川了俊を討んと謀る  
 八月十九日冬資力窮し肥前神崎に自殺す頼朝聞く  
 同月征西將軍宮大内義弘と豐前門司に戦ふ  
 十一月十一日少貳頼朝卒す貞頼嗣ぐ  
 二年 正月今川貞世大宰府を保つ  
 元中八年 足利家滿五山の僧を九州に遣し貞頼菊池を諭し今川と和  
 せしむ  
 九年 南北朝和議成る神壽京師に還る  
 應永元年 源義滿太政大臣たり  
 三年 今川了俊九州探題を止め京師に還る大内義弘の議に依る  
 四年 足利義滿將軍職を辭す義持嗣ぐ  
 應永四年 六月大内義弘少貳貞頼を討つ貞頼匿屋に出軍す  
 八月少貳貞頼大内と應大宰府に戦ふ府中致願す  
 十一月大内義弘太宰大貳たり貞頼義弘と和す  
 五年 二月探題澁川滿賴貞頼を討んと肥前に發向す

六年 十月義弘九州中國の兵を卒ひ將軍家に叛く義弘兵敗れて死す  
 八年 二月貞頼千葉探題か居城綾部を圍む  
 十一年 六月廿三日少貳貞頼卒す十代滿賴嗣ぐ  
 稱光天皇應永廿五年 澁川義俊九州探題たり肥前綾部に居る  
 三十二年 少貳滿賴義俊を破る義俊敗る大内に乞ふ  
 後花園天皇永享三年 六月廿四日少貳資嗣大内氏と佐賀に戦ふ  
 十月三日探題滿直資嗣を追ふて佐賀に至る  
 四年 五月少貳滿賴秋月滿賴と戦はんとす大友之を和解す  
 六月十五日博多祇園社祭禮少貳の兵三原か兵と闘す  
 五年 三月大内持世有智山城を攻む滿賴秋月に走り生葉城に據る  
 八月十六日少貳資嗣肥前鹿子に戦死す  
 同月十九日少貳資嗣秋月滿賴の城に卒す  
 七年大内教弘探題と兵を合せ少貳兄弟を捜索す  
 嘉吉元年 正月少貳嘉頼對馬に卒す教頼嗣ぐ對馬より起り大宰府を  
 復す八月赤松足利家に叛く教頼出軍遲延す足利軍を費て之を討つ  
 教頼軍敗れて大宰府に退き有智山城に據る  
 十二月廿五日大内か兵教頼を攻む教頼對馬に還る  
 文安三年 教頼幕府の内書を受く  
 四年 教頼對馬を出て肥前に至る  
 五年 教頼龍造等に就き興賀の城を築く  
 享徳三年 三月教頼探題教直と肥前巨勢野に戦ふ  
 康正元年 九月教頼潛かに松浦より高祖の城に至る  
 后土御門天皇貞正三年 少貳頼忠宗貞盛と共に將軍義政に謁す名を  
 政尚と改む  
 應仁元年 教頼對馬の兵を率て水城に至る軍敗れて死す  
 細川山名京師に於て戰闘す是を應仁の亂と云ふ  
 文明元年 正月少貳政尚對馬の兵を率て大宰府に至る  
 五月政尚大宰府に入り本領を復す  
 十二月大内の兵筑前箱崎に入り政尚を攻んとす政尚固く守て降ら

二年 正月陶弘毅有智山城を攻む  
 正月將軍義政使を遣し政大内と媾和せしむ  
 十年 九月政大内に在り菊池隆大友政親と會盟す  
 十二年八月宗祇法師筑紫に遊ひ禮唐に詣す  
 十四年 政大内前興賀の城を築く  
 少貳滿賴家を嗣ぐ九月政大内探題澁川か攻む澁川筑後に走る  
 十五年 九月政大内と戦ふ大内敗れて赤馬關に退く  
 十八年 十月千葉胤胤將肥前小城の城を襲ひ胤胤朝を殺し政大内の胤胤  
 資を迎へて嗣ぐす  
 長享三年 政大内大友政親と會盟し其女を娶り共に澁川探題を逐ふ  
 明應元年 五月六日政大内和義と和議に戦ふ社家民家兵變に罹る  
 二年 政大内前伊萬里、山代等の逆徒を討つ  
 三年 政大内前波多江草野佐志田等を率ひ肥前青山の城を陥る  
 四年 正月高祖京師に至り幕府に謁す大宰少貳に補せらる  
 五年 政大内大内義弘と戦ひ之を却く  
 高祖高祖城を占領し之に據る  
 六年 正月大内和義興、政大内を討つ二男頼隆戦死す、政大内多城に  
 自殺す大内義興、太宰大貳に補せらる  
 七年 二月政大内の三男資元、大友政親の女を娶る  
 八年 正月十六日少貳資元、大友政親の女を娶る  
 後柏原天皇文龜二年 正月十六日資元の親族、馬場、横岳等と會し、  
 探題澁川胤胤を攻む  
 永正元年 大友兵を資元に乞ふ資元一族を遣し之を救ふ  
 三年 資元大友と兵を合せ大内を苦しむ  
 大永三年 資元筑紫滿門と和す  
 四年 正月十八日資元親族と謀り、筑紫滿門父子三人を殺し其地を  
 畧す  
 七年 正月筑紫尚門大内義興に倚り資元を討て父兄の讐を復せん、

とを謀る  
 後崇真天皇享祿元年 少貳資元筑前に入り大宰府を復せん  
 冬尙太宰少貳に補せらる  
 十一月二十日大内義興卒す義隆嗣ぐ  
 二年 四月大内義隆杉興速をして資元を討たしむ  
 冬尙大内の兵と夜須郡田原原に戦ふ  
 三年 八月大内義隆其將筑紫尚門等を率て冬尙を攻めしむ  
 四年 四月冬尙大友と筑後に會し星野以下追討の事を幕府に乞ふ  
 天文元年 資元大友と會し探題澁川滿長と會し親を結ぶ  
 十月滿道入道大宰府に入る且大内大友の兵多々其源に戦ふ  
 二年 正月滿道入道後御原御井の二郡を收む冬尙大友と義絶し大内  
 と媾和す  
 冬尙肥前盛福寺の城を守る  
 四月義隆朝命を奉り九州を平定す  
 七月大内兩滿道が兵龍造寺に襲撃せられ一敗す十月義隆大軍を  
 率ひて大宰府に入る  
 十二月義隆大宰府に在り媾和を資元父子に告げしむ父子之れに従  
 ひ兵を止む  
 四年 十二月滿道入道肥前に在り資元父子を逐ふ  
 五年 九月四日少貳資元力盡きて自殺す  
 九年 冬尙行佐賀に至る  
 十一月冬尙大友義隆に會盟し新好を温む  
 十一年 三月廿九日千葉義胤卒す少貳氏胤其家を嗣ぐ  
 十二年 冬尙龍造寺に叛く龍造寺兵怒て之を逐ふ冬尙有馬松浦に倚  
 て回復を図る  
 十三年二月龍造寺有馬と多久に戦ふ  
 十六年 七月大内の將杉隆満等冬尙を討つ冬尙敗れて筑後に退く  
 二十年 冬尙兵を出し龍造寺を攻んことを謀る  
 弘治元年 冬尙名を時尙と改む

正親町天皇永祿二年 正月龍造寺清福寺の城を圍む、同十一日時尙自殺す  
 正月龍造寺隆信大兵を以て冬尙を清福寺に圍む冬直力盡て自殺す弟政興回復を圖る  
 四月十日高橋種實寶滿岩屋の兩城守とし二千町の領地を添へ筑前五十五郡の執權とす  
 四年 資元の末子元盛高野山に登り雄髮す  
 十年 毛利大友和隣破る  
 六月龍種大友氏に叛く  
 七月七日大友の諸軍寶滿岩屋を陥し龍種小倉に退居す此兵亂を避け天滿宮神休を寶滿山東谷に移す敵兵退き木殿に奉還す  
 十一年 月次龍種白杵龍種等立花龍種を誅す  
 元龜元年 高橋龍種寶滿岩屋の城主たり  
 天正二年 大友より大畑二門を立花に附る世人之を奇とす  
 三年 三月少貳政興龍造寺に據る後竹崎に死す少貳氏亡ぶ  
 六年 十一月八日大友宗麟島津義久と日向國耳川に戦ふ大友敗れて還る  
 紹運秋月種實と御笠郡柴田川に戦ふ  
 十二月三月秋月種實か家臣北島玄蕃放火安樂寺天滿宮の社炎上  
 七年 正月十一日大友龍種龍種を討つ龍種續く  
 八年 筑後非の口の城主間注所治部龍種秋月に屬す  
 紹運の家臣北原鎮久反を謀る事發覺して誅に伏す  
 十年 九月筑紫廣門御笠郡に亂入す  
 十一月 十月十三日立花の兵杉十郎と被手郡小金原に戦ふ  
 十一月 八月十八日統虎立花道雲の養子たり  
 十二年 二月八日筑紫か家臣茶商と偽り岩屋を燒く  
 三月廿四日龍造寺隆信島津の兵と島原に戦ふ敗て死す  
 八月十八日紹運道雲筑後國上妻郡熊尾に出軍す  
 十三年 九月十一日道雲筑後高良山に卒す

十四年 二月大友宗麟大坂に行き秀吉に謁し出軍を乞ふ  
 六月島津義久大軍を發し筑前豊後に入り大友岩屋立花を攻んとす  
 同月六日高良山に着す  
 七月七日筑後川を渡り  
 同月八日筑紫か居城勝尾を陥る  
 十四年 七月十日紹運頼文を寶滿宮に奉る  
 七月十二日薩軍太宰府に寄す  
 同日立花の使者十時藤津守岩屋に来る  
 同十三日薩軍の使者莊嚴寺及び黒田孝高の使者岩屋に入る  
 同十四日薩の總軍岩屋城を圍む  
 同廿六日岩屋城破る  
 同廿七日岩屋城陷る紹運節に死す  
 同月横岳山崇福寺兵火に罹り燒失す  
 八月十六日大阪の先軍柳か浦に至る  
 八月廿四日薩軍立花を攻ること能はずして退く  
 八月廿五日立花の兵は高島居の城を復す尋て岩屋城を復す  
 十五年三月朔日秀吉京師を發す  
 四月五日統虎秀吉に謁す  
 四月十一日秀吉高良山に陣す  
 四月十三日秀吉肥後南の關に着す  
 四月廿一日秀吉肥後宇土に着す  
 五月七日島津義久秀吉に降る九州全く平定す  
 六月六日秀吉太宰府に着す聖唐參拜同所岩洞にて島津義久茶菓を獻す翌七日太宰府を發し箱崎に着す爰に滞留す  
 七月朔日秀吉箱崎を發し  
 同二日小倉に着す  
 同月廿一日秀吉大城に還る  
 小早川隆景筑前國主と爲り

十月十六日當郡にて管廟に神田二百町を寄附す  
 十九年 小早川隆景管廟を造營す今の神殿是也  
 文祿二年 大谷刑部吉隆福部神社を建立す  
 慶長二年 小早川隆景寶滿宮社殿及び石島居を建立す  
 三年 石田三成管廟の權門を造營す關ヶ原の役起り工半にして止む  
 七年 黒山長政筑前國守と爲り權門の工畢其外諸堂末社中門回廊神池の三橋石燈臺二基及び神領二千石を管廟に寄附す  
 九年 幕府筑後國水田にて神領千石の地を寄附す  
 寛永十八年 二月寶滿山講堂神樂堂鐘樓行者堂燒亡す  
 慶安三年 黒田忠之寶滿宮堂宇再建  
 寛文七年 黒田光之神池及び橋石柱を架す  
 十一年 龍門神社へ黒田光之山林八十萬坪を寄附す  
 延寶四年 檢校坊文庫を造營す徳川光國管廟に扶桑拾遺集を寄附す  
 八年 福岡寶子町浦了夢戒壇院を再建す  
 元祿元年 福岡寶子町浦了夢觀世音寺觀音堂を再建す  
 寛保三年 五月七日大島居信實清尙と成り延壽王院と號す  
 文化十年 上野勝從太宰府考を編集す  
 天保十年 伊藤常足太宰府管内志及び太宰府役を編輯す  
 慶應四年 九月十六日延壽王院の號を廢し西高辻と稱す  
 明治四年 六月太宰府社國幣小社に列し官祭とす  
 五年 六月社號を太宰府神社と稱す  
 十五年 七月三日太宰府神社官幣小社に列す  
 二十八年 一月十七日官幣中社に列す  
 十五年 合議所を官後に建築す  
 十五年 賊の濕布工事成る  
 十九年 六月廿三日西高辻信殿華族に列せらる  
 十九年 十月宮後の公園を開く  
 二十八年 十月六日龍門神社官幣小社に列す

# 太宰府史鑑上編

侯爵 黒田長成 校閱

高原謙次郎 纂述  
江島茂逸

## ◎神祇

奉幣、神託、奇異、疫災、

○文武天皇大寶二年十月丁酉。先是征薩摩隼人時。祈禱太宰所部神九處。實賴神威。遂平荒賊。爰奉幣帛以賽其禱焉。(續日本紀第二卷ヨリ抄出)

○神龜五年冬十一月。太宰官人等。奉拜香椎廟訖。退歸之時。(萬葉集第六卷)

○天平七年八月乙未。勅曰。如聞此日太宰府疫死者多。宜救療疫氣。以濟民命。是以奉幣彼部神祇。爲民祈禱焉。(續紀十卷)

○同九年四月癸亥。太宰管内諸國疫疠時行。百姓多死。詔奉幣於部內諸社。以祈禱焉。(上同)

○同十二年九月丁亥。廣嗣遂起反。勅以從四位上大野朝臣東人爲大將軍討之。云々。壬戌。詔大將軍東人。令祈請八幡神焉。(同十卷三卷)

神祇

○天平勝寶二年十月丙申朔。詔授正五位上藤原朝臣乙應從三位。任太宰帥。以八幡大神教也。

○同三年八月己亥。遣太宰帥三品船親王於香椎廣。奏伐新羅之狀。(十三卷上)

○同五年閏十月辛亥令太宰府。鎮祭管内諸國山岡崩壞之處。

○天平寶字六年十一月庚寅。遣參議從三位式部卿藤原朝臣巨勢磨。散位外從五位下土師宿禰大養。奉幣于香椎廟。以爲征新羅。調習軍旅也。

○神護景雲三年九月初。太宰府主神習宜阿曾磨。希上曰。媚事道鏡。因矯八幡神教言。令道鏡即皇位。天下太平。(同三卷)

凡奉幣諸神者。中臣齋部、共預其事而。今太宰主神司獨任。中臣不預。齋部所遺七也。諸國大社亦任中臣。不預齋部所遺八也。(古語拾遺)

○延曆十七年正月廿四日。太政官符。應任諸國神宮司神主事。右大納言從三位神主宣。奉勅掃社敬神。銷禍致福。今聞神宮司等。一任終身。侮黷不敬。崇答屢臻。宜自今以後。簡擇彼氏之中。潔清廉貞。堪神主者。補任限以六年相替。(類聚三)

○同十七年十月丁亥勅。國造、郡領、其職各殊。今出雲筑前兩國。慶雲三年已來。令國造兼帶郡領。託言神事動廢公務。雖有其怠。無由勘決。自今以後。不得令國造帶郡領。又國造兼帶神主。新任之日。例皆弃妻。取百姓女子。號爲神宮采女。便聚爲妾。托神事。遂扇淫風。穢之國典。理合懲肅。宜國司卜定一女供之。(類聚三)

(也國)

十月戊子。太政官府禁。出雲國造。託神事多聚百姓女子爲妾。云々。如違此制。隨事科處。筑前國宗像神主准此。(上同)

○大同三年七月十九日丙申。太政官府。應令國司出納八幡大菩薩宮雜物事。右得太宰府解備。太政官去延曆十八年十一月五日府備。府解太政官。去年十二月廿一日府備。大菩薩并比咩神封。一千四百十戶。宜納府庫者。豐前國府備。神宮司申云。比咩神封。六百千戶之物。與大菩薩封物共納府庫。由是春秋祭料。無物可用所。所申有實。謹請處分者。右大臣宣奉勅。宜府官檢校劑苑禁料。所殘雜物便納神宮。仍即府官々司相共出納者。府依府旨。相共出納。而道路稍遠有煩。遣使加以檢前例。神宮當國等司相共檢掌出納。望請准先例。付國與宮。共令出納。但年終用狀勘錄令申。謹請官裁者。右大臣宣。奉勅依諸(類聚三)

○承和四年十二月庚子。太宰府言。管豐前國田川郡香春岑神。辛國息長大姬大目命。忍骨命。豐比咩命。惣是三社。元來石山而土木惣無。至延曆中。遣唐請益僧最澄。躬到此山。祈云。願緣神力。平得渡海。即於山下。爲神造寺。設經。爾來草木翁鬱神驗如在。每有水旱疾疫之災。郡司百姓。就之祈禱。必蒙感應。年登人壽。異於他郡。望預官社。以表崇祠。許之。(續後紀六卷)

○同五年三月甲申。勅曰。遣唐使頻年却迴。未遂過海。夫冥靈之道。至信乃應。神明之德。修善必祐。宜令太宰府監已上。每國一人率國司講師。不論當國他國。擇年廿五已上。精進持經。心行無變者。度之九人。香

推宮二人。大臣二人。八幡大菩薩宮二人。宗像神社二人。阿蘇神社二人。云々。(同七)

○同六年八月己巳。勅太宰大貳從四位南淵朝臣永河等。得今月十四日飛驒所奏。遣唐錄事。大神宗雄。送太宰府牒狀。遣大唐三個船。雄本船之不完。侍駕楚州新羅船九隻。傍新羅南歸朝。第六船宗雄所駕餘八個船。或見或隱。前後相失。未有到着。艤之變。不可不備。云々。遣神祇少副。從五位下、大中朝臣儀守。少佑

正七位上大中朝臣藤守。奉幣帛於攝津國住吉神。越前國氣比神。並祈船舶之歸著。(同八)

○同七年九月癸巳。太宰府言。肥後國阿蘇郡。健磐龍命。神靈池。洪水大旱。未嘗增減。而涸竭卅丈。(同九)

○同八年三月己亥。勅曰太宰言。肥後國阿蘇郡神靈池。洪水盈科。歷水旱以自若。而今無故。涸減卅丈。靜思厥咎。朕甚懼焉。云々。每社奉幣式祈靈祐。(同十)

○貞觀六年十二月廿六日。太宰府言。肥後國阿蘇郡正二位勳五等健磐龍命神靈池。去十月三日夜。有聲震動。池水沸騰空中。東西洒落。其落東方者如布。延緩廣十許丈。水色如漿。黏著草木。雖經旬日。不消解。又比賣神嶺。元來有三石神。高四許丈。同夜一石神頽崩。府司等。決之龜筮。云應有水疫之災。(同九)

○同八年二月十四日神祇官奏言肥後阿蘇大神。懷藏怒氣。由是可發疫癘擾隣境兵。云々。太宰府於城山四王院。轉讀金剛般若三千卷。般若心經八萬卷。以奉謝神心。消伏兵疫。

○同年二月十五日丁酉。勅遣從五位下行主殿權助大中朝臣國雄。奉幣八幡大菩薩宮、及香椎厩、宗像大神、甘南備神、告文曰。云々。去年六月以來太宰府度々言上須其新羅賊舟二艘。筑前國那珂郡乃荒津爾到來天。

豐前乃貢調船乃絹綿乎掠奪天逃退利。又廳樓兵庫業上爾。有大鳥之恠依天卜求隣國乃兵卒之事可在止卜申利。

(三代實錄)

○同年八月八日甲戌。下知太宰府。令豐後國。鎮謝神山崩之恠焉(同續紀)

○同九年二月廿六日。太宰府言。從五位上火男神、從五位下火寶神、二社。在豐後國遠見郡鶴見山嶺。山頂有三池。一池泥水色青。一池赤。去正月廿日。池震動。其聲如雷。云々。

○同年八月六日。太宰府言。肥後國阿蘇郡正二位勳二等。健磐龍神、正四位下比咩神、所居山嶺。去五月十一日夜。奇光耀。十二日朝震動。乃廣五十餘丈。長二百五十餘丈。八日下知太宰府。令肥後國鎮謝神山崩之恠焉。(同上十)

○同十一年己丑。六月十五日辛巳。太宰府言。去月(五月)廿二日夜。新羅海賊乘船二艘來博多津。掠奪豐前國年貢絹綿。即時逃竄。發兵追。遂不獲賊。十二月十四日丁酉遣使者於伊勢大神宮。奉幣。告文曰。天皇我詔旨止掛畏伊勢乃度會宇治乃五十鈴乃河上乃下都磐根爾大宮柱廣敷立高天乃原爾千木高知天稱定竟奉爾天照坐皇大神乃廣前爾恐恐美申賜止申久去六月以來太宰府度々言上多其新羅賊船二艘筑前國那珂郡乃荒津爾到來天豐前國之貢調船乃絹綿乎掠奪天逃退利又廳樓兵庫等上爾依有大鳥之恠天卜求爾隣國乃兵革之事可在止卜申利又肥後國爾地震風水乃災有天舍宅悉仆顛利人民多流亡利如此之災比古來未聞止故老毛申止言上利然間爾陸奧國又異常奈地震之災言上多自餘國々毛又頗有件災止言上利傳聞彼新羅人波我日本國止久世時與相敵

美來利而今入來境內天奪取調物天利無懼沮之氣。量其意況爾兵寇之萌自此而生加我朝久無軍旅。久專忘警備利兵亂之事尤可慎恐。然我日本朝波所謂神明之國利神明之助護利賜波何乃兵寇加可近來波况掛毛畏岐皇太神波我朝乃太祖止御座天食國乃天下乎照賜比護賜利然則他國異類乃加侮致亂。波事乎何會聞食天驚賜比拒却介賜波在平故是以從五位下弘道王、中臣雅樂少允從五位上大中臣朝臣冬名等乎差使天禮代乃大幣帛遠忌部神祇少祜從六位下齋部宿禰伯江加弱肩爾太織取懸天持齋令捧持天奉出給布此狀乎平介聞食天假令時世乃禍亂止之上件寇賊之在波物奈利掛毛畏岐皇太神國內乃諸神達乎唱導賜天比未發向之前爾沮拒排却賜倍若賊謀已熟天兵船必來倍在波境內爾入賜須之逐遷漂沒女賜天比我朝乃神國止畏懼留故實乎澆之多天失比賜奈自此之外爾假令天夷俘乃逆謀叛亂之事中間乃兵賊難之事又水旱風雨之事疾瀆飢饉之事爾至爾國家乃大禍百姓乃深憂毛止可在乎皆悉未然之外爾拂却銷滅之賜天天下無躁驚天國內平安爾鎮護利救助賜比皇御孫命乃御體乎常警堅警爾與天地日月共爾夜護盡護爾護幸倍於奉給倍恐美申賜久中。(三代實錄)

○同十三年五月二日。筑前國所輸攝津國住吉神。封戶調綿。便付太宰貢綿使。送彼神社。永以為例。(同十卷)

○同十六年七月二日。地震。太宰府言。薩摩國從四位上、開開神山頂有火自燒。煙薰滿天。灰沙如雨。震動之聲。聞數百餘里。近社百姓。震恐失精。求之著龜。神願封戶。及汚穢神社。仍成此祟。

○同十七年六月廿六日。下知太宰府。班幣肥後國境內明神。攘謝大鳥之怪也。(同十六卷上)

○同十八年春正月廿五日。先是貞觀十六年。太宰府言。香椎廟宮。每年春秋祭日。志賀島白水即男十人女十

人奏風俗樂。所着衣冠。去寶龜十一年。大貳正四位上佐伯宿禰今毛人所造也。年代久遠。不中服用。請以府庫物造充之。至是太政官處分依請焉。(同二十卷)

元慶二年二月五日。詔。令太宰府。採豐前國規矩郡銅。宛彼郡僑夫百人。為採銅鑄作。先潔清潔齋。申奏八幡大菩薩宮。(同三十卷)

○同年十二月十一日壬申。太宰少貳從五位下島田朝臣忠臣等奏言。檀日宮有託宣曰。新羅房船欲向我國。宜為之備。因茲遣從五位上刑部大夫弘道王。向伊勢大神宮。祈請冥助。

○同年同月廿四日乙酉。遣兵部少輔從五位下兼行伊勢權助平朝臣秀長。向太宰府。奉幣檀日等大神。其檀日八幡神別。奉綾羅御衣各一襲。金銀裝寶劍各一。以彼府奏。有託宣云。新羅凶賊。欲圖我隙。肥後國有大鳥集。河水變赤等之怪也。(以上續後紀)

○仁和元年十月九日。先是太宰府言上。管肥前國。自六月澍雨不降。七月十一日。國守奉幣諸神。延傳讀經。云々。薩摩國言。同月十二日夜。晦冥衆星不見。砂石如雨。檢之故實。額娃郡正四位下開開神。發怒之時。有如此事。國宰潔齋奉幣砂乃止。八月十一日震聲如雷。燒炎甚熾。而雨砂滿地。晝而猶夜。十二日自辰至子。雷電砂降未止。砂石積地。或處一尺已下。或處五六寸已上。田野埋塵。人民騷動。至是神祇官卜云。粉上之怪。明春彼國。當有災疾。陰陽寮占云。府邊東南之神。當遷去於隣國。由是蠶麻穀稼。有致損耗。是以下知府司。令彼國兩國。奉幣部內衆神。以祈冥助焉。(以上同四卷)



○二月帥已下。筑前國郡司已上。奉拜借飯唐宮。云々。於是再拜兩段。帥奏曰（帥不在大少）明神等八島國知食志倭根子天皇大前爾太宰帥位姓名等。率司司人止毛恐美恐美毛奏賜波久止。奏訖再拜兩段退出。更參入於大

臣殿。再拜兩段退出。（十一月同之太宰）

（府例ヨリ抄出）

（扶桑）

○承保四年三月廿九日。太宰府言上。去二月五日。香椎廟燒亡。（扶桑）

（延喜式第）

（同五十）

○凡太宰府應奏神事者。帥獨署。若帥有故者。少貳已上一人署奏。（九卷）

○長德三年十月十三日甲辰。奉遣幣帛使於諸社。依筑紫之騷動也。（日本）

○長保五年癸卯十二月七日。依太宰府、宇佐宮、并石清水宮司。言上怪異事。有御下。神祇官陰陽寮占申云。可有兵革疾疫者。來十二日可被奉幣廿一社之由。其定了。（日本）

○寬仁四年庚申十一月十一日戊午。被立宇佐使。（恒例）

宣命辭別曰。今年改公家重久可慎給支內仁世改仁庚申辛酉乃年改天下不靜須從古傳來禮因茲天慎御坐須間

仁種々仁其徵如此之事於攘退介事改大菩薩乃廣御惠厚御助仁乃可依奈利云々。

仁種々仁其徵如此之事於攘退介事改大菩薩乃廣御惠厚御助仁乃可依奈利云々。

仁種々仁其徵如此之事於攘退介事改大菩薩乃廣御惠厚御助仁乃可依奈利云々。

### ◎府官

官制、職制、官位令、撰叙令、管國官制、考課令、府帥大少貳補任、儻伏白丁、給事力、公廩稻、儲用物、借價稻、驛傳馬、漏剋、給印、給鈴、府帥貳趣任式、上表、

#### 官制

太宰府帶筑前國當唐大都督府

聖武天皇天平十五年。始置筑紫鎮西府。先是有太宰府號。云々。天平寶字二年。勅諸國司以四個年為年限。寶龜十一年。勅太宰任限為五個年。云々。凡當府都管九國二島。別帶筑前也。

帥唐名都督相當從三位

勅任官也。多是以有品親王任之。親王任之者。權帥若大貳知府務而已。

權帥

納言以上若前官任之。中古以來。例於正帥者擬親王官。承府務人。任權也。或又任正。依時宜歟。為大臣之人左遷之時任權帥。然而不可知府務也。凡於帥者。令條所定已為高官。仍重其仁。雖華族又任之。

大貳唐名都督大卿相當從四位下

近來例以參議散二三位等任之。非參議四位。又有其例。有權帥者。不任大貳。任大貳者。不任權帥。雖無

其謂。已為流例多。是以家人任之。

少貳有權官 唐名都督少卿 相當從五位下

殊撰其人任之。

監大唐名都督郎中 相當正六位下

監少唐名都督錄事 相當正七位上

六位特任之。

監典者。公卿給時間。依請任之。多是府中有緣輩任之。稱府官是也。此外博士、筆師、大唐通事等。上古任之。中古以來斷絕。仍畧之。

管國

筑前上雖為都督所管、守已下官如例、 筑後上 肥前上 肥後大 豊前上 豊後上 日向中 大隅中 薩摩中 已上謂之九國。

壹岐下 對馬下 已上謂之二島。

以上諸國司謂之外官。而文官之列也。(以上職原抄)

職制

太宰府(帶筑前國)

主神 一人 掌諸祭祠事

帥 一人 掌祠社、戶口、簿帳、字養百姓。勸農課桑。糾察所部貢舉、孝義、田宅、良賤、訴訟、調食廩、徭役、郵驛、傳馬、烽候、城牧、過所公私馬牛闕遺雜。及寺僧、尼籍、蕃客歸化。謂遊方之人 欽化內歸也

大貳 一人 掌同帥。

少貳 二人 掌同大貳。

大監 二人 掌紀判府內。審署文案。勾稽失。察非違。謂巡察所部非違其諸國 列官察非違不同此儀也

少監 二人 掌同大監。

大典 二人 掌受事上抄勘署文案。檢出稽失。讀申公文。

少典 二人 掌同大典。

大判事 一人 掌案覆犯狀。謂案覆管國 所中犯狀也 斷定刑名。判諸爭訟。

少判事 一人 掌同大判事。

大令史 一人 掌抄寫 判官。

少令史 一人 掌同大令史。

大工 一人 掌城壘、舟楫、戎器、諸營作事。

少工 二人 掌同大工。

博士 一人 掌教授經業。謂教授管國學生其醫課試學生。師不稱教者文畧也。

陰陽師 一人 掌占筮相地。

醫師 二人 掌診候療病。

竿師 一人 掌勘計物數。

防人正 一人 掌防人名帳。戎具教閱。及料田事。

佑 一人 掌同正。

令史 一人

主船 一人 掌修理舟楫。謂大工職掌云船楫此即新造者故此司唯掌修理也。

主厨 一人 掌醢醢醢。謂醢者醢也凡醫所和切也即令調和醫醢醢之類是也。

蒞醬鼓鮭謂雜乾魚也等事史生廿人(以上職員)

職制拾補

主神 正七位下官、奏授、奏位、職分田一町六反、事力五人

帥 親王、位田五十町、食封四百戶、帳內百二十人  
諸王、位田三十四町、食封一百戶、資人六十人  
勅位、勅授、職分田十町、事力二十人  
和銅年間優仗八人加不

大貳 正五位、勅授、奏任、位祿純六屯、布三十六端、庸布二百三十丈  
資人二十五人、職分田六町、事力十四人、優仗四人

- 小貳 從五位下官、勅授、奏任、位祿純四屯、綿四屯、布二十九端、庸布百八十常、資人二十人、職分田四町、事力十人、優仗四人
- 大監 正六位下官、奏授、奏任、職分田二町、事力六人
- 少監 從六位上官、奏授、奏任、職分田二町、事力六人
- 大典 正七位上官、奏授、奏任、職分田一町六段、事力五人
- 少典 正八位上官、判授、奏任、職分田一町四段、事力四人
- 大判事 從六官下官、職分田二町、事力六人
- 小判事 正七位上官、職分田一町六段
- 大令史 大初位上官
- 少令史 大初位下官 職分田一町、事力三人
- 大工 正七位上官、奏授、職分田一町六段、事力五人
- 少工 正八位上官、判授、職分田一町四段、事力四人
- 博士 從七位下官、奏授、職分田一町六段、事力五人
- 陰陽師 正八位上官、判授、職分田一町四段、事力四人
- 醫師 正八位上官、判授、職分田一町四段、事力四人
- 算師 正八位上官、判授、職分田一町四段、事力四人

史生 式部判補、職分田六段、事力二人

(以上大寶令職員令)

- 官位令
- 四品 太宰帥 オホミコトモツカミ
  - 從三位勳二等
  - 正五位太宰大貳 オホイヌケ 勳五等
  - 從五位太宰少貳 オホイヌケ 勳六等
  - 正六位太宰大監 オホイヌケ 勳七等
  - 從六位太宰少監 オホイヌケ 勳八等
  - 正七位太宰大工 太宰少判事 太宰大典
  - 太宰主神 カミツカサ 勳八等
  - 從七位太宰博士 勳十等
  - 正八位太宰少典 太宰陰陽師 太宰醫師
  - 太宰少工 太宰竿師 太宰主船
  - 太宰主厨 勳十一等

大初位太宰判事大令史 太宰判事少令史

(以上令義解)

府帥大少貳ノ補任

正權帥大少貳ノ補任孝德之朝大化五年ヨリ後鳥羽之朝文治元年十月ニ至リ五百三十七年ノ間ニ於テ國史ニ顯レシモノヲ摘録シテ年表ヲ作ルノ如シ

年	月	太宰	補帥	帥	太宰	小大	貳貳
孝德天皇大化五年正月		蘇我臣日向	筑紫太宰帥				
天智天皇七年七月		栗前王	太宰率				
同八年正月戊子		蘇我赤兄王	筑紫率				
同十年六月		栗隈王	筑紫帥				
天武天皇白鳳五年九月丁丑		三位屋垣王	筑紫太宰				
同十一年四月癸未		丹比真人島	筑紫太宰				
持統天皇三年正月壬戌		栗田真人朝臣	筑紫太宰				
同年八月丁丑		淨廣贈筑紫太宰率	筑紫太宰帥				

府 官

持統天皇八年九月癸卯	淨廣肆三野王 筑紫太宰率授兵仗及賜物	
文武天皇四年十月己未	眞大壹石上朝臣應 筑紫總領	小野朝臣毛野 大貳
同慶雲二年十二月庚辰	大納言從三位大伴宿禰安磨 兼太宰帥	從四位下石川朝臣磨 大貳
同三年二月戊子	從三位粟田朝臣眞人 太宰帥	從五位下阿倍朝臣首名 太宰少貳
元明天皇和銅元年三月丙午	從三位多治比眞人池守 太宰帥	從四位上巨勢朝臣多益首 大貳(三年六月辛巳卒)
同七年五月壬寅		太宰大貳正四位下路眞人大人卒
同養老二年七月乙巳		從四位上石川朝臣石足 太宰大貳
同六年六月辛丑		太宰大貳正四位上多治比眞人縣守 權爲參議
聖武天朝天平元年壬申	正三位大納言藤原朝臣武磨 爲兼太宰帥	太宰大貳從四位下小野朝臣老卒
同三年九月癸酉		
同九年六月甲寅		
同八年丙午	式部卿兼太宰帥正三位藤原朝臣宇合兼 (附左大臣不比等ノ第三子也)	太宰大貳正四位下紀朝臣男人卒
同十年十月甲午		從四位下高橋朝臣安磨 太宰大貳
同十二年丁卯		

同十四年正月辛亥	廢太宰府(太宰少貳藤原廣嗣兵) ヲ舉ルニヨルナリ	從五位下藤原朝臣磨嗣 少貳
同十五年十二月辛卯	始置筑紫鎮四府從四位下石川朝臣加美爲將軍	外從五位下大伴宿禰百世爲副將軍 別ニ列官二人主典二人ヲ置ケ
同十七年六月辛卯	復置太宰府	從四位下石川朝臣加美爲大貳 外從五位上多治比眞人生養併爲少貳
同十八年四月丙戌	左大臣從一位橘宿禰諸兄 兼太宰帥	從五位下紀朝臣男磨 太宰少貳
同年同月壬辰		正五位下百濟王孝忠 太宰大貳
同年十月癸酉		從五位下小野朝臣田守 太宰少貳
孝謙天皇天平勝寶元年閏五月甲午		
同二年十月丙辰	從三位藤原朝臣乙磨 太宰帥	從五位下佐伯宿禰平禮磨 太宰少貳
同四年八月庚戌	中納言從三位紀朝臣磨 兼太宰帥	從四位上紀朝臣磨 大貳
同年十一月乙巳		從四位上吉備朝臣眞備 太宰大貳
同五年九月乙丑	從三位石川朝臣年足 太宰帥	
同六年四月庚午		
同天平寶字四年正月丙寅	從三位藤原朝臣流備 太宰帥	

同六年十二月乙巳	正四位上藤原惠美朝臣眞光 太宰帥	
同七年正月壬子		從五位下紀朝臣繼繼 太宰員外少貳
同八年八月壬戌	正四位上藤原朝臣宿奈磨 太宰帥	從五位下采女朝臣淨庭 少貳
同九年九月戊申	太宰員外帥正二位藤原朝臣豐成 復爲右大臣賜帶刀四十八	
同天平神護元年八月壬午	正四位下石川朝臣豐成 太宰帥	
同神護景雲元年二月戊申		從四位下藤原朝臣楓磨 太宰大貳
同二年十一月癸未	大納言衛門督正三位弓削御淨朝臣 清人兼太宰帥	從四位上藤原朝臣田磨 大貳(延曆二年三月丙申薨)
同三年三月戊寅		外從五位下高市連豐足 太宰員外大貳
同八年八月丙申	始置太宰府執帥	
光仁天皇寶龜元年六月丁未		正五位下小野朝臣小資 太宰少貳
同八年八月辛亥	參議從三位兵部卿兼法華寺長官藤原朝臣宿奈磨 太宰帥	
同九年九月乙亥	從三位石上朝臣宅嗣 太宰帥	
同二年九月己亥		正五位上大伴宿禰益立 太宰少貳
同年十二月己未	罷筑前國官員兼太宰府	

同五年四月壬辰	從三位藤原朝臣藏下磨 太宰帥(六年七月壬辰薨) (平城朝參議正三位式部卿太宰帥馬養之弟九子也)	
同九年九月己亥		從五位上石川朝臣眞永 太宰少貳
同六年七月壬寅		從四位下石川朝臣名足 太宰大貳
同八年正月戊寅		從五位下多治比眞人豐源 太宰少貳
同八年七月辛卯	大納言近衛大將二位藤原朝臣眞名 兼太宰帥	從五位下藤原朝臣仲繼 太宰少貳
同十一年二月丁酉		從四位上石上朝臣息嗣 大貳
同四年四月乙巳	從三位藤原朝臣源成 太宰帥(延曆九年二月乙酉薨) (贈左大臣正一位不比等之孫兵部卿從三位歷之子也)	從五位下海上眞人三狩 太宰大貳
同四年四月甲寅	正二位藤原朝臣眞名 爲左大臣兼太宰帥(延曆二年五月庚子薨) (太政大臣房前之第五子也)	
桓武天皇延曆元年六月辛未		從四位下石上朝臣家成 太宰大貳
同二年二月壬申		從五位下大伴宿禰眞磨 太宰少貳
同五年五月辛卯		從四位下石川朝臣眞守 太宰大貳
同三年七月壬午		從五位上藤原朝臣眞繼 太宰少貳

桓武天皇四年五月甲寅	大納言正三位藤原朝臣繼繩 兼太宰帥	從五位上上海人三狩 太宰大貳
同年七月己亥		
同五年四月庚午	參議正三位佐伯宿禰今毛人 太宰帥	從五位上紀朝臣伯歷 太宰少貳
同七年正月甲申		從五位上藤原朝臣園人 太宰少貳
同八年三月戊午		從五位下多治比真人繼兄 太宰大貳
同九年二月壬辰		從五位下藤原朝臣眞懿 太宰少貳
同年七月丁亥		從四位下藤原朝臣葛野歷 太宰大貳
同十八年正月甲戌		從五位下石川朝臣清直 少貳
同二十三年正月庚子		從五位下藤原朝臣藤嗣 太宰大貳
平城天皇大同元年五月	從三位中納言兼兵部卿藤原朝臣繼主 太宰帥 四海道觀察使 (大同八年九月壬寅薨)	從五位上多治比真人今歷 太宰少貳
同三年十一月甲辰		參議從四位上藤原朝臣藤繼 太宰大貳
嵯峨天皇弘仁三年正月辛未	式部卿三品葛原親王 兼太宰帥 (仁壽三年六月癸亥薨 親王桓武天皇第二ノ皇子 ニシテ嵯峨太上天皇之兄也)	從五位下藤原朝臣葛成 少貳
同七年正月丙子		參議從四位上紀朝臣廣演 太宰大貳 (十年七月戊寅卒)

同十年六月己未		參議從四位下安倍朝臣寬曆 太宰大貳 (十一年十月己酉卒)
同年十二月癸酉	參議從三位多治比真人今歷 太宰帥	
同十二年三月丙午	從四位下小野朝臣隆守 參議兼太宰帥	
淳化天皇天長二年六月		右京大夫從四位下藤原朝臣諸成 太宰少貳 (寶曆三年四月戊寅卒)
同七年八月乙巳	仲野親王太宰帥 (白鶴九年五月十七日薨)	前太宰大貳從四位上初野宿禰鹿取於御床下拜爲參 議 (承和十年六月戊辰薨)
同十年六月癸亥		
仁明天皇承和二年正月丁巳	三品秀真親王 太宰帥	
同四年二月甲辰	遣唐大使參議正四位下藤原朝臣常嗣 太宰權帥	
同年五月庚寅		太宰大貳從四位下藤原朝臣 廣敏卒
同十年六月戊辰		參議從三位勅六等兼越中守太宰大貳朝野朝臣鹿取 亮ス
同嘉祥二年正月戊辰	四品宗康親王 爲兼中務卿太宰帥如故	
同三年	三品葛井親王太宰帥 (嘉祥三年四月己酉薨 親王桓武天皇第十二子也)	
同年五月甲午		從四位下清原真人長田 太宰大貳
文德天皇仁壽二年正月壬午		從五位上藤原朝臣春綱 太宰少貳

同三年正月丁未		滋野朝臣善隆 太宰少貳
同三年正月丙申		正四位下正野王 太宰大貳
同三年十二月癸巳		從五位上小野朝臣貞樹 太宰少貳(貞觀二年正月爲肥後守)
同天安二年十月廿六日	四品推高親王 太宰帥	
清和天皇貞觀二年正月十六日		參議從四位上守大藏卿兼行因幡守清原真人岑成 太宰大貳(貞觀三年二月廿九日卒) 散位從五位下藤原朝臣直致 少貳
同年十一月廿七日		大藏少輔從五位下藤原朝臣貞庭 太宰少貳(同五年七月七日爲筑前守)
同五年三月廿日		太宰少貳從五位下藤原朝臣有隆 爲近江守
同年七月七日	二品行式部卿兼上總大守仲野親王 太宰帥 (貞觀九年正月十七日薨親王桓武天皇第十二ノ皇 子也)	權少貳從五位下在原朝臣安貞 從五位下守右少辨藤原朝臣衣利萬侶并爲 少貳
同年七月十六日		民部少輔從五位下藤原朝臣有隆 太宰少貳
同六年八月十六日		太宰少貳從五位下行藤原朝臣有年正觀岐介 勳解由次官從五位下安倍朝臣清行太宰少貳 (貞觀十年二月十七日再任) 太宰少貳
同九年四月十一日		從四位上茂世王太宰大貳 (同十年十二月八日宮內卿二任ス)
同十一年八月十五日		散位從五位下紀朝臣春常 太宰少貳

同年十二月八日		右大辨從四位上兼行勘解山長官 美濃權守藤原朝臣冬雄 參議兼太宰大貳
同年十二月十三日		從四位上行太宰大貳茂世王爲宮內卿 從五位上守右近小將兼行阿波介坂上大藏藤原守兼 太宰少貳阿波介如故 (元慶五年十一月九日卒)
同十二年二月七日	詔授三品行中務卿兼太宰帥 時康親王二品	
同十五年十二月十八日	參議正四位下行左衛門督在原朝臣行平 從三位大宰權帥	
同十八年二月廿日	二品行式部卿兼太宰帥 忠貞親王薨	
陽成天皇元慶二年七月二十日		從五位上守民部大輔藤原朝臣房雄爲太宰權少貳兼 左近衛權少將赴太宰府警戒戎事 (慶元三年正月十一日爲少貳少將如故)
同三年正月七日		太宰大貳橘朝臣三夏 授從四位上
同八年十一月廿五日		太宰少貳從五位下御室朝臣安常 授從四位上
光孝天皇仁和元年正月十六日		從四位下守治部卿兼行武藏權守源朝臣行有 太宰大貳(同三年八月廿日卒)
同年閏三月二十日		從五位下藤原朝臣連永 太宰少貳
同二年八月廿二日		從四位下行伊豫守藤原朝臣保別 太宰大貳
字多天皇寬平五年八月九日		筑前守藤原朝臣興範 兼太宰權少貳
		同七年正月十一日太宰少貳 延喜二年正月廿六日太宰大貳



同六年四月十六日	權中納言從三位藤原朝臣國經 兼太宰權帥	同十四年甲戌再任太宰大貳
醍醐天皇昌泰四年正月二十五日	右大臣從二位實原朝臣道真 太宰權帥(延喜三年二月廿五日薨)	
同延喜六年九月十七日		從五位下周防權介橘朝臣公賴 太宰少貳
同七年正月十三日		參議正四位下在原朝臣友子 兼太宰大貳
同五年五月一日	太宰大貳在原朝臣友子 改任太宰權帥(同十年四月廿日薨)	
同五年五月廿九日		從四位下伊豫守橘朝臣澄清 太宰大貳
同十一年二月十五日		從四位下源朝臣悅 太宰大貳
同二十年正月晦日		右京大夫從四位下藤原朝臣當幹 太宰大貳
同延長元年七月廿五日	三品太宰權帥是貞親王薨	
同三年正月三十日		參議藤原朝臣扶幹 兼太宰大貳
同八年正月廿九日		從四位下源朝臣等 太宰大貳
朱雀天皇承平五年二月廿三日	參議橘朝臣公賴兼太宰權帥 (天慶四年二月廿日薨)	
同天慶四年三月廿八日		參議源朝臣清平兼 太宰大貳(同八年正月十三日卒)
同八年十月十四日		參議小野朝臣好古 太宰大貳(天曆四年薨)

村上天皇天曆四年正月廿日		參議平朝臣時兼 太宰大貳(同七年十二月十八日卒)
同八年正月廿五日		參議藤原朝臣朝忠兼 太宰大貳(同三年三月薨)
同年三月十四日		從四位上藤原朝臣元名 太宰大貳(天德三年正月廿四日遷讃岐守)
同天德四年四月廿三日		參議小野朝臣好古再任 太宰大貳(康保元年薨)
冷泉天皇安和二年三月廿六日	左大臣源朝臣高明貳員外太宰權帥 即日出家准俗赴任所	
圓融天皇天祿元年正月廿五日	中納言橘朝臣好古兼權帥 (同二年十一月二日薨)	
同天延四年正月		從三位藤原朝臣家國 太宰大貳(天元四年薨)
同天元四年正月廿九日		左中納言原朝臣輔正 太宰大貳(同五年三月五日遷式部權大輔)
花山天皇寬和二年正月廿八日	權中納言藤原朝臣爲輔 太宰權帥(同年八月廿六日薨)	
一條天皇正曆二年正月廿七日		參議藤原朝臣佐理 太宰大貳(同六年十月十八日薨)
同長德元年十月十八日		從三位藤原朝臣有國 太宰大貳
同二年四月廿四日	前內大臣藤原朝臣伊周貳員 外權帥	
同長保三年正月廿四日	中納言平朝臣惟仲太宰權帥 (寬弘元年十二月廿九日薨)	
同寬弘元年十二月廿九日		從三位藤原朝臣高遠 太宰大貳

二條天皇長和三年十一月七日	中納言藤原朝臣隆家兼權帥 (長和三年十二月廿一日罷) 長曆元年八月九日再任太宰權帥同十月赴任 長久二年正月廿九日罷 (同四年十一月廿九日罷)	
後一條天皇寬仁三年十二月廿一日	中納言藤原朝臣行成兼權帥 (同四年十一月廿九日罷)	
同四年十一月廿九日	權中納言藤原朝臣房兼權帥 (治安二年十一月一日罷)	
同治安二年十二月十五日		從三位藤原朝臣惟憲 太宰大貳
同長元二年正月廿四日	權中納言源朝臣道方兼權帥 (同六年十二月一日罷)	
同六年十二月	中納言藤原朝臣實成 貶權帥(長曆二年罷)	
後朱雀天皇長久三年正月廿九日	權中納言藤原朝臣重尹 太宰權帥	
後冷泉天皇永承元年二月廿六日	中納言兼左衛門將藤原朝臣經通停登源權帥 (同五年五月罷)	
同五年九月十七日		參議源朝臣資通 太宰大貳(天喜二年十一月廿八日去)
同天喜二年十二月二日		正四位下高階朝臣成章 太宰大貳(同六年卒)
同六年四月廿五日	權中納言藤原朝臣經輔 兼權帥(康平六年二月廿七日罷)	
同康平六年二月廿七日		正四位下藤原朝臣師成 太宰大貳(治曆三年二月二十二日辭)
同治曆三年七月一日		參議藤原朝臣顯家兼 太宰大貳(延久三年三月辭)

後三條天皇延久三年四月九日	前權中納言藤原朝臣資仲權帥 (應德元年四月辭)	參議藤原朝臣長基兼 太宰大貳(承保二年閏四月十九日卒)
白河天皇承曆三年		前參議藤原朝臣實政 太宰大貳(治久二年辭)
同應德元年六月廿三日		參議藤原朝臣長房兼 太宰大貳(新保元年辭)
堀河天皇寬治二年八月廿九日	權中納言藤原朝臣伊房兼權帥 (同六年七月辭)	
同六年九月七日		
同嘉保元年六月十三日	大納言源朝臣經信 太宰權帥(同三年閏正月六日罷)	
同承德元年三月	權中納言大江朝臣匡房 兼太宰權帥(康和四年正月辭) 嘉承元年三月十一日再任 太宰權帥(天永二年七月廿九日) 遷大藏卿同年二月廿九日	
同康和四年正月	權中納言藤原朝臣保實 太宰權帥(同年三月五日罷)	
同年六月廿二日	權中納言藤原朝臣季仲 兼權帥(長治二年十一月一日罷)	
鳥羽天皇天永二年正月二十三日		正三位藤原朝臣顯季 太宰大貳(承久五年十二月廿日辭)
同承久四年正月三十日	權中納言源朝臣基綱 兼權帥(同五年十二月罷)	
同五年十二月三十日	中納言藤原朝臣重資 兼權帥(保安二年閏五月辭)	
同保安二年六月廿六日		參議藤原朝臣俊忠兼 太宰大貳(同三年十二月十七日) 權中納言

同三年十二月廿二日	參議藤原朝臣俊忠 兼權帥(同四年七月九日薨)	從三位藤原朝臣長實 兼太宰大貳 大治三年正月廿四日辭又
同四年十二月二十日		從三位藤原朝臣經忠 兼太宰大貳(長承二年十月廿六日去)
崇德天皇大治三年正月二十四日	權中納言藤原朝臣長實 兼太宰權帥(同八年八月十七日薨)	前參議藤原朝臣重光 太宰大貳 (保延二年十一月四日遷兼權帥)
同長承二年正月廿九日		
同年二月二十二日		
同保延二年十一月四日	前參議藤原朝臣實光兼 太宰權帥(同五年正月辭)	
同五年五月二十四日	權中納言藤原朝臣顯和 兼權帥(同七年二月二日辭)	
同七年十二月二日		參議平朝臣實親兼 太宰大貳(康治三年正月廿四日辭)
近衛天皇久安五年八月二日	權中納言藤原朝臣清隆兼 權帥(仁平三年閏十二月廿三日辭)	
同仁平三年閏十二月廿三日	前權中納言藤原朝臣忠基 太宰權帥(保元元年六月出家)	參議藤原朝臣忠能兼 太宰大貳(同三年三月六日卒)
後白河天皇保元元年九月十七日		正四位下藤原朝臣季行 臨時太宰大貳(平治元年八月十日罷)
同三年三月十三日		正四位下平朝臣清盛 太宰大貳(永曆元年十二月三十日辭)
同年八月十日		

同應保二年四月七日	權中納言藤原朝臣顯時 太宰權帥(長寬二年正月廿一日辭)	
同長寬二年二月八日		正四位下藤原朝臣永範 太宰大貳(永萬二年七月十五日辭)
同永萬二年七月十五日		正四位下平朝臣賴盛 太宰大貳(仁安二年十一月廿八日辭)
六條天皇仁安三年十二月十五日		從三位藤原朝臣信盛 太宰大貳(承安元年十二月八日去)
高倉天皇承安元年十二月八日		從三位藤原朝臣重家 太宰大貳(安元二年六月廿五日出家)
同安元二年十二月五日		正四位下藤原朝臣親房 太宰大貳(治承三年十一月十七日罷)
同治承三年十一月十八日	關白前左大臣藤原朝臣基房 員外權帥ニ左降 同月廿一日出家	
同年十一月廿二日	權中納言藤原朝臣隆季特任太宰帥 (隆季權中納言ヲ以テ太宰帥ニ特任ス世之レヲ希 代ノ例トス) 安和二年四月九日辭又	正三位藤原朝臣實清 太宰大貳(元曆元年十二月廿一日出家)
安徳天皇養和二年四月九日		正三位藤原朝臣實清 太宰大貳(元曆元年十二月廿一日出家)
後鳥羽天皇文治元年十月十一日	權中納言藤原朝臣經房兼權帥 (建久元年正月廿四日辭)	

附錄

○天永二年辛卯。太宰權帥中納言大江匡房卒。蓋中頃以來。帥人不在府。大貳以下居府管鎮西。至后世大貳亦不處府。少貳爲府主。帥、大貳、在朝司其職。云々。又於筑前置留守。官吏列之。後武家號宰府。曰守

護所矣。(鎮西)

三條帝朝藤原隆家、太宰權帥ト爲リ任所ニ在リ。會々刀伊賊來寇ス。屬僚大藏種材、藤原明範等ヲ遣テ遊擊セシム。西陲遂ニ安靖シ。朝賞其身ニ逮ヒ。威信鎮西ニ布ク。其子經輔職ヲ襲ヒ。子孫相踵テ大貳ト爲リ。太宰府ノ權殆ント一門ニ衰レリ。菊池氏、高木氏等ノ如キハ。其子孫ヨリ出テ。種材ノ屬ヨリ原田氏起リ。並ニ鎮西ノ豪族タリ。後京官中府帥ニ拜スルモノアレトモ。多クハ赴任セス。鎮西ノ機務ハ大少貳ノ手ヨリ出テ。武人專制ノ世ニ推移セリ。(湖廣)

○治承三年己亥十一月廿二日。抑一昨日除目隆季卿任帥。云々。太宰帥者。親王所任之官也。仍他人無帥之。納言已上知行宰府之時。被任權帥。參議已下所被任大貳也。前關白房基任權帥赴配所。隆季令任正帥者。希代之例也。隆季已蒙親王之宣旨歟。是職事等有落亡之所致也。外記又不驚。但如此之亂世。不可及是非左右事歟。(海玉)

○公卿補任ニ「治承三年十二月關白藤原基房貶權帥。同月權大納言藤原隆季兼權帥」トアレトモ玉海ニ據レハ。正帥ナリ。權ノ字ハ傳寫ノ誤ナラン。(湖廣)

○保元三年二月平清盛戰功ニ由テ太宰大貳ニ任セラル。此ヨリシテ九州ノ將士、平氏ニ屬スルモノ多シ。養和元年二月菊池、緒方、臼杵、戸次、松浦ノ諸將。源氏ニ黨シテ太宰府ヲ燒ク。壽永二年六月、肥後守平貞能、鎮西ヲ平定シテ京師ニ還ル。同年七月安徳天皇西狩。八月車駕太宰府ニ至ル。少貳原田種直、及菊池隆

直、臼杵、戸次、松浦黨ノ諸氏。行宮ヲ造リテ護衛ス。九月緒方惟能、源氏ニ屬シテ原田氏ト戰ヒ。勝ニ乘シテ行宮ヲ襲ハントス。宗盛等大ニ怖レ、笠崎海上ニ船シテ高麗ニ奔ラントセシカ。風濤險惡ニシテ果サス。因テ山鹿秀遠ノ城ニ避ケ。竟ニ豊前柳浦ノ行宮ニ徙リ。其後屋島ニ趣キ。九州ノ巨族此ヨリ又源氏ノ節制ニ從ヘリ。鎮西志ニ「文治元年八月。範賴辭鎮西。賴朝卿以上肥實平。令兼行鎮西之事。二年十一月。實平辭鎮西之職。十二月十日。天野民部丞藤原遠景(又號内)爲鎮西奉行。賜庄園地頭下向矣。此時也權大典惟宗氏。大監中原氏。與遠景相列而掌太宰府之號令。云々。トアリ。以上ノ數事ニ據リテ鎮西ノ政ハ凡テ武門ニ移リシコトヲ證スヘシ。天永以後ハ縉紳、太宰府ノ長官ニ任補セラル、者アルモ。皆遠任ニシテ其身任所ニ赴カス少貳代リテ府務ニ當リ。是ニ至リテ府官益曠職ニ屬セリ。(湖廣)

○文治元年乙巳四月十二日。平氏滅亡之後。於西海可有沙汰條々。今日被經評議云々。參州(三河守)暫住九州。沒官領以下事。可令尋沙汰之。延尉(經)相其生虜等。可上洛之由。被定云々。同年七月十二日。平家沒官領種直、種遠、秀遠等所領。原田、板井、山鹿以下所處事。被定補地頭之程者。差置沙汰人。心靜可被歸洛之由。今日所被仰遣參州之許也。同年九月廿一日參河守使者參着。既出鎮西。在途中。今月相攝可入洛。八月院長中可參洛之由。雖蒙嚴命。依風波難遲留。恐思云々。同年十月廿日御堂。院ナリ院供養導師本覺院僧正坊公顯下着。所相具廿口龍象也。參河守範賴朝臣、相伴參着云々。(經東)

參照

鎮西要略ニ「文治元年八月參河守範賴辭鎮西。賴朝卿以土肥二郎實平。令兼行鎮西事。二年十一月土肥實平辭鎮西之職。」トアレトモ東鑑ニヨルニ範賴一時鎮西ニ留リテ平氏亡滅後ノ處分ヲ施シ。九月十月之交東還セシナリ。土肥實平ヲ留後トセシハ東鑑ニ見ヘス御堂供養之時ノ布施物目錄ノ中ニ「三ノ御馬土肥二郎實平」トアレハ實平此時九州ニ赴カス。蓋シ鎌倉ニ在リテ鎮西ノ機務ヲ管セシナリ。(湖方)

○同二年丙午十二月十日癸未。今日藤原遠景。爲鎮西奉行人。又給所々地頭職等。云々。(東鑑)

○同六年乙卯天野民部丞藤原遠景辭職歸關東。在十二年也。(歷代鎮西志)

參照

東鑑建久六年三月十二日。賴朝東大寺供養ノ條。後陣隨兵ノ中ニ遠景ノ名ヲ列ス。遠景ノ鎌倉ニ歸ルハ本書ニ載セスト雖モ。鎮西志ニヨレハ今年ニシテ其月ハ正月二月ノ間ニ在ルヘシ。鎮西要略「六年十一月歸關東」ニ作ルハ恐誤ナラン。(湖方)

○同七年丙辰。武藤小次郎資賴任太宰少貳。補鎮西守護職。而下向於太宰府。且封前少貳原田種直之沒領。當府者。遵舊例。管九州二島。特司筑前、豐前、肥前、壹岐、對馬、五州兵馬。有司而大監、小監、大典、小典、錄事、參軍、等之職屬焉。改茲稱守護所。其號令准於鎌倉、六波羅、矣。云々。資賴修太宰府城在府云。今年卅七歲。是武藤少貳之始也。資賴自下於太宰府以往。子孫世在府。嗣其職。敢無他姓雜焉。稱都督司馬。不云武藤。推氏少貳。云々。資賴祝髮號沙彌覺佛。貞永二年(即天福元年)八月二十五日覺佛卒。世壽六十九

歲(東鑑ニハ法名是佛ニ作ル)(歷代鎮西志)

賴平二男資賴、建久二年被宛賜太宰府守護岩戶少卿種直跡三千七百町拜領了。嘉祿元年依字佐八幡宮遷宮。任太宰少貳。(少貳)(系圖)

建久七年春三月十日大友左近將監能直下着於豐後國。古庄重吉爲宰臣。先是幕府遣大友能直。奏朝廷。而爲豐前、豐後、守護職。且補鎮西奉行職。與少貳並而行其國政。(歷代鎮西志)

親能男能直。因外祖父之氏。稱大友。奉仕右大將家。武功盛名拔群。抽賞亦異于他。或補侍所別當。或居六波羅職。或爲鎮西奉行。建久四年賜豐前、豐後、兩國。同年六月十一日始下着於豐後國。(大友)(系圖)

能直累功積績而帶二州職。補奉行任。天野遠景之代也。奉行人。一說曰。在鎌倉而掌國事。守護職在國矣。守護職與奉行相並而育萬民。歛財賄。節兵財。立國法矣。(鎮西)(要略)

寬元二年七月大友肺直卒。(左近將監)(左衛門督)法名能直享年六十九歲也。嫡子大炊助親秀嗣家。相續爲鎮西奉行。寶治二年十月廿五日親秀卒。(大友)(二世)治名寂秀。享年五十四也。男子五人。長曰賴泰嗣立。號式部太輔。(歷代鎮西志)

○諸國

神武天皇即位之初。繼神代之蹤。都日向國宮崎宮。此時天下草昧。封城未定。東征之後。初平中州。定都於於大和國橿原宮。爾來關四門。朝八方。歷代因准漸開諸道。第十代崇神天皇十年。遣使於四方。所向皆以臣伏。同年十月更命四道將軍進發。云々。第十三代成務天皇四年。始定國造。同六年。始分國境。國造乃國司

名。後改云守也。凡國司之撰。和漢重之。此云烹鮮ハツシ之職。又云分憂之官。漢宣帝稱曰。與我共治者唯良二千石乎。云々。誠是當一方之重。重寄察百姓之寒苦。非庸才之可企望。故昔時固設格制以勘治否。合格者蒙賞。違格者被黜。是所以擇良吏也。

○大國

守	有權守	相當	從五位上	介	有權介	相當	正六位下
掾	少大	同	從七位上	目	少大	同	從八位上

○上國

守	有權守	相當	從五位下	介	有權介	相當	從六位上
掾	有權掾	同	從七位上	目		同	從八位下

大上國守相當五位也。依之其身雖六位。除目之時。執筆之人押以書。從五位下不待勅處分者也。

○中國

守		相當	正六位下	介		相當	同上
掾		同	正八位下	目		同	大初位下

○下國

守		相當	從六位下	掾		相當	從八位下
---	--	----	------	---	--	----	------

目 同 少初位下

○唐名							
守	刺史	使君	太守	介	長吏		
掾	司馬	國宰	主簿	郡司	縣令		

凡國司者相當五位已下也。然而雖四位已上。或隨其望。或應其撰。古今之例也。或說、歷七箇國受領合格之吏勘公文畢拜參議。云々。白河院仰但可依其才。云々。又大守者爲親王置之。親王任時。不知吏務。仍伴國以介爲守。乃令知吏務也。權守者。近代多是遙授之官也。參議二三位中將少納言等必兼之。又殿上六位藏人叙位之時。預備者即任權守又例也。納言已上貶謫之時。任諸國權守也。仍常儀參議兼國任納言之日即止之。介權介者。辨官近衛中少將等兼之。(以上職原抄)

○凡國博士、醫師、國別各一人。其學生大國五十人。上國四十人。中國三十人。下國二十人。醫生各減五分之二。

○凡新附戶皆取保證。謂新附戶者未附戶籍之人始新附貫也。保證者保人。本問元由知非逃亡詐冒然後聽之。其先有兩貫者。從本國爲定。謂父國爲本國也。父父母各、別國而唯太宰部內。及三越。陸奥、石城、石背、等國者。從見住爲定。謂假令母在關國、父在他國。其子兩處附貫者即從父母各、別國而唯太宰部內。及三越。陸奥、石城、石背、等國者。從見住爲定。爲定。若父在關國。母在他國。仍復有兩貫者。自須依從本國之法也。若有兩貫者。從先貫爲定。謂父母各在關國。仍復有兩貫者。不論父國母國。從先貫爲定也。

○凡國守。每年一巡行屬郡。觀風俗問百年。錄囚徒。理冤枉。謂問百年者問其安不也。錄囚徒者背錄之。知其情狀有冤滯與不也。理冤枉者理治也。冤屈也。枉曲也。此言囚徒之外。別

被仰服。假如財物訴訟及真。詳察政刑得失。知百姓所患苦。謂政教也。刑罰也。假如差科賦役違法之類是政失也。刑科賦訟乖理之類是刑失也。知百姓所憂苦者。冤枉之外有所患苦。假如河伯娶婦女之類。是患也。 敦喻五教。勸懲農功。謂五教者五常之教。則父義、母慈、兄友、弟恭、子孝是也。勸務農功者。謂農功故知巡行必以春時。史傳所謂。大守行春勸人農桑是也。 部內有好學篤道孝悌忠信。

賢好學者。秀才明經等類。舊學者。兼行孝悌仁義等。道者。可者。德而官之。一謂之道。別而名之。即謂之孝悌仁義禮。清白異行。謂不濁者為忠信故。然則孝悌仁義。既入篤道而更下文與孝悌忠信者。蓋一在身之謂矣。凡此四者人之高行故。舉為稱首。清白異行。謂不濁者為白。假如曾參耕魯。若教邑。固辭不受。發聞於鄉閭者舉而進之。 有不孝悌悖禮亂常不率法令者。謂悖逆也。亂常者。素者。率節也。不遵法令者。率節也。不遵法令者。率節也。不遵法令者。率節也。 糾而繩之。其郡境內田疇開墾產業。脩禮教。設禁令行者。謂禁制及號令之邪也。 為郡領之能入其境人窮。

匪。農業荒。奸盜起。獄訟繁者。謂爭訟日繁。為郡領之不若郡司。謂主報以上。論少領以上之善惡也。在官公廉不及私計。正色直節。 不飭名譽者。必謹而察之。其情在貪穢。諂諛求名。公節無聞而私門日益者。亦謹而察之。其政績能不

節。解界 及過述善惡。解界 皆錄入考狀。以為褒貶。即事有侵害。解界 不可至考者。隨糾推。以上職原抄

○選叙令

凡任官大納言以上左右大辨。八省卿。督彈正尹太宰帥。勅任。解界

凡在官身死及解免者。皆即言上其國司大上國介以上。中國掾以上並闕。及下國守闕者。皆馳驛申太政官。若太宰帥及三關國。壹岐對馬守者。雖獨闕。猶從馳驛例其侍報之間太宰遣判事以上官人權攝。謂判事以上。與典其權同。列任訖馳驛發遣。

○考課令

禮儀與行。戎具宛備。謂此唯為太宰府及筑前為太宰之最。謂少或無有愛憎。供承善成。謂太宰監亦得此最也。為國掾之最。

○凡大貳以下及國司謂目 每年分番。謂既云每年分番即知。以一年為番限也。 朝集所部之內。見任及解代皆須知其任以來年別狀迹。謂國守以下在一選之內。隨問辨答。以上考課。年別狀迹國問辨答也。令第十四

○凡在京文武職事及太宰壹岐對馬皆依官位給祿。謂計以往日給將來祿。然則未給之。祿令第。前以理去官雖滿限日不在給例也。十五

○凡帳內取六位以下子及庶人為之。謂內六位以下子不論嫡庶。何者下之稱。不得取內八位以上子亦不論嫡庶故也。其資人不得取內八位以上子。唯宛職分者聽。並不得取三關及太宰部內陸奧、石城、石背、越中、越後國人。第六

○凡太宰及國司並給事者。帥、二十人。大貳、十四人。少貳、十人。大監、少監、大判、六人。大工、少判事、大典、防人正、主神博士、五人。少典、陰陽師、醫師、少工、竿師、主船、主廚、防人佐、四人。諸令史、三人。史生、二人。以上官衛令第十六

○凡有官船之處。謂除攝津津及太宰主船司之外。諸國有官船之處也。 皆遂便安置。並加覆蓋量遣兵士看守隨懷修理。中界。其主船司船者令船戶分番看守。謂太宰府管轄令。主船亦同。第二十

○凡諸國給給者。謂其數者。依式處分也。亦國別皆給。二 越兵庫垣。及筑紫城。徒一年。云々。曹司垣。杖一百。太宰府垣亦同。律。備禁

○宮殿門庫藏。及倉廩筑紫城等盜鑰者。徒一年。云々。律。嚴盜

○凡新任國司赴任者。云々等。國並取海路給食。如法自餘諸國及太宰帥、大貳、皆給傳符。

○凡少掾轉大掾。少目轉大目之類。籤符運修一紙。

- 凡衛士向京。防人至津之間。皆令國司親目部領。附太宰府。云々。(軍防)
- 應神天皇九年戊戌夏四月。遣武內宿禰於筑紫。以監察百姓。(日本書紀)
- 同十三年壬寅。令武內宿禰。統治九國。兼執北海之政。(同上)
- 天武天皇十一年十二月壬申朔乙亥遣筑紫防人等。飄蕩海連真敷卒。以壬申年功贈大錦上位。(日本書紀)
- 同十四年九月甲寅。直廣肆佐伯宿禰廣足。為筑紫使者。各判官一人、史一人、巡察郡司及百姓之消息。
- 持統天皇三年二月癸卯太宰史生更加十員。
- 同三年春。月甲子遣正七位上大伴宿禰大沼田于西海道。々別錄事一人巡省政績申理冤枉。
- 同三年六月壬午朔賜衣裳筑紫太宰府等。
- 同四年七月辛巳。太宰國司皆還任焉。
- 文武天皇四年十月巳未。以直大壹石上朝臣。為筑紫總領。直廣參小野朝臣毛野為大貳。(續日本紀)
- 大寶二年三月丁酉。聽太宰府專詮擬所部。國掾已下及郡司等。
- 同三年八月甲子。太宰請有勳位者。作番直軍團。考滿之日。送式部。一同散位。永選叙。許之。(同上本紀一卷)
- 靈龜元年八月巳未。制、太宰府官人家口。皆免課役。
- 同二年八月壬子。太宰府言。帥以下事力。依和銅二年六月十七日符。各減半、給綿。自此以來驅仕丁乏。凡諸屬官並為辛苦。請停綿給丁。欲得存濟。許之。(同上本紀七卷)

- 養老二年五月甲辰。禁三關及太宰陸奧等國司。儻伏取白丁(同八卷)
- 同六年夏四月丙戌。始制太宰管内大隅、薩摩、多嶺、壹岐、對馬等。司有闕選府官人擁補之。
- 神龜三年八月乙亥。太政官處分。但太宰府並部下諸國五位以上者。宜給傳符。自外隨使駕船。緣路諸國依例供給。史生亦准此焉。
- 同四年秋七月丁酉。筑紫諸國。庚午藉七百七十卷。以官印々之。
- 天平三年十二月乙酉。令太宰府始補壹岐對馬醫師。
- 同十四年正月辛亥。廢太宰府。遣右大辨從四位下紀朝臣飯麻呂等四人。以廢府官物付筑前國。(以上續紀二十一卷)
- 同十四年八月丁酉制。大隅、薩摩、壹岐、對馬、多嶺、等官人祿者。筑前國司。以廢府物給公廩。又以便國稻。依常依之。其三島擬郡司。並成選人等身留當島。名附筑前國。申上。仕丁國別點三人皆悉進京。
- 同十五年十二月辛卯始置筑紫鎮西府。以從四位下石川朝臣加美為將軍。外從五位下大伴宿禰百世為副將軍。判官二人。主典二人。
- 同十六年九月戊午給鎮西府驛鈴二口。辛酉給鎮西府印一面。
- 同十七年六月辛卯。復置太宰府。以從四位下石川朝臣加美為大貳。從五位上多治比真人牛養。外從五位下大伴宿禰三中。並為少貳。
- 八月巳丑。給太宰府管内諸司印十二面。(以上同十六卷)



○天平神護二年九月丙子。採訪百姓疾苦。判斷前後交替之訟。並損頂取損得其西海道使者便令太宰府勘檢。

○寶龜元年十二月己未。罷筑前國官員隸太宰府。

○同三年十二月己未。太宰府言。壹岐對馬掾從六位上上村主黑繩等。送年糧於對馬島。俄遭逆風。舟破人沒。所載之穀。隨復漂失。謹檢天平寶字四年格。漂失之物。以部領使公廩備。而黑繩等欺云。漂送之期不違常例。但風波之災。非力能制。船破人沒。足明證。府量所申。實難默止。望請自今以後評定虛實徵免。許文。

○同十一年八月庚申。太政官奏曰。筑紫太宰遠居邊要當警不虞。兼待蕃客。已所執掌殊異諸道。而官人相替限以四年。迎故送新。相望道路。府國因弊職此之由。加以所給厨物其數過多。每守舊例充給。或闕蕃客之儲。於是商量。甚不穩便。臣等望請。且停交替料。兼官人歷任增爲五年。然則百姓息肩。庖厨無乏。伏聽天裁。奏可之。

○延曆十六年三月戊辰。太政官府。應選白丁補太宰府使部事。右檢案內太政大臣。寶龜四年八月十六日府備。太宰府使部。自今以後。宜取外散位補之者。若有驅使者撰白丁。不得過二十人者。今被大納言從三位神主宜備。奉勅改前員定四十人。

○同二十年六月壬寅。停太宰府進軍人。

○大同元年六月己亥。公卿奏言。量事制宜聖皇茂典。隨時分職。哲后良規。頃年令太宰府帶筑前國兼廢品官庶存簡要。而今管攝多事。充用少人。伏望增官員得濟繁劇者。勅增加大少監、大少典、各一員。(以上後紀十四卷)

○同二年四月辛寅。太政官府。應給府使部書生等借儀稻事。右得太宰府解備。檢例帳備。直府使部二百人。散位一百人。四月上旬。使部九十許人。書生十許人。量其官位。分爲三等。以正稅稻給借儀。借儀官物。非法所聽。覺舉停止。但伴使部書生等不願產業。遠直府下。頗賜借儀。濟其家運。雖務劇賞薄。進少退多。今依法意已從停止。人望已絕。物情難勸。望請依舊儀賜者。右大臣宣。奉勅依請。

○同三年四月乙未。是日置筑前國守介掾、大少目一員。先是令府官攝行國政。彼此相讓。非專一。事多廢闕。因茲改焉。(後紀十卷七)

○同三年六月丁巳。太政官府。停止新任國司等公糧事。右西海道觀察使、太宰帥從三位藤原朝臣繩主奏備。準延曆二十五年三月十四日令旨。新任國司初到任所。未給公廩。資用乏少。宜各準公廩四分之一。借貸正稅者。然則新任之用。以此足矣。而依舊給糧。於事重疊望請常道公糧。永從停止者。右大臣宣。奉勅自餘諸道亦宜准此。(昇集解)

○同四年六月丙申。云々。太宰帥公廩二萬束。給因幡、備前、備中、讚岐、伊豫、等五國。省遠運費。但非帶觀察使。一依前例。若大貳缺同其料者。准帥闕時。充用蕃客料。弘仁二年二月庚辰。太宰府官並所管國司。聽公廩四分之一。漕于京。遙授之官半分焉。(類聚國史八十四卷)

○弘仁三年八月四日。府郡司之選一依國定。書生等競就本國。無心留府。雖加捉搦。免而無耻。弘仁七年以來。雜公文至今未進。職期之由。望請直府書生。隨其才擔任。主帳以上總數莫過十人。名繁郡司留府衙以繼

譜之慶。奔躁之心者。右大臣宣。奉勅依請。(類聚三)

○同五年正月辛酉。大政官符。更加太宰府管帥一名。右得府解備。管内公文觸類繁多。見任一人。專勞勘會入部都之。使遂差他官。至被勘出。不堪辨申。望請蒙加前件官員。每年相代。將令向京者。右大臣宣。奉勅宜依請。

○天長二年六月戊辰太政官府。定太宰府明法博士官位事。右得彼床解備。去延曆十八年始置件官。而未定官位。謹請官裁者。左大臣宣。奉勅宜為從七位下官。(日本)

○同二年秋七月丁未。二品行彈正尹兼太宰帥葛原親王上表。割愛子息。庶捨王號。許之。(日本)

○同年八月十四日甲寅。大政官符。應直府書生權任郡司事。古得太宰府解備。府所總管九國二島。政跡之體。內外相兼。雜務出納。觸色紛繁。監倉等。早朝就衙。午後分行多事少人。僅檢大畧。唯就事書生得辨細碎。因茲。承前選擇書生。每所配宛永置不替。求得經按繁名郡司盡其勤早而依大政官。

○同四年四月辛丑。御紫宸殿賜鎮西大貳朝野宿禰鹿原錢。

○同十年十二月辛卯。太宰府言。陰陽師雄成言。幸沐天恩。已霽厚祿。但有宿心。猶未得果。解所帶職。出俗歸真。勅試之。(以上續後)

○承安元年五月癸亥。太宰府司公麻。元來班給六國。至天長八年。依民部卿起請。停給六國。混給肥後國。至是勅曰。如聞轉送之勞。民受其費。混給一國。事乖穩便。宜復舊給之。(類聚國史)

○同五年六月丁未。太宰府言。府吏公麻。雖有未納。獨被收正稅金給之。彼代令國司徵填。若當國正稅類少者。管內通行。許之。九月己巳。定太宰府管內地子交易法。綿一屯直稻八束。

○承和十二年六月癸午。太宰府檢案內。去弘仁六年七月二十五日格言。博士醫師教授云。勞良有殊別。遷代成選。並以六考為期。今前壹岐島。醫師外大初位下藤野勝真吉辭狀云。議案。格式內番上者。以六考為選限。外番上志。以八考為選限。真吉在任之日。全得六考。至于今。叙位被賜階准據格式。恐有訛舛者。府加覆審。非唯真吉以往之人。亦尚然也。望請。真吉位記換賜內位。自今以后。大隅、薩摩、日向、壹岐、對馬、等國島博士醫師。同准此例者聽之。

丙寅太宰府言。謹案。去神龜五年八月九日格云。博士者。惣三四國一人。醫師每國一人。又寶龜十年六月七日格云。去閏五月二十七日奏備。博士醫師兼國者。學生勞於齋糧。病人困於救療。望請每國各一人。並以六考選替。立為恒式。畫聞已訖者。夫醫師無國乏任者。為有救療之急也。今筑後、肥前、豐后、等五個國。去府之程二日以上七日以下。雲山重疊。途踏難涉。史民之中。有頓病者。遙著府下營。受醫藥。命在呼吸。且不及夕。往還之間。既致大殃。是則無醫師之所致也。望請。國別減史生一人置醫師一人。加以元來此府有得業生四人。准大隅、薩摩、日向、壹岐、對馬、國島之例。監試得業及第之輩。以將宛補一切不任他人。然則巷無短折之愁。國有戶口之益者。勅宜停減史生。以典藥學生及第者補之。(以上續)

○嘉祥二年三月壬戌。太宰府言。豐前國解備。長官若次官一人。任中一二度。被職取海路入京以辨濟雜務者。

勅依請。但令任用之官。堪事者、入京。自餘管內諸國亦准之。(同十)

○貞觀六年八月十日甲子。右京絕貫百姓大中臣豐御氣。自言曰。親父庶、故刑部卿從四位下東人之玄孫也。

豐御氣、祖父男成流河太宰府。父庶相隨男成生長彼土。歷數十年。貫屬既絕。請復本屬。更爲編戶。(三代)

○十一年九月十日甲子。中務卿三品兼行太宰帥時康(光孝)親王抗表。請賜男子姓名。臣聞破國戲蕃之嘉猷。

忘已利公。賢戚之茂躅。云々。臣才非兩獻器謝雙河。荷國恩於丘山。耻身効於涓澗。今兒息漸衆。錄賜居多。

爲善未聞。損公彌倍。靜而念之。悚慙無限。臣素乏高人之行。猶深報國之志。比年每聞官倉不賸。歲用難支。

雖向人而不言。常通夜而忘寢。徒歛上練之多情。劫恨短袖之難舞。唯願削諸男之屬籍。與群臣而同貫。罷祿

賞。於歲時加絲髮於國用。夫男能自謀。女尤足悲。况又錄田一身公費斯淺。是以故一品葛原親王等。除之不

入於改姓。臣之愚意苟後同之。竊見歸燕欲去。顧戀彫梁。驂將辭。徘徊伏櫪。禽獸猶然。况於人意。既謝皇

蔭之尊。何無係慕之義。仍以宗室朝臣。欲爲其姓。伏望。天慈曲垂哀許。不勝惶欸之至。謹拜表以聞。不許。

(三代)

○同十二年二月十四日。先是二品中務卿兼太宰帥時康(光孝)親王。抗表曰。臣先請恩息改姓爲臣。宸居悠懇

微願未信。云々。臣雖不肖。苟爲弘仁朝廷之苗裔。因願同編於源氏之末。以成親々之厚。伏望天從人欲聖周

物情。蒼溟欸而降恩。弘至公而成德。然則帝道無偏。監前燭而流化。臣誠無二。添涓塵而感愛。(同十)

○同年十一月二十六日。筑前權史生佐伯真繼差加防授下太宰府。(同十)

○同十二年十二月二十五日壬寅。制太宰府及管內國司卒死者。停殯歛料。只資賻物諸賻物之上。兼賜葬料者。

同從停止。(三代)

○同十五年五月十五日戊寅。先是太宰府言。筑前國司備。天長元年六月二十九日格曰。諸國渡船。二十年已

上爲期買替。而島門渡船二艘不知始置之時。今既朽損。利涉失便。况復河岸頽缺。渡口闊遠。公私往還。累

日遙留。望請。以正稅稻乃早買充。依請許之。(典諸國郡以上太領亦准之政官式)

○元慶二年十月十三日。勅令太宰府庫物之代砂金六百三十三兩、水銀百七十五斤、注附官帳。先是府司中賻。

每唐人來。貨物直備用庫物。交關畢後以砂金給綿。惣計返納。其砂金一兩充綿十六屯。綿一疋宛十四屯。府

司不能勘。行來尙矣。今常交替之日。新司論曰。物非其實。相違官帳。仍不受領。而太政官。去年八月四日

符。只免唐人崖鐸之時。返上砂金三百六十一兩。望請准據彼例。被註帳從之。

○凡太宰府僱仗史生。並管國史生賻物。並以當國物給之。(治部)

○凡採鑄鏡料銅所。雜色人四人。太宰府染生一人。並預勘藉例。

凡飛彈陸奧出羽、及太宰所管諸國人。皆不得補帳內職分位分資人。

凡郡司有闕。國子銓擬歷名附朝集使。申上其身。正月內集省若二月以後參着者。隨返却。厥後擬文者。四月

廿日以前奏聞。但陸奧、出羽、及太宰管內。唯進歷名。若以白丁銓擬副勘籍簿。云々。

凡太宰府書生帶郡司者。莫責同門一從。

凡太宰及國司並依番朝集。其央生者不在朝集之限。自餘雜事。並聽附申。若目己上不足者。聽申官差充。

凡諸國非業博士醫師。以四年為秩限。但出羽太宰管内諸國五年為限。

凡陸奧、出羽、太宰管内諸國。蔭子孫位子。雖不向省。聽豫出身。(以上式部省式)

○點仕丁者。每五十戶二人。云々。太宰管内並不在點限。以々。

凡點女丁者。總計諸國。不得過九十人。但云々。及太宰管内、並不在點限。

凡太宰府管内。諸國島大調帳、稅帳。令府雜掌勘申。

凡太宰府並九國二島。選士資丁。賜僑丁一人。

凡應造籍者。預前一年省錄申官待報施行。職國官司依例勘造。其諸國附貢調使。太宰付貢綿使申送。檢領訖錄白返抄。七

凡繼任郡司不給職田。但太宰府書生帶郡司者。不在此例。

凡陸奧鎮守。太宰府。國府掌各二人。每人給職田二丁。

凡進正稅帳者。皆限二月三十日以前。並申送官。但西海道諸國並島。二月三十日以前送太宰府。府以加覆勘。

五月三十日以前申官。

凡計帳者。陸奧、出羽、兩國。太宰府。九月三十日以前申送。餘國如令。

凡太宰府蕃客儲米三千八百四十石。若經年致損。便充公用。廻舊收新且事。其修理府中館舍料稻四萬束。每

年出舉六國取其利息充用。若利滿一萬束召停舉。

凡新任國司到任者。給舖設。以僑儲備。但太宰帥已下僸仗已上。以調庸中男作物充。並一給之後。不可更賜。

凡山陽西海道等。府國新任官人、赴任者。皆取海路。仍令綠海國。依例給食。但西海道國司到府。即乘傳馬。其大貳已上乃取陸

路。(以上式部省令)

○太宰所管諸國。充對馬島司公廨之外。交易輕貨。送太政官厨。自餘諸國交易送亦同。云々。諸國運漕雜物

功賃。云々。太宰府海路。(自博多津漕難波津船賃石別五束挾抄六十束、水手四十束、云々)右運漕功賃。並依前件。其路糧者各准程上。人日米二升。

鹽二勺。下人減半。(以上主稅式)

○凡太宰於兩島樹牌。具顯著島名及泊船處、有水處、並去就國行程。遙見島。仍令漂著船。人必知有所歸向。

凡國司。不乘驛傳馬。但正稅大蝶集等吏乘驛馬。國司新向國乘傳馬。其太宰以管内諸國向府准此。(以上雜式)

○凡太宰帥、大貳、並陸奧、出羽、按察便。及守等僸仗者。申太政官補之。不得輒取白丁。若情願以子補之

者。聽取一人。但身不趣任者不給之。(式部省式)

○凡太宰及陸奧國、漏刻守辰丁各六人。課役俱免。每年相替。

○凡太宰府鼓吹丁。筑前肥後各七十二人。筑後肥前各五十四人。豊前豊後各三十六人。並免其僸役。

○凡太宰府充仕丁者。帥、三十八。大貳、二十人。少貳、十二人。大少監、各八人。主神、工、大少典、博

士、明法博士、主厨、各六人。音博士、陰陽、醫師、竿師、主船、各五人。大唐通事、四人。史生新羅譯語。

弩師、僮仗、各三人。府衛、四人。學授、二人。稅倉、二人。藥司、一人。匠師、一人。修理器仗所、一人。守客館、一人。守辰、六人。守驛官、一人。儲料、二十人。並准諸國事方。其食皆充庸米。若有仕丁情願酬備者。並以黑綿三十斤為限。不得因此過收。云々。(以上民部名式)

○凡太宰府。處分公廨。帥、十分。大貳、六分半。少貳、五分。監、三分。典、二分。主工博士、明法博士、音博士、一分大半。主城陰陽師、醫師、竿師、主船主厨、一分半。大唐通事、一分半。史生、弩師、新羅譯話、僮仗、一分。

○凡五畿內云々。太宰所管諸國充對馬島司公廨之外。交輕貨。送太政官厨。(以上主稅式)

○凡國司遷代者。皆給天馬。云々。太宰。七十人以下。少貳以上五十人以上。

○帥大貳趣任事、

定其日觸頭藏人云々、奉仰令催近習公卿兩三人計。或一人、或四人、先例不定、但近例、多三人之內、納言一人、必可召之、帥之上龍可宜。

當日殿上臺盤居酒肴。

不居小臺盤無飯、是內藏所儲耳。

孫庇南第一二間。鋪緣端帖二枚。為垣下公卿座。

御裝束或罷申之後。依勅奉仕之。云云。

同座西長押下中央。鋪圓座一枚。為帥若大貳座。

帥者、鋪第二間。或當第二柱。大貳鋪第一間。非參議大貳者雖可候長押下猶庇第一間南退鋪之。佐忠經等特例也。但元名朝臣候南候小板敷。云々。

若臨暗者。御座左右。並公卿坐上立燈臺。(長元七年記立公卿坐上上下、云々)

垣下公卿等參入候殿上帥參入。

未昇殿之人。先是被聽之。

於名門外。付頭若五位藏人。令奏其日。趣任由。被仰暫可候殿上由。帥暫候殿上。良基登自小板敷。待召間。居小臺盤前。可尋之。

此間往年有盃酌。(近例殊未見)主上出御(御直)召人、(頭藏人先藏人候小板敷)奉仰出殿。召公卿並帥。

此事先例不定。或先召帥。勅語后復坐。次召公卿。或先召公卿。次又召帥。或一度被仰可參入由。或曰帥者先召被仰勸語參入。大貳者後召令納言傳仰勸語。云々。此說雖似有所據。先例又不定歟。康保三年非參議大貳佐忠先被召之故也。

公卿經篋子著坐。帥自廣廂南方著座。

先居年中行事障子下。後進。若疑先勸語之由歟。殿上五位居衝重。

先帥前居座北。次公卿前居西。並昇自庇南方促之。不經篋子敷。

次一獻。

藏人頭勸盃。六位藏人執瓶子。路如初。於帥南勸之。或五位執瓶子。擬垣下公卿。

次二獻。

納言出自殿上執之。五位執瓶子。放盞後。經篋子敷復座。

次三獻。次公卿執之。瓶子同上。次主上目給。

或三給以前被仰延久三年例也。

納言稱咆。音微。經篋子敷。自第四間入候長押下。通南勸語。云々。

隨時不同。多是可愼不虞。與復管内隨勸可賞由歟。

或此次有恩賞。被叙一階云々。納言復座目帥。帥頗膝行。

進即傳示勸語畢。次藏人頭執祿物給之。

御半臂下襲表御袴。內藏寮白大樹一領也。或加給御袍。或加給麴塵御衣。並隨人有殊常之恩歟。

其路入自鬼間障子。經母家第二間庇第一間。出御屏風妻。自大貳後方。下孫庇。纏頭自殿上退出。次大貳下

殿徒跣拜舞。

其路下自長押西第一間。經長橋中。東行經同東井石階。進出於河竹臺東北。去臺五尺許。舞蹈。但於仙華

門邊。唯纏御半臂於頸留。自餘御衣等。子族取之。

此間引御馬。

近衛府生一人。若禰引御馬入自瀧口戶。當吳竹臺西南。暫留之。引返之後。給大貳僕從其人。永保二年例。

御馬一疋。與府生爲備。不可然歟。

大貳拜畢自仙華門退出。

於仙華門外退出。

○凡太宰府應奏神事者。帥獨署。若帥有故。少貳以上一人署奏。(以上雜式)

◎貢進

奉獻物、貢綿使、諸國貢調庸、別貢雜物、府貢御贄物、

○天武天皇六年十一月己未。筑紫太宰。獻赤鳥。則太宰府諸司人賜各有差。且專捕赤鳥者。賜爵五級。乃當郡々司等。加增爵位。因給復郡內百姓。以一年之租。是日。大赦天下。(日本紀)

○同十一年三月癸未。筑紫太宰。丹比真人鳥等。貢大鐘。(同)

○同十二年筑正月庚寅。筑紫太宰丹比真人等貢三足雀。(同)

○持統天皇元年三月筑紫太宰。獻三國高麗、百濟、新羅、百姓男女。并僧尼六十二人。四月癸卯。筑紫太宰。獻投化新羅僧尼及百姓男女二十二。居于武藏國。賦田受粟。使安生業。(同)

九月甲申。新羅遣王子金霜林等。奏請國政。且獻調賦。云々。(同)

○同二年二月辛卯。太宰獻新羅調賦。金銀絹布。皮銅鐵之類十餘物。并別所獻。佛像種々彩絹。烏馬之類十餘種。及霜林所獻。金銀彩色種々珍異之物。并八十餘物。已亥霰霜林等於筑紫館。賜物各有差。(同)

○同三年正月壬戌。筑紫太宰粟田真人朝臣等。獻隼人一百七十四人。并五十常。牛皮六枚。鹿皮五十枚。(同)

○和銅三年正月丙寅。太宰府獻銅錢。(續紀 五卷)

○靈龜元年五月辛卯。太宰府言。豐後伊豫二國之境。從來買成不許往還。但高下尊卑不須無別。宜五位已上

差使往還不在禁限。又薩摩、大隅、二國、貢進人。已經八歲。道路遙隔。去來不便。或父母老疾。或妻子單食。請限六年相替。並許之。(同七)

○養老六年五月辛巳。大隅、薩摩、二國。隼人等六百二十四人朝貢。甲申賜饗於隼人。各奏其風俗歌舞。酋長三十四人。叙位賜祿各有差。六月庚子隼人歸鄉。

○天平七年六月。太宰府管內諸國々別。貢兵衛一人采女一人。(同十 九卷)

○神護景雲三年三月乙未。始每運太宰府綿廿萬屯。以輸京庫。(同二十 九卷)

○寶龜二年三月戊午。太宰府獻白雉。(同三十 一卷)

○延曆十六年春正月戊子。太宰府獻白雀。宴侍臣已上於前殿。(新羅國史 七十一卷)

○同二十年。停太宰府進隼人。(同二 十卷)

○弘仁七年三月庚午。令太宰府每年進絹三千疋。(日本紀 卷七)

○承和五年十月甲寅。太政官處分。太宰府例進緋綿紬一百端。今定紺紬十端。黑緋紬四十端。緋紬五十端。畫革五十枚。今定白革三枚。畫革廿枚。(續後紀 七卷)

○同六年七月己亥。令太宰府進上自大唐所奉請。大元帥畫像。(同八 卷)

○同八年二月戊辰。太政官。仰太宰府云。新羅人張寶高。去年十二月進馬鞭等。云々。(同十 卷)

○同十一年六月己未。太宰府獻白鳥一双。(同十 四卷)

○弘仁十三年十二月丙申。太政官符。應令太宰府司填納別貢雜物挾抄水脚等三十四人。所給衣料代物事。商布八十八端、綿四十四屯。右被右大臣宣備。彼府別貢雜物等五月以前爲例進上而事乖前例違期乃貢。遂使水脚等涉秋終冬。寒苦嚴節。此則府使不悛。前怠之所致也。宜令給衣料其代者色別准率奪府吏公廩混合正稅。

(類聚三)

○仁壽二年二月戊午。太宰少貳從五位下橘朝臣高宗。獻白鼠一頭。(文德實錄四卷)

○齊衡元年正月丁亥。太宰府貢腹赤魚。承前元日貢之。延至今日緩之。(同六)

○貞觀元年正月朔。天皇不受朝賀。諒闇也。中務省七耀曆。宮內省藏水樣。太宰府腹赤魚等。付內侍奏。(三實錄二卷)

○同十年十一月廿八日。太宰府獻白鹿。放神泉苑。(同十)

○同十四年十月廿六日。勅太宰府。輸貢綿以鹿惡特甚。宜降新典。更肅將來。仍須其鹿惡絹百疋及綿萬純。滿彼府藏司。別並使監典並解却見任。(同廿)

○同十八年九月十七日。太宰府言。管筑後國出舉不足利弊之數。請以肥後國正稅五萬束。足其數。許之。(同九)

○元慶元年十二月八日。先是太宰府言。資財蕃客。遣使留置進上等四箇帳。貢綿千一百五十二屯。從積庫底。將致腐損。請相轉沙金五百七十兩。以爲永貯。至是許之。(同三十)

○同八年五月朔。太宰府年貢綿十萬屯。以絹相轉。進上。彼府申請。春夏連雨。蠶養不利。作綿是乏。輸貢可闕。望相換進之。太政官處分依請焉。(同十)

○同年九月五日。大隅守從五位時統宿稱當世。修解申請備。大隅、薩摩、日向、壹岐、對馬、等國島。四度公文進太宰府。國島雜掌不更向京。而此國自天長元年以降六十年。未請稅帳返抄。就中從天長元年。迄貞觀十五年。合五十年。正稅返却帳所徵。勘出穀類額二百五十一萬二千六百九十束。自貞觀十六年迄當年。一十一年。公文未勘。其帳未進。然則勘出之穀。未知幾許。望請准六國雜掌。勘辨彼帳。太政官處分。依請即下知太宰府。(類聚國史八十卷)

○同九年五月三日太宰府言。管日向國守從五位下安部朝臣弘行解備。自弘仁十三年。迄貞觀十四年。合卅九年。正稅返却牒載應徵額。三百七十四萬八千四百一十一束九把八分八毫。自貞觀十五年至今。總九年。未得勘牒。勘出之物。隨而可知。管內之政。先申於府。府更修解申官。千里報待。五年秩終國史之煩無不由此。請准筑後、肥前、豐後等之例。不請府解。直取押署。差國司言上。太政官處分依請。(同)

○仁和二年春正月廿九日。太宰府例貢小柑子。以十一月三十日己前。爲貢進之期。先是不立期限。故今定之。(三代實錄四十九卷)

○同三年五月廿六日。太宰府貢鷓鴣鳥。元從陸道進之。中間取海道。以省路次之煩。寄事風浪。屢致違期。今依舊自陸道。(同五)



○凡諸國貢調庸者。云々。西海道納太宰府。(其出納帳並附正稅帳使申送一民部省令)

○筑前國云々。府官公廩。十五萬束。衛卒料二萬一千四百束。(即日數有增減。修理府官舍料六千束。下皆同之。)

○筑後國云々。府官公廩。十萬束。衛卒料一萬八千一百五束。修理府官舍料。六千束。

○肥前國云々。府官公廩。十五萬束。衛卒料一萬八千一百五束。修理府官舍料六千束。

○肥後國云々。府官公廩卅五萬束。衛卒料三萬五千七百九十五束。修理府官舍料一萬束。

○豐前國云々。府官公廩十萬束。衛卒料一萬七千五百五十束。修理官舍料六千束。

○豐後國云々。府官公廩十五萬束。衛卒料一萬六千四百七十二束。修理府官舍料六千束。

○薩摩國云々。修理官舍料二萬束。(已上主稅式)

○太宰府。筆一千一百廿管。兔毛、鹿毛、各五百六十管。墨四百五十挺。以上二種。盛韓櫃一合。斐紙一千張。麻紙二百張。斐麻二百斤。麥門冬二斛二斗。紫草。日向八百斤。大隅一千八百斤。青砥。二百顆。赤木。南島所進。其數隨得。右別貢雜物並依前件。自餘雜藥見典藥式。其運送係夫各給路糧。

太宰府銀八百九十兩。深紫帛五十疋。淺紫帛一百疋。深緋綿袖廿四疋。緋綿細七十六疋。紺袖十疋。深紫貨布廿端。淺紫布廿端。緋貨布卅端。淺紫貨布三十端。白貨布五十端。紫革卅張。纈革卅張。畫革廿張。洗革

一百張。白草廿張。海石榴油十石。席三千枚。右管國調物依件染造。其雜綵并草等。並盛韓櫃。其運脚並給功食。凡太宰府每年調絹三千疋。附貢綿使進之。又華人調布。除府家三箇年雜用料之外。附使進上。凡太宰所收。調絲除儲料五百鈞之外。每年附貢綿使進之。凡太宰府。年料造進。朱漆酒海六合。三合徑二尺。三合徑一尺六寸。下食盤六十枚。徑一尺七寸。中盤八十八枚。飯碗一百口。徑七寸。羹碗二百口。百口徑六寸五分。百口徑六寸。盤四百五十枚。卅枚徑七寸。二百廿枚。徑六寸。二百枚。徑五寸五分。蓋二百五十口。百五十口徑五寸。百口徑四寸五分。黑漆提壺十四口。右以正稅充料造進。(同上料別貢雜物式)

○太宰府七十壺。十五口各大一升。卅五口各十五。合廿口。各小升。右爲第五番。(諸國貢雜式)

太宰府絹四千疋。履料。牛皮廿四張。狸皮十張。銀三百兩。金漆五缶。朱砂一千兩。茜二千斤。紫草五千六百斤。豬膏二石。雜油卅石。檳榔馬錢六十領。同蝶錢百廿領。蘭帖笠卅蓋。黑漆鞍十具。鐵鎧廿隻。右以正稅交易進。其運功食並用正稅。云々。其太宰雜油卅石。中男作物。若滿此數者。更不交易。(同上交易雜物式)

○元日群臣未喚之前。省輔已上。將本司入奏。云々。太宰府進禮留。腹赤乃御贊一隻。長若干尺進樂久乎申給登申。(宮內式)

○凡太宰府所貢。御贊者。調物二千二百九十二斤中。男作物及梁作。并厨作等物。斤物一千七百八斤。斗物

二石二斗八升。並收贊殿。其收贊之日。省歷錄名。一人率史生二人。共就贊殿。獻納畢。申官給返抄。

○諸國貢進菓子。太宰府。甘葛煎七斗。但木蓮子者。筑前國部內諸山乃壹岐等島所出之中。擇好味者。年中貢。(大勝式)

○諸國貢進年料雜藥。太宰府十二種。木蘭皮百五十斤。土瓜石膏各十斤。龍骨六十斤。皂莢四十斤。代赭石禹餘糧各一斗。鬼臼狸骨二具。檳榔子八參各廿斤。石解十斤。(典藥式)

○凡貢雜官物船。則到綠海國。濬引令知舊處。

凡太宰貢御贊吏。不得私持他物以致人患。

凡太宰貢綿穀船者。擇買勝載二百五十石以上三百石以下。不著樞。進上便即令習用樞。其用度充正稅。

○延喜十九年七月十六日。交易唐物使藏人所出納內藏大屬當麻有業獻孔雀。此唐人鮑置求所造太宰大貳也。

其毛彩鮮花。勝於往年所來。但其尾經夏折落。午剋使左近衛少將實賴奉覽孔雀於仁和寺。有業交易唐物召於御前。御覽了。(扶桑略記)

### ○警 虞

官衛令、軍團、築城、防堤、關塞、烽火、所在ノ兵庫、定額軍馬、弓矢防人、飛驒使、兵備訓練、弩師、邊要ノ儲穀、綠海ノ衛戍、射田法、衛卒料米、隨身兵、賚私糧、唐通事、

○宣化天皇元年夏五月辛丑朔。詔曰。食者天下之本也。黃金萬貫。不可療飢。白玉千箱。何能救冷。夫筑紫國者。遐邇之所朝屆。去來所關門。是以海表之國。候海水以來賓。望天雲而奉貢。自胎中之帝泊于朕身。收藏穀稼。蓄積儲糧。遙設凶年。厚饗良客。安國之方更無過此。故朕遣阿蘇仍君。加運河內國茨田郡屯倉之穀。蘇我大臣稻目宿禰宜。遣尾張連。運尾張國屯倉之穀。物部麤鹿火。宜遣新家連。運新家連運新家屯倉之穀。阿部臣宜遣伊賀臣。運伊賀國屯倉之穀。修造官家那津之口。(今ノ博多)又其筑紫肥豐二國屯倉散在縣隔。運輸遙阻。儼如須要。難以備率。亦宜課諸郡。分移聚建那津之口。以備非常。永為民命。早下郡縣。令知朕心。(日本書紀)

○欽明天皇十七年春正月。百濟王子惠請罷。仍賜兵仗良馬甚多。云々。於是遣阿部臣佐伯連。播磨直。率筑紫國舟師衛護達國。別遣筑紫大君。率勇士一千。衛送彌氏。(津ノ)因令守津路要害之地焉。

○齊明天皇七年辛酉五月九日。伐朝倉社樹。造橋廣庭宮遷居之。神為祟。宮墮鬼火見。大倉人及諸近侍病死者多。是時置新蓋關。(大日本書紀)

○天智天皇三年甲子。於對馬島壹岐筑紫國等。置防與烽。又於筑紫。築大堤。貯水名曰水城。

○同四年乙丑秋八月。遣達率荅林春。築城於長門國。遣達率憶禮福留達率四比福夫。於筑紫國。築大野及椽二城。

○同六年十一月。是月築倭國ノ高安城。設吉園山田郡屋島城。對馬國金田城。

○同六年十一月丁巳朔乙丑百濟鎮將劉仁願。遣熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等。送大山下境部連石積等。筑紫都督府。

○同九年二月築長門一城筑紫二城。

○天武天皇元年六月。大友皇子謂群臣曰。云々。且遣佐伯連男於筑紫。遣樟使主磐手於吉備國。並悉令與兵。仍謂男與磐手曰。其筑紫太宰栗隈三。與吉備國宇當麻公廣島二人。元有大皇弟疑有反狀。若有不服色即殺之。云々。男至筑紫時。栗隈王。承符對曰。筑紫國者。元成邊賊之難也。其峻城深濶守者。豈為內賊耶。今長命而發軍則國空矣。若不意之外。有倉卒之事。願社稷傾之。然後雖百殺臣。何益焉。豈敢背德耶。輒不動兵者。其是緣也。時栗隈之二子。三野王、武家王。佩劍立于側而無退。於是男按劍欲進。還恐見亡故。不能成事而空還之。云々。(日本紀)

○同十四年乙酉十一月癸卯朔甲辰。筑紫太宰請儲用物ツレキモノ。絹一百疋、絲一百斤、布三百端、庸布四百當、鐵一萬斤、箭竹二千連、送下筑紫。十二月壬申朔乙亥。遣筑紫。防人等飄蕩海中。皆失衣裳。則為防人衣服。以布

四百五十端。給下於筑紫。

○持統天皇三年二月甲申朔丙申。詔。筑紫防人滿年限者替。

○同三年九月丁丑。以淨廣肆河內王為筑紫太宰帥。授兵仗及賜物。以直廣壹授直廣。貳丹比真人島增封一百戶。通前九月庚辰朔己丑。遣直廣參石上朝臣麿。直廣肆石川朝臣虫名等於筑紫。給送位記。且監新城。

○文武天皇二年五月甲申。令太宰府。繕治大野、基肆、鞠智三城。三年十二月甲申。令太宰府。修三野、稻積、二城。(概紀一卷)

○大寶二年二月己未。歌斐國。獻梓弓五百張。以充太宰府。三月甲午。信濃國。獻梓弓一千二十張以充太宰府。(同二年)

○慶雲元年三月庚午。以信濃國獻弓一千四百張。充太宰府。八月甲子太宰府。請有勳位者。作番直軍團。考滿之日。送於式部。一同散位永預選叙。(同三年)

○靈龜元年三月甲辰。勅太宰府。賜綿五千四百五十斤。船一艘。五月甲午詔曰。五兵之用。自古尙矣。服強懷柔。咸因武德。今六道諸國。營造器械。不甚牢固。臨事何用。自今以後每年貢樣。巡察使出日。細為檢勘焉。

○同二年四月辛未。詔太宰府。飛驒鈴八口。傳符十枚。

○同年八月癸卯。弓五千三百七十四張。充太宰府。(同上同七卷)

○寶龜五年十一月乙巳。陸奧言。太宰、陸奧、同警不虞。飛驒之奏當記時尅。而太宰既有漏尅。此國獨無器者。遣使置之。

○養老三年正月庚寅。以船二艘、獨底船十艘。充太宰府。(同八)

○天平二年九月。停諸國防人。同七年九月停筑紫防人歸于本鄉。差筑紫人。令成壹岐對馬。(續紀)

○天平勝寶六年二月丙戌。勅太宰府。去天平七年故大貳從四位上小野朝臣老。遣高橋連牛養於南島。樹牌而其牌經年。今既朽壞。宜依舊修樹。每牌顯著島名。並泊船處。有水處。及去就國行程。遙見島名。令漂著之船知所歸向。

○同七年六月甲辰始築怡土城。令太宰大貳吉備朝臣真備專當其事焉。

○天平寶字元年閏八月壬申。勅曰太宰府防人。頃年差坂東諸國兵士發遣。由是路次之國皆苦供給。防人產業亦難辦濟。自今已後。宜差西海道七國兵士。合一千人。充防人司。依式鎮戍。其集府之日。便習五教。事具別式。(同廿)

○同十二年十二月戊申。遣勃海使、小野朝臣田守等。奏唐國消息曰。天寶十四年。歲次乙未十一月九日。御史大夫兼范陽節度使安祿山。反舉兵作亂。自稱大燕聖武皇帝。云々。於是。勅太宰府曰。安祿山者。是狂胡狡豎也。逆天起逆。事必不利。疑是不能計西還更掠。云々。(同廿)

○同三年三月庚寅。太宰府言。府官所見。方有不安者四。據警固式。於博多大津及壹岐對馬等要害之處。可

置船一百隻以上。以備不虞。而今無船可用。交關機要。不安一也。

太宰府者。三面帶海。諸蕃是待。而自罷東國防人。邊戍日以荒散。如不慮之表萬一有變。何以應卒。何以示威。不安二也。

管內防人一停作城。勅赴武藝。習其戰陣。而大貳吉備朝臣真備論曰。且耕且戰。古人稱善。乞五十日教習而十日役于築城。所請雖可行。府僚或不同。不安三也。

○天平四年八月廿二日。有勅。所有兵士。全免調庸。其白丁者免調輸庸。當時民息兵強。可謂邊鎮。今管內百姓乏絕者衆。不有優復。無以自贖。不安四也。勅。船者宜給公糧。以雜備造。東國防人者衆議不免。仍不依請。管內防人。十日役者。依真備之議。優復者。政得其理。民自富強。宜勉所職以副朝務。六月壬子。令太宰府造行軍式。以將伐新羅也。(同上同廿二卷)

○同四年七月甲申。西海道巡察使、式部少輔從五位下紀朝臣牛養言。戎器之設。諸國所同。今西海諸國。不造年耕器仗。既曰邊要當備不虞。於是仰筑前、筑後、肥後、豐前、豐後、日向等國。造備甲刀弓箭。各有數。每年送其樣於太宰府。

○同年十一月丁酉。正四位下吉備朝臣真備爲西海道使。從五位上多治比真人土作、佐伯宿禰美濃麻呂、爲副判官四人錄事四人。筑前、筑後、肥後、豐前、豐後、日向、大隅、薩摩、等八國檢定船一百三十一隻、兵士一萬二千五百人、子弟六十二人、水手四千九百廿人、皆免三年田租。悉赴弓馬。兼調習五行之陣。其所遣兵

士者。便役造兵器。

○同年十一月丙申。遣授刀舍人、春日部三關、中衛舍人、土師宿禰關成、等六人於太宰府。就大貳吉備朝臣真備。令習諸葛孔明八陣。孫子九地及結陣向背。(同上同廿三卷)

○同六年正月丁未。造東海、南海、西海等道節度使料綿襖胃。各二萬二百五十具於太宰府。其製一如唐國新樣。仍象五行之色。皆畫甲板之形。碧地者以朱。赤地者以黃。黃地者以朱。白地者以黑。黑地者以白。每四千五十具。成一行之色。四月辛未始置太宰督師。(同廿四卷)

○天平神護元年三月辛巳。太宰大貳從四位下佐伯宿禰今毛人。為築怡土城。專知官。少貳從五位下采女朝臣淨庭。為修理水城專知官。(同二十卷)

○同二年四月壬辰。太宰府言。防賊成邊本資東國之軍。持衆宣威。非是筑紫之兵。今割筑前等六國兵士。以為防人。以其所遺分番上下。人非勇健。防守難濟望請東國防人依舊配戍。勅修理陸奧城柵。多與東國力役。事須彼此通融。各得其宜。今聞東國防人。多留筑紫。宜加檢括。且以配戍。即隨其數。簡却六國所點防人。具狀奏來。許其所欠。差點東人。以填三千。斯乃東國勞輕。西邊兵足。(同廿七卷)

○神護景雲二年二月癸卯。筑前國怡土城成。

○寶龜三年十一月辛丑。罷筑紫營大津城監。

○同十一年私七月丁丑。勅。安不忘危。古今通典。宜仰緣海諸國勸令警固。云々。又太宰府宜依同年節度使

從三位藤原朝臣宇合之時式。

○七月戊子。勅曰。筑紫太宰僻居西海。諸蕃朝貢。舟楫相望。由是簡練士馬。精銳甲兵。以示威武。以備非常。今北陸道亦供蕃客。所有軍兵。未曾教習。屬事徵發。全無堪用。安必思危。豈合如此。宜准太宰。依式警虞。須緣海村邑。見賊來過者。當即差使。連申於國。國知賊船者。長官已下。急向國衙。應事集議。令管內警虞。且行且奏。其一

賊船率來。著我邊岸者。當界百姓。執隨身兵。並資私糧。走赴要處。致死相戰。必待救兵。勿作逗留令賊乘間。其二

軍所集處。預立標榜。宜量地勢。得便宜。兵士已上及百姓。便弓馬者。量程遠近。結隊分配。不得臨事彼此雜亂。其三

戰士已上。明知賊來者。執隨身兵。兼佩館戟。發所在處。直赴本軍。各作軍排。各比隊伍。以靜待動。乘逸擊勞。其四

應機赴軍。國司已上皆乘私馬。若不足者。即以驛傳馬充之。其五

兵士白丁赴軍。及待進止。應給公糧者。計起自家者。乃給其用處者給米。要處者給糶。其六

○延曆九年夏四月辛巳仰太宰府令鐵胃二千九百枚。

○大同元年五月丁亥勅。備後、安藝、周防、長門等國驛館。本備蕃客。瓦葺、粉壁。頻年百姓疲弊。修造難

堪。或蕃客入朝者。便從海路。其破損者。農間修理。但長門國驛者。近臨海邊。爲人所見。宜特加勞。勿減前制。其新造者。特定樣造之。(日本後起)

○同年十月壬戌勅。夷俘之徒。募化內屬。居要害之地。足備不虞。宜在近江國夷俘。六百四十人遷太宰府。置爲防人。每國椽已上二人。專當其事。驅使勘當。勿同平民。量情隨宜。不忤野心。祿物衣服。公田之類。不問男女。一依前例。但防人之糧。終世永給。口分田者。以前防人乘田等給之。其去年所置。防人四百十一人。皆宜停廢。(類聚國史)

○同三年六月壬戌。西海道觀察使兼太宰帥從三位藤原朝臣繩主。上表曰。伏奉發中之詔。擢臣爲西海道觀察使兼賜食封。恭聞顯命。恩越恒品。心魂震奮。啓處無地。臣聞諸道觀察使。任在內官。更無外澤。至于賜封。固其宜矣。於臣身居當道。饒給公廩。兼亦食邑。偏濫殊甚。又臣性識庸虛。一無足取。況乎奉使經歲。政違未聞。伏願奉返使封。少免素餐。區々丹愿。伏待矜允。謹遣少典正七位下臣山田造益人。奉表以聞。詔報曰。忽省來表。獨辭使封。執志謙退。聲溢時聽。但遠出外州。人之所苦。卿者爲方牧。兼居蕃鎮。思欲分憂。同康景化。忠肅之懿。優賞斯期。宜得此意。無煩重表。(同十卷)

○弘仁三年正月甲子。太宰府。去十二月廿八日奏云。對馬島云。今月六日新羅船三艘。浮於西海。俄而一艘之船。著于下縣郡佐須浦。船中有十人。言語不通。消息難知。其二艘者。開夜流去。未知所到。七日船廿餘艘。在島西海中燭火相連。於是遂知賊船。仍殺先著者五人。五人遁去。後日捕獲四人。即衛兵庫。且發軍士。

又遙望新羅。每夜有火光數所。由是疑懼不止。仍申送者。爲問其事。差新羅譯語。並軍毅等。發遣已訖。且准舊例。應護要害之狀。告管內並長門、石見、出雲、等國訖者。所奏消息。既是大事。虛實之狀。續須言上。而久移年月。遂無所申。又要害之國。必發人兵。應疲警備。解却之事。期於何日。宜言其由。不得更怠。又量事勢。不足爲虞。宜令停出雲、石見、長門、等國護要害事。(同廿卷)

○同四年九月戊寅。太政官府。應停對馬島史生一員置新羅譯語一人。右得太宰府解備。新羅之船來著。件島言語不通。來由難審。彼此相疑。濫加殺害。望請減史生一人。置件譯語者。右得大臣宣。奉勅依請。

○同五年五月廿一日丁卯。太政官府。應太宰府省史生置譯師事。右得府解備。去延曆十六年、此府譯師永從停廢。不虞之備不可不儲。望請。除史生一員永置譯師一員者。右大臣宣。奉勅依請。

○同十三年三月癸巳。太政官府。應停對馬史生。置博士事。右得太宰府解備。島司解備。此島僻居濱海之外。遙接隣國之界。所任之史。才非其人。爲政之要多蒙滯。接陸之國。皆備彼位。絕域之島猶闕此官。無師質疑。不隣往問。縱令諸蕃之客。卒爾著境。若有書契之間誰以通答。望請特件博士。且以教生徒。且以備專對者。府加復審。所申有理。謹請官裁者。右大臣宣。奉勅宜停史生一員改置博士。

○天長元年九月戊申。太政官謹奏。停多嶽島隸大隅事。右參議太宰大貳從四位下小野朝臣岑守等解備。謹檢案內。太政官。去二月十一日符備。件島南居海中。人兵交弱。在於國家。良非打城。又島司一年給物。准稻三萬六千餘束。其島貢調。鹿皮一百餘領。更無別物。可謂有名無實。多損少益。右大臣宣奉。勅。宜勘利

害言上者。南溟綠々。無國無敵。有損無益。一如符旨。須停島隸大隅國。計其課口。不足一鄉。量其土地。有餘一郡。能滿合於馭談。益救合於熊毛四郡爲二。於事得便者。聖帝登極。事期濟世。明王布政理。貴適時。臣等商量。昔漢元帝納賈損之言。罷珠崖郡。前史以爲美談。後世稱其英列。雖建國重疆。非無分野。而郵民救急。猶奔列郡。况溟海之外。費損如此。加以往還之吏。漂亡者多。運送之民。蕩沒不少。守無益之地。有損用之物。求之政典。深遠物義。伏望。依件停隸以省邊弊。伏聽天裁。謹以申聞。(本朝文 釋四卷)

○承和二年三月丁巳。賜太宰府綿甲一百領。冑一百口。袴四百腰。充遣唐舶不虞之備。

已未太宰府言。壹岐島遙居海中。地勢隘陝。人數寡少。難支機急。頃年新羅商人。來闕不絕。非置防人。何備非常。請令島徭人三百卅人。帶兵仗。戌十四所要害之埒。許之。(以上同 四卷)

○承和六年七月丙申。令太宰府。造新羅船。以能堪風波也。

十月乙丑出羽國言。云々。勅曰陸奧出羽。并太宰府等若有機變。隨宜行之。且以言上。克制權變。令禦不虞。轉禍爲福。佛神是先宜修奉幣。(以上同 八卷)

○七年九月丁亥。太宰府言。對馬島司言。遙海之事。風波危險。年中貢調四度。公文屢途湮沒。傳聞新羅船。能凌波行。望請。新羅船六隻之內。分給一隻聽之。(同九 卷)

○同八年三月己亥。太宰府言。肥後國阿蘇郡神靈池。洪水盈科歷水旱。以自若而今無故涸減卅丈。靜思厥咎。朕甚懼焉。詢之蓍龜。告以旱疫。今欲因循往烈。則象前規。施以德政。防茲災生月。宜每寺齋戒共致薰修。

每社奉幣式祈禳祐。天下蒸民。今年雜徭。縱雖事多。莫過廿日。至於有閑。逾亦省之。鰥寡惻獨。不能自存者。量加振濟。凡厥國咸自策。勉詳求人瘼。使無冤滯。且夫旱損之來。或關恒數。自非巨變。唯在勤救而已。宜修理陂池。勿乏溉灌。又太宰府者匪<sup>ニ</sup>古來鎮遏之區。兼復當時怪見之地也。最須先慎以備不虞。布告遐邇。俾知朕意。(同十 卷)

○同八年八月丙辰。以太宰府曹百四口。充對馬島。兼充防人。戊午。勅曰。聞下太宰府驛傳官符。并彼府言上解文。路次諸國。長門關司等。每閱見。縱國裏機急境外消息。不可必令萬民咸知。而解文委曲。未來京華。下符辭收無達宰府。載記之旨。誼譁民間。途說之輩。滿溢內外。寔是專輒關見所致之漸也。宜告山陽諸國司。更莫令然。亦四畿六道之內。指一個國。所下之符。同無令開。(同十 卷)

○九年八月丙子。太宰大貳從四位上藤原朝臣衛上奏。四條起請。一曰。新羅朝貢其來尙矣。起自聖武皇帝之代迄于聖朝。不用舊例。常懷奸心。苞茅不貢。寄事商賈。窺國消息。方今民窮食乏。若有不慮。何用防之。望請。新羅人。一切禁斷。不入境內。報曰。德澤泊遠。外蕃歸化。專禁入境。事似不仁。宜比于流來。充糧放還。商賈之盡飛帆來者。所賫之物。仁聽民間。令得廻易了速放却。二曰。交替務了。未得解由。五位之徒。寄事搭旨。留住管內。常好農商。侵漁百姓。巧爲奸利之謀。未覩填納之物。望請。交替了史早從入京。報曰。依請許之。但勘修不與解由之由。欠員官物。灼然令填見贖在身。奪令填償。其所償之物。具錄言上。三曰。府多官舍。破損不少。例用浪人。常勤修理。而比年多依官符。被充他用。望請。一切不寄他所。將役府

國修理。依請許之。

四曰。邊要之地爲警虞。延曆年中特立制文。不許開田。而比年頗有墾闢之事。望請。依延曆三年四月廿六日符一從停止。許之。(以上同十二卷)

○十月癸酉勅云。太宰府改已往之怠。令慎將來。

○同十一年八月戊寅。太宰府言。對馬島上縣郡竹敷崎防人等申云。從去正月中旬迄于今月六日。當新羅國。遙有鼓聲。傾耳聽之。每日三響。常俟已時。其聲發動。加以至黃昏。火更見矣。勅曰夫治不忘亂。古人所戒。將驕卒惰。兵機所忌。縱雖無事。故不可不慎。太宰府言。對馬島司言。去延曆年中。以東國人。配防人。後又筑紫人配防人。而並停廢也。當百姓去弘仁年中。疫癘多死。急有寇賊何堪防禦。望請。准舊例。以筑紫人爲防人者。聽之。(同上三卷)

○嘉祥二年二月庚戌。太宰府言。對馬島司解備。此島居海中。地近新羅。若有機急。何以備不虞。望請。停史生一員。置弩師一員。依請許之。(同上九卷)

○仁壽二年二月乙巳。參議正四位下兼行宮內卿相摸守滋野朝臣貞主者云々。嘉祥二年春兼尾張守。于時太宰府吏多不良。衰弊日甚。貞主上表曰。夫太宰府者。西極之大壤中國之領袖也。東以長門爲關。西以新羅爲拒。加之九國二島。郡縣濶遠。自古于今。以爲重鎮。夫謀事以必就租。發政占古語。因檢舊記。大唐、高麗、新羅、百濟、任那、等。悉託此境乃得入朝。或緣貢獻之事。或懷歸化之心。可謂諸藩之輳湊中外之關門者也。

因茲有德爲帥貳。才良爲監典。若無其人。選取辨官式部。頃年已來絕而不行。近得飛語云。彼吏或擊目閉口。以避時之人。或忌耻貧賤。爲聚斂之吏。府司國宰。莫不悲傷。若如此不變。恐嚙臍不及。臣聞此語。心神罔措。雖此之飛語。有何信據。而臣子之理。何不預憂。又聞少貳從五位下小野朝臣恒柯。筑前守從五位下紀朝臣今守。有心執論。無力矯枉。未審虛實。唯得耳剽。臣不勝血誠。仗觸逆鱗。言詞直。默止、不省。(文德實錄四卷)

○天安三年三月十三日。太政官符。應減筑紫防人十二人、便充在京及府卜部斷了事。

右得太宰府解備。對馬島去年四月廿九日解備。檢案內太宰府。天安元年五月八日解備。得對馬島解備。筑紫防人百二人之內。十二人便充在京及府卜部等厘了。其代以當土人永相補者而得天安元年稅帳使、等師從六位下日根造勝繼。去年十一月廿九日解備。被官宣備。件斷了。自今以後本島人充之。仍返却者。島宣承知依舊充行者須依符旨充行而檢案島。去齊衡四年二月廿一日解備。謹檢案內太政官。去承和八年八月十七日符備。得彼府解備。對馬島解備。去延曆年中以東國人配防人。後以筑紫人配之。而並停廢也。當大百姓去弘仁年中疫癘滋發。戶口減少。忽有寇賊何堪防禦。望請任舊例。以陸地人爲防人者。右大臣宣。奏勅准弘仁年中例。以筑紫人依件差遣令緣邊勸斥候者。自爾以來陸地防人百二人。每年來島互守非常。而風波路嶮。動致闕怠。或漂沒不來。或中途逃亡。仍以當土人擬補彼闕而被太宰府云。嘉祥三年十二月一日符備。太政官。去承和十一年七月十九日符備。得神祇官解備。卜部等解備。承前之例件斷了以當島人限三箇年。嗣繼了差送而太政官去弘仁十四年三月廿七日。下太宰府符備。彼府解備。



○貞觀六年八月十三日。先是太宰府言。大唐通事張友信。渡海之後。未知歸程。唐人來往亦無定期。請友信未歸之間。留唐僧法惠。令住觀音寺。以備通事。太政官處分依請。(三代實錄九卷)

○同八年四月十七日。下知太宰府曰。酒者京師頻視怪異。陰陽寮言。隣國兵可來窺。安不忘危。宜勤警固。隨責豐前、長門等國守。曰關司出入理用過所。而今唐人入京。任意經過。是國宰不慎督察。關司不責過所之所致也。自今已後。若有驚急。必處嚴科。五月廿一日云々。唐人任仲。元非有過所。輒入京城。令加譴詰。還太宰府。重下知長門太宰府。嚴關門之禁焉。七月十五日丁巳。太宰府馳驛奏言。肥前國基肄郡入川邊豐稻

告。同郡擬大領山春永。語豐稻云。與新羅珍寶(本作寶)長。共渡入新羅國。教造兵器器械之術。還來將擊對馬島。藤津郡領葛津貞津。高來郡擬大領大刀主。彼杵郡永岡藤津等是同謀者也。仍副射手四十五人名解進之。(同十)

○同十一年巳丑六月十五日辛丑。太宰府言。去月廿二日夜。新羅海賊乘艦二艘。來博多津。掠奪豐前國年貢絹綿。即時逃竄。發兵追。遂不獲賊。十二月十四日丁酉。遣使者於伊勢大神宮奉幣。(舊文ハ神祇ノ部ニ攝ケ)十七日庚子去夏新羅海賊掠奪貢綿。又有大鳥。集太宰府廳事。并門樓兵庫上。神祇官陰陽寮言。常有隣境兵寇。云々。是日勅命五畿七道諸國。班幣境內諸神。豫防後害。

○同十一年七月二日戊午勅。詔責太宰府司曰。諸國貢調使吏領將一時共發。不可先後零蠹。雖其群類而豐前一國獨先進發。亦弱奸人乘飢虎口。遂使新羅寇盜乘隙致侵掠。非唯已失官物。兼亦損辱國威。求之往古。未

有前聞。貽於後來。當無面目。雖云使人之可責。抑又府官之有怠。又或人云。盜賊逃去之日。海邊百姓五六人。冒死追戰。射傷二人。事若有實。寧非忠敬而府司不申。何近掩善。又所禁之人。雖有嫌疑。緣是異邦最思仁恕。宜停拷法。深加廉問。早從放却。(三代實錄)

○同十一年十二月五日。先是太宰府言上。往者新羅海賊。侵掠之日。差遣統領選士等。擬令追討。人皆懦弱。憚不肯行。於是調發俘囚。御以賂賂。特張意氣。一念當于今。大鳥示其怪異。龜筮告以兵寇。鴻臚館。并津厨等。雖居別處。無備禦侮。若有非常。難以應猝。夷俘分居諸國。常事遊獵。徒免課役。多費官糧。請配置處分以備不虞。分爲二番。別當百人。每月相交替。相驅役。其糧料者。諸國所舉。俘料利稻之內。每國令運輸。以給其用。至是勅曰。俘夷之性。本異平民。制御之方。何用恒若。忽雖舊居新移他土。衣食無續。心事反常。則野心易驚。遂致猝變。宜簡監典有謀畧者。令其勾當。并統領選士幹事者。以爲其長。勉加綏誘。能練武術。設有諸國糧運闕如。即須府司廻授支濟。又以百人爲一番。居業難給。轉飽多煩。宜五十人爲一番。廿八日。遣從五位上守右近少將兼行太宰權少貳坂上大宿稱瀧守於太宰府。鎮護警固。勅曰鎮西者是朕之外朝也。千里分符。一方寄重。况復隣國接壤。非常匪期。今聞大鳥示怪。龜筮告寇。機急之備。豈令暫輟哉。宜令瀧守勾當警固之事。是日瀧守奏言。所以置選士設甲冑者。本爲備警急護不虞也。謹檢。博多是隣國輻湊之津。警固武術之要。而鄰與鴻臚相去二驛。若兵出不意。倉卒難備。請移置統領一人。選士四十人。甲冑四十具於鴻臚。又謹檢。承前選士百人。每月番上。今以尋常之員。備不意之禦。恐機急之事實難支濟。請例番之

外。更加他番統領二人。選士百人。詔并從之。(以上同十六卷)

○同十二年正月十三日。勅充壹岐島并平糶各二百具。彼島元有甲無胃。太宰府依島解請充。從之。

○同年正月十五日。勅太宰府。遷置甲冑百十具於鴻臚。

二月十二日。先是太宰府言。對馬島下縣郡人。卜部乙屎磨。爲捕鷓鴣鳥。向新羅境。乙屎磨爲新羅國所執。縛囚禁于獄。乙屎磨。見彼國挽運材木。搆作大船。擊鼓吹角。箭士習兵。乙屎磨竊問防授人。答曰。爲伐取對馬島也。乙屎磨脫禁出獄。繼得逃歸。是日勅。彼府去年夏言。大鳥集于兵庫樓上。決之下筮。當夏隣兵。因茲頒幣轉經。豫攘災害。如聞新羅商船。時々到彼。縱託事賈販來爲侵暴。若無具備。恐同慢藏。况新羅凶賊。心懷覬覦。不收蠶尾。將行毒螫。須令緣海諸郡。特慎警固。

廿日。勅太宰府。令新羅人潤清宣堅等三十人。及元來居住管內之輩。水陸兩道給食馬入京。先是彼府言。新羅凶賊掠奪貢綿。以潤清等處之嫌疑。禁其身。奏之。太政官處分殊加仁恩。給糧放還。潤清等不得順風。無由歸發其國。

是日對馬島司。進新羅消息日記。並彼國流來七人。府須依例給糧放却。但叢爾新羅凶毒。狼戾。亦酒者。對馬島下部乙屎磨。被禁彼國。脫獄遁歸。說彼練習兵士之狀。若彼疑洩語。爲伺氣色。差遣七人。詐稱流來賊。凡垂仁放還。尋常之事。狡奸往來。當加誅儆。加之潤清等人事交開。僑居此地。能候物色。知我無備。令放歸於彼。示弱於敵。既乖安不忘危之意。又從來居住管內者。亦後有數。此輩皆外似歸化。內懷逆謀。若者來

侵。必爲內應。請准天長元年八月廿日格言。不論新舊。併遷陸奧之空地。絕其覬覦之奸心。從之。

廿三日參議從四位上行太宰大貳藤原朝臣冬緒。進起請四事。

其一曰。軍旅之儲。烽燧是切。而數十年來。國無機警。雖有其備。未知調用。若有非常。何以通知。今須下知管內國島。試以舉烽焚燧。彼此相通。以備不虞。若不言其由。恐驚動物意。望下知事旨。依件諫練。

其二曰。比年之間。公私雜人。或陸或海。來集深入。遠尋營善馬。及其歸向。多者二三十。少者八九疋。總計過所年出關之數。凡千餘疋。夫機急之備馬尤爲用。而無賴輩。每年搜取。若有罄乏。如非常何。今將施禁制。翻致謗讟。望請。下知豐前長門兩國。四箇年間。禁止出馬。

其三曰。承前之例。諸國雜米。各隨其本色。輸納諸目諸所。而或司全納。用盡既訖。或所々多致未進。公途有關至。有期會。不得廻撥。况後伴司等監典二人。勾當釐務。或時有自由。亦非無。無判置。貢進之意。莫不緣此。縱令一任之內。殊立嚴制。猶恐相承之官。任意改更。自非官符。何立後法。望請。使斷之外。庸米並雜米。總納稅庫。每日下行若非符宣。不肯輒以下用。監當之官。准法科罪。

其四曰。穀倉院地子交易物。比年之間。令監一人。勾當其事。每年交易輕物輸遣。因茲勾當之人。年初請領直稻既訖。其後府司實其返抄。而左右巧容。不肯究進。遂使不知意之吏。招故還之煩。熟尋具由。理不可然。凡一官之事。官長所行。縱有其人。何愁不濟。而更置專當。還致物煩。望請。從停止。府司一向交易奉進。詔並從之。

三月十六日。從五位下行對馬島守小野朝臣春風。進起請二事。

其一曰。軍旅之儲。管在介冑。雖薄物以保。望請縫造調布。保侶衣千領。以備不虞。

其二曰。軍輿不虞。倍日兼行。轉餉易絕。輜重難給。望請。以調布。縫造納精帶袋千枚。可帶士卒腰底。以支急速之備。詔從之。以太宰府庫布。造充之。(以上同十七卷)

○同十二年六月七日。勅太宰府。置對馬島選士五十人。十三日。先是太宰府言。肥前國杵島郡兵庫震動。鼓聲二聲。決之著龜。可警隣兵。是日勅。令筑前、肥前、壹岐、對馬、等國島。戒慎不虞。又言所禁新羅人瀧清等三十人。其中七人逃竄。

八月廿八日。先是對馬島言。境近新羅。動恐侵掠。既無其師。弩機何用。絕域孤島。誰救警急。迺者有聞。彼國寇賊。學劍習戰。若不豫備。恐難應卒。望請。置弩師一員。勅太宰府。簡擇其人。補任置之。(同十八卷)

○同十五年癸巳三月十五日癸未。外變不息。谷徵菴臻。決之下筮。告云。自夏至秋。兵革成變。事起西埤。警及北關。仍令因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、太宰府、等諸國府司。戒嚴兵卒備之不虞。

○五月廿七日庚寅。先是太宰府言。去三月十一日。不知何許人船二艘。載六十人。漂著薩摩國飯島郡。言語難通。問答何用。其首崔宗佐、大陳潤等。自書曰。宗佐等渤海國人。彼國王差入大唐。賀平徐州。海路浪險。漂盪至此。國司推驗事意。不賚公驗。所書書記亦復相違。疑是新羅人。僞稱渤海人。竊來邊境。願將二船。向府之間。一船得風飛帆逃遁。是日勅。渤海遠蕃歸順於我。葢爾新羅。久挾禍心。宜令府國官司。審加推勘。

實是渤海人。須加慰勞。宛糧發歸。若新羅凶黨者。全禁其身。言上。兼令管内諸國重慎警守。

○十二月廿二日癸巳。先是大宰府言。去九月廿五日。新羅人三十人乘一艘船。漂著對馬島岸。島司差加使者送府。即禁其身。著鴻臚館。是日勅曰。新羅人挾奸年久。元毒未悛。疑亦流著之體。構候隙之謀。宜加搜檢。審覈情狀。早令放歸。(以上三代實錄)

○元慶二年戊戌六月廿三日丁亥。勅令因幡、伯耆、出雲、隱岐長門等國。調習人兵。修繕器械。戒慎斥候。固護要害。災消異伏。理歸依佛神。亦須境內群神。班幣。於四天王像前修調伏法。以耆龜告。可有邊警也。

○同二年七月十三日丙午。詔。令太宰權少貳從四位下藤原朝臣仲直。攝行警固事。去貞觀十一年左近衛權少將兼少貳坂上大宿禰瀧守行此事。而秩罷入京。警戒停廢。今卜筮有告放頭首高元度等十一人。往大唐。迎河清。即差此使、同為發遣。其判官全成等并放歸。鄉。亦差此使隨往。道報委曲。四年正月丁卯。帝臨軒。渤海國使高南申等貢方物。奏曰。國王大欽茂言。為獻日本朝遣唐大使特進兼秘書監藤原朝臣河清上表。並恒貢物。差輔國大將軍高南申等。充使人朝奏曰。遣唐大使藤原河清久不來歸。所鬱念也。而高麗王差南申。令咨河清表文。入朝。王之款誠實有嘉焉。

我船ノ韓唐ニ往來スルモノ大抵迂回シテ此路ヲ取リシカ。曰唐通航漸ク開ケ。會マ高麗海上ニ新羅抗塞ノ虞アルヲ以テ。自ラ南海ノ捷路ヲ發見セシナラン。南路ノ字史ニ見ルモノ之レヲ始トス。(續方)  
○同四年九月癸卯。新羅國。遣二級資金貞卷朝貢。使陸奧按察使從四位下藤原惠美朝臣猶等。問其來朝之

由。貞卷言曰。不修職貢。久積年月。是以本國王令齋御調貢進。又無知聖朝風俗言語者。仍進學語二人。問曰。凡是執玉帛行朝聘。本以副忠信通禮義也。新羅既無言信。又闕禮義。非本行未。我國所賤。又王子泰靡入朝之日申云。每事導古跡。將供奉。其後遣小野田守時。彼國闕禮。故田守不行使事而還歸。王子尚猶無信。况復輕使。豈足爲據。貞卷曰。田守來曰貞卷出爲外官。亦復賤人。不知細首。於是告貞卷曰。使人輕微。不足資待。宜從此却迴。報汝本國。以專對之人。忠信之禮。仍舊之調。明驗之言。四者備具。乃宜來朝。○六年春正月乙酉。遣參議從四位上藤原朝臣眞先。襲唐人沈惟岳等於太宰府。賜大使以下祿有差。五月丁酉太宰府言。唐客副使紀喬容已下三十八人狀。云々。大使沈惟岳。贓汗已露。不足率下。副使紀喬容。司兵梁子欽。堪充押領。伏垂進上。府官商量所申有實。報曰。大使副使並是勅使謝時與和蘇州刺史相量所定。不可改張。其還鄉之祿。亦依舊給。

八月乙卯勅。唐人沈惟岳等著。府依先例。安置供給。其送使者海陸二路。量便成令入京。水手者。自彼放還本鄉。

○七年春正月庚申。帝御閣門。饗五位已上及蕃客文武百官主典已上於朝堂。作唐吐羅林邑東國軍人等樂。奏內教坊踏歌。客主々典已上次之。賜供奉踏歌。百官人。及高麗蕃客綿有差。高麗大使王新福言。李家太上皇少帝並崩。唐平王攝政。年穀不登。人民相食。史家朝議。稱聖武天皇。性有仁恕。人物多附。兵鋒其強。無敢當者。鄧州、襄陽、已屬史家。李家獨有蘇州。朝聘之路。固未易通。於是勅太宰府曰。唐國荒亂。兩家爭

權。平殄未期。使命難通。其沈惟岳等。宜往々安置優厚供給。其時服者。並以府庫物給。如懷土情深。猶願歸鄉者。宜給船水手。量事發遣。

二月癸未。新羅國使給資金體信以下二百一十一人朝貢。遣左少辨從五位下大原朝臣眞人今城。讚岐介從五位下池原公季、守等。問以約束貞卷之首。體信言曰。承國王之教。唯調是貢。至于餘事。非敢所知。於是今城告曰。乾政官處分。此行使人者。喚入京師。如常可遇。而使等約束貞卷之首。曾無所申。仍稱。但常貢入朝。自外非所知者。是乃爲使之入。非所宜言。自今以後非王子者。令執政大夫等入朝。宜以此狀告汝國王知。(已上同二)(十四卷)

○同八年七月甲寅。新羅使大奈麻、金才伯等。九十一人。到著太宰博多津。遣右少辨從五位下紀朝臣牛養、授刀大尉外從五位下栗田朝臣道麻呂等。問其由緒。金才伯等言曰。唐國勅使韓朗探。自渤海來云。送日本國僧戒融。令達本鄉已畢。若平安歸卿者。常有報信。而至今日。寂無來音。宜差此便。其消息欲報天子。仍舊執事牒。參太宰府。其朝彩者。上道在於新羅西津。本國謝恩使蘇州金容。爲取太宰報牒。寄附朝彩。在京來發。問曰。比來彼國投化百姓言。本國發兵警備。是疑日本國之來問罪也。其事虛實如何。對曰。唐國擾亂。海賊寔繁。是以徵發甲兵。防守緣邊。乃是國家之設。事既不虛。及其歸日。太宰府報牒新羅執事曰。檢察內。被乾政官府備。得太宰府解備。新羅國牒備。依韓內常侍請。欲知僧戒融達不。府具狀申上者。以去年十月。從高羅國還歸聖朝。府宜承知。即令報知。(同二十)(五卷)

○神護景雲三年十二月癸丑。遣員外右中辨從四位下大伴宿禰伯麻呂、攝津大進從五位下津連真麻呂、於太宰府。問新羅使入朝之由。

○寶龜元年三月丁卯。詞新羅使來由之由。金初正等言。在唐大使藤原河清學生朝衡等屬。宿衛王子金隱居。歸鄉附書。送於鄉親。是以國王差初生等。令送河清等書。又因使次。便貢土毛。其義何安在。對言。便以附貢。故不稱調。至是遣左大史外從五位下堅部使主人生宣告。初正等曰。前使貞卷。歸國之日。所仰之政。會無申報。今亦徒持私事參來。所以此度不預賓禮。自今已後。宜如前仰。令可申事。人々入朝。待之如常。宜以此狀告汝國王。但知進唐國消息。並在唐我使藤原朝臣河清等書。嘉其勤勞。仰太宰府。安置饗賜宜知之。賜國王緣施二十五疋。糸一百疋。綿二百五十屯。大使金初正已下各有差。(以上三十五卷)

○同四年癸丑六月丙辰。能登國言。渤海使烏須弗等、乘船一艘。來着部下。云々。戊午。遣使宣告渤海使烏須弗等曰。太政官處分。前使壹萬福等所進表詞驕慢。故告知其狀。罷去已畢。前年正月來朝。而今能登國司言。渤海國使烏須弗等所進表函。違例無禮者。由是不召朝廷。返却本鄉。但表函違例者。非使等之過也。涉海遠來。事須憐矜。仍賜<sub>ヒ</sub>祿並路糧<sub>ヲ</sub>放還。又渤海使取此道來朝者。承前禁斷。自今以後。宜依舊例從筑紫道來朝。(概日本紀)

○同五年三月癸卯。是日新羅國使禮府卿沙冷金三玄以下。二百三十五人。到泊太宰府。遣河內守從五位上紀朝臣廣純、大外記從五位下內藏忌寸全成等問其來由之由。三玄言曰。奉本國王敕。請修舊好。每相聘問。並

將<sub>ニ</sub>國信物及在唐大使藤原河清書來朝。問曰。夫請修舊好。每相聘問。乃仍<sub>ニ</sub>亢禮之隣。是供職之國。且改貢調。稱爲國信。變古改常。其義如何。對曰。本國上宰金順貞之時。舟楫相尋。常修職貢。今其孫<sub>ニ</sub>。繼位執政。追尋家聲。係心供奉。是以請修舊好每聘問。又三玄。本非貢調之使。本國便因使次。聊進土毛。故不稱御調。敢陳使旨。自外不知。於是勅問新羅入朝由。使等曰。新羅元來稱臣貢調。古今所知。而不率<sub>レ</sub>舊章。妄作新意。調稱<sub>ニ</sub>信物。朝爲<sub>ニ</sub>修好。以昔准今。殊無禮數。宜給渡海料。早速放還。(同三十卷)

○同五年五月乙卯。勅太宰府曰。比年新羅蕃人頗有來著。尋其緣由。多非投化。忽被風漂。無由引還。留爲我民。謂本主何自今以後如此之色。宜皆放還。以示弘恕。如有船破及絕糧者。所司最事。令得歸計。

○同九年十月己巳。勅太宰府。新羅使蘭蘇等。遠涉滄波。賀正貢調。其諸蕃入朝國有恒例。雖有通狀。更宜反復。府宜承知。研問來朝之由。並責書函如有表者。准渤海舊例。寫案進上。其本者。却附使人。凡所有消息驛傳奏上。

癸丑勅太宰府。唐客高客林等五人。與新羅貢調使共令入京。十一月己巳。遣勅旨少輔正五位下內藏忌寸全成於太宰府。問新羅國使薩冷金蘭蘇入朝之由。

○同十一年庚申正月己巳。天皇御大極殿受朝。唐使判官高鶴林、新羅使薩冷金蘭蘇等、各依義拜賀。二月庚戌。新羅使還蕃。賜璽書曰。天皇敬問新羅國王。朕以寡薄纂業承基。理育蒼生。寧隔中外。王自遠祖。恒守海服。上表貢調。其來尙矣。日者虧遠蕃禮。積歲不朝。雖有輕使而無表奏。由是泰廉遠日。已具約束。貞卷

來時。更加諭告。其後類使會不承行。今此蘭蘇猶陳吳秦。理須依列從境放還。但送三符等來。事既不輕。故修資禮。以答來意。王宜察之。後使必費表函。以禮進退。今勅筑紫府。及對馬等成。不將表使。莫令入境。宜察知之。春景韶和。想王佳也。今因還使附答信物。遣書指不及及。(本紀)

○延曆十六年五月癸丑勅。百濟王等遠慕皇化。航海梯山。輸款久矣。神功攝政之世。則肖古王遣使。貢其方物。輕島(神)御宇之年。則貴須王擇人。獻其才士。文教以之蔚興。儒風由是闡揚。煥乎斌々。于今為盛。又屬新羅肆虐。并吞扶餘。即舉宗歸仁。為我士庶。陳力從事。夙夜奉公。朕喜其忠誠。情深於愍。宜百濟王等課並雜徭。永從蠲除。勿有所事。主者施行。(賦役令)

○弘仁四年三月辛未。太宰府言。肥前國。今月四日解備。基肆團校尉真弓等。去二月二十九日解備。新羅一百十人。駕五艘船。著省近島。與土民相戰。即打殺九人。捕獲一百一人。又同月七日解備。新羅人一清等申之。同國人清漢已等。自聖朝歸來云々。宜明問定。若願還者。隨願放還。遂是化來者。依例進止。今日任官。(日本紀)

○同四年九月戊寅。太政官符。應停對馬史生一員置新羅譯語一人事。右得太宰府解備。新羅之船未着伴島。言語不通。來由難審。彼此相疑。濫加殺害。望請減史生一人。置伴譯語者。右大臣宣奉勅依請。(類聚三)

○同五年十月庚午。太宰府言。新羅人辛波古知等二十六人。漂着筑前國博多津。問其來由。遠投風化。(後紀二)

○同八年夏四月辛亥。太宰府言。新羅人遠山知等、一百四十四人來化。(日本紀)

○承和元年二月癸未。新羅人等遠涉滄波。泊着太宰海涯。而百姓惡之。彎弩射傷。由是太政官罷責府司。其射傷者。隨犯科罪。被傷疾者遣醫療治。給糧放還。(後紀)

○同二月丁卯。勅在太宰府。唐人張繼明、使令肥後守從五位下粟田朝臣飽田麻呂。相率入。(後紀)

○同七年十二月己巳。太宰府言。藩外新羅臣張寶高。遣使獻方物。即從鎮西。追却焉。為人臣無境外之交也。(同九)

○同八年二月戊辰。太政官仰太宰府云。新羅人張寶高。去年十二月。進馬鞭等。寶高是為他臣。敢輒致貢。稽之舊章。不合物宜。宜以禮防閑。早從返却。其隨身者。任聽民間。令得交關。但莫令人民遠失沽價。競傾家資。亦如優恤。給程糧。並依承前之例。(同十)

○同九年正月乙巳。新羅人李少貞四十人。到着筑紫大津。太宰府遣使問來由。頭首少貞申云。張寶高死。其副將李昌珍等。欲叛亂武珍州。別駕閻文與兵討平。今已無虞。但恐賊徒漏網。忽到貴邦。擾亂黎庶。若有舟船到彼不執文符者。並請切命所在。推勘收捉。又去廻易使、李忠、揚圓、等。所資貨物乃是部下官吏。及故張寶高子弟所遺。請速發遣乃資。閻文上筑前國牒狀參來者。公卿議曰。少貞曾是寶高之臣。今則閻文之使。彼新羅人其情不遜。所通消息。彼此不定。定知商人欲許交通。巧言攸稱。今覆解狀云。李少貞資閻文上筑前國牒狀。參來者而。其牒狀無進上宰府之詞。無乃可謂合例。宜彼牒狀早速進上。如牒旨無道。附少貞可退却者。或曰。少貞今既託於閻大將。掠先來李忠揚圓等。謂去年廻易使李

忠等、所資貨物。乃是資高子弟所遺。請速發遣。今如所聞。令李忠等。與少貞同行。其以迷獸投於俄虎。須問李忠等。與少貞共歸隨彼所願。任命遲速。又曰。李忠等。迴易事畢。歸向本鄉。逢彼國亂。不得平着。更來筑前大津。其後於呂系等化來。云。已等張資高所攝島民也。資高去年十一月中死去。不得寧居。仍參著貴邦。是日筑前國守、文室朝臣宮田麻呂。取李忠等所資雜物。其詞云。資高存日為賀唐國貨物。以繩付贈。可報獲。物其數不尠。正今室高死。無因得寶物。因取資高使所資物者。縱境外之人。為愛上毛。到來我境。須欣彼情。令得其所。而奪迴易之便。絕商賈之權。府司不加勘嚴。肆令并兼。非失賈客之質。深表無王憲之制。仍命府吏。所取雜物細碎。勘錄。且給且言。兼又與給糧食。放歸本鄉。(同十)

○同十二年十二月戊寅。太宰馳驛言。新羅人資。康州牒二通。押領本國漂蕩人五十餘人。來著。(同十)

○嘉祥二年八月乙酉。太宰府言。馳驛言上。大唐商人五十三人。多資貨物。船一隻來著。(同十)

○齊衡三年三月壬子。太宰府奏言。新羅人漂著此岸。粟、糧放歸。(文德實錄八卷)

○貞觀四年七月二十七日。太唐商人。李延孝壽。四十三人來。勅太宰府安置供給。(三代實錄六卷)

○同十三年九月十五日甲子。遣新羅人二十人。配置諸國。清信、鳥昌、南卷、安長、全通、五人於武藏國。僧嵩沙彌、傳僧、關解、元昌、卷才、五人於上總國。潤清、果才、甘參、長馬、才長、真平、長清、大存、倍陳、連衷、十人於陸奧國。勅潤清等。處於彼國。人掠取資綿之嫌疑。須加重譴。以爾後來。然肆青、省過、

先王之義典。宜特加優恤。安置彼國沃壤之地。令得穩便。給口分田營種料。並須其等事。一依先例。至于種蒔秋獲。並給公糧。僧沙彌等。安置有供定額寺。令其供給。路次諸國並給食馬。隨身雜物。充人夫。連送勸存仁恕。莫致窘苦。云々。宣潤清、長馬、真平等才長、於造瓦。預陸奧國修理府料造瓦車。令長其道者。相從傳習。(三代實錄)

○同十五年七月朔。先是太宰府馳驛言。渤海國人崔宗佐門孫宰等。漂着肥後國天草郡。遣太宰通事張建忠。覆問事由。審實情狀。是渤海國入唐之使。去三月着薩摩國逃去之一艦也。仍奉進宗佐等日記。並所資蠟封函子雜封書弓劍等。是日勅。討覆宗佐等申狀。知是渤海人、亦其表函牒書印封官衙等雙校先來入觀在狀。問者符合如一。崔佐等既非同隙之行寇。可謂善隣之使臣。其聽泊艱澁。當於恤。宜令在所支濟衣糧。所上蠟封函子雜封書等。全其印封。莫煩披閱。亦是隨身雜物。秋毫無犯。皆悉還與其所乘二船。設有故損。勸加善修。足以凌波。早得好去。但宗佐等。彼國名官之人。盡知我朝之相善。然則聽着之日。須露情實。以望恩濟。而飛帆遁亡還。以奸賊。非我仁恕。何免重誅。宜責以過契俾悔其非。

二十二日。先是太宰府言。去九月二十五日新羅人三十人。乘一隻船。漂着對馬島岸。島司差加使者送府。即禁其身。着鴻臚館。是日勅曰。新羅人、狹奸年久。亢毒未悛。疑亦流著之搆、候隙之謀、宜重加搜檢、審覈情狀、且令放歸。(同二十)

○同十六年七月十八日。先是太宰府言。大唐商人崔岌等三十六人。駕船一隻。六月三日。着肥前國松浦郡岸。

是日勅准歸化例。安置供給。(同二十)

○同十八年八月三日。太宰府言。去月十四日。大唐商人楊清等三十一人。駕一隻船。着荒津岸。勅宜准歸化。安置供給。(同二十)

○元慶元年八月二十二日。先是大宰府言。去七月二十五日。大唐商人崔鐸等、六十三人、駕一隻船。來着筑前國。問其來由。崔鐸言。從大唐臺州。載貴國使多安江等。頗資貨物。六月一日解纜。今日得投壘岸。是日勅宜。依例安置供給。(同三十)

○仁和元年閏四月十七日。是日太宰府言。去四月十二日。新羅國使判官徐善行錄事高興善、等三十八人。乘船一艘。來着肥前國天草郡。問其來由。答曰。前年漂蕩適着海岸。蒙給官銀。得歸本鄉。今奉賀仁恩。資國牒信物等來朝者。今檢寄事奉賀。牒實相兼。只有執事省牒。無國王啓。其牒不納函子。以紙裏之。題云。新羅國執事省。牒上日本國。其上蹈印五字。謹檢先例。事乖故實。仍寫牒並錄貨物數。進上。勅新羅國人。包藏禍心。覬覦國家。雖寄事於風波。然猶疑其毒螫。須懲其奸匿。以從重法。然而朝家好仁。不忍爲之。而猶放還。全其首領矣。(同四十)

○同年十月二十日。大唐商人、着太宰府。是日下知府司。禁王臣家使及管内吏民。私以貴直競買他物。(同四十)

○延喜二十二年六月五日。對馬島。新羅人到來。早可從放却之由。官符給。宰府了。(扶養略記三)

○延長七年己丑五月十七日。新羅國遣使張彥澄等二十人。來着對馬島。持送太宰府司書狀、並信物。又送島

司坂上經國書及信物等。請<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>府。彥澄辭云。彼國如<sub>レ</sub>右欲<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>調<sub>レ</sub>貢。爲<sub>レ</sub>蒙<sub>レ</sub>大府仰。奉向彥澄等。云々。島司守<sub>レ</sub>憲法<sub>レ</sub>拘留。彥澄等俯地申云。本國之王。深存入觀之情。重致<sub>レ</sub>使信之勞。空從中途歸去。身命難爲存。島司猶拘<sub>レ</sub>使。以事由言上府。府即申太政官。其送府書。序<sub>レ</sub>欲奉朝貢之由。送島司書謝<sub>レ</sub>送歸彼國飄蕩人之事。先是去正月十三日。新羅交<sub>レ</sub>易海<sub>レ</sub>漢於耽羅島之船。飄蕩着<sub>レ</sub>對馬下縣郡。島司經國加<sub>レ</sub>安存。給<sub>レ</sub>糧食。並差<sub>レ</sub>加擬通事長岑望通、檢非違使秦滋景<sub>レ</sub>等。送<sub>レ</sub>歸<sub>レ</sub>金州。三月二十五日。滋景獨還來申云。金州王甄萱擊併<sub>レ</sub>數十州。稱<sub>レ</sub>大王。望通等。到彼州之日。促<sub>レ</sub>座<sub>レ</sub>綏<sub>レ</sub>類。殷懇語曰。豈有宿心。欲奉日本國。前年<sub>レ</sub>延喜二十一年<sub>レ</sub>不勝丹款。進上朝貢。而稱陪臣貢調。被返却也。一日欲稱寡者。且爲奉本意。本意既遂。製船特進朝貢之間。汝等幸過來。因拘<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>望通。懇<sub>レ</sub>免<sub>レ</sub>滋景。初經國歷<sub>レ</sub>飄蕩人之時。牒<sub>レ</sub>送<sub>レ</sub>金州。金州寄<sub>レ</sub>彥澄。送<sub>レ</sub>返牒。陳<sub>レ</sub>謝思情。兼<sub>レ</sub>述<sub>レ</sub>朝貢之深款。及注<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>進<sub>レ</sub>發復禮使李榮等<sub>レ</sub>之由。李榮窻不來。二十一日。太政官符太宰府。新羅人張彥澄等。資糧從放歸。並令文章博士等修太宰對馬返牒書狀案。下<sub>レ</sub>遣<sub>レ</sub>太宰。牒<sub>レ</sub>畧<sub>レ</sub>云。潘固<sub>レ</sub>潘國ノ誤<sub>レ</sub>致<sub>レ</sub>計自成警關之勤。人臣無私。何有逾境之好。故猥存交通。春秋道加<sub>レ</sub>貶之誠曲求面覲。脂粉絕<sub>レ</sub>爲容之勞計也。柳昂早歸。區<sub>レ</sub>陳首意。何亦彥澄重到。頻<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>册言。空馳<sub>レ</sub>斷金之情。未<sub>レ</sub>廻<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>圭之慮。爰守<sub>レ</sub>典法。既從<sub>レ</sub>却歸。云々。(扶養略記)

○承平六年丙申七月十三日。太宰府申、大唐越州人。將亟勸、李盈張等來朝之由。(日本紀略)



錢鏐字具美。杭州臨安人也。(中)及壯無賴。不喜事生業。以販鹽為盜。(中)唐乾符二年、浙西裨將王郢作亂。石鑑鎮將董昌。募鄉兵討賊。表鏐偏將軍。擊郢破之。(中)是時天下已亂。昌乃圍諸縣兵為八部。以鏐為都指揮使。(中)乾寧二年、越州董昌反。(中)自稱皇帝。國號羅平。改正順天。(中)鏐以昌反狀聞昭宗。下詔削昌官爵。封鏐鼓城郡王、浙江東道招討使。鏐曰。董氏於吾有恩。不可遽伐。乃以兵三萬。屯迎恩門。遣其容沈滂。諭昌使改過。(中)昌復拒命。(中)鏐遣顧全武攻昌。全武執昌歸杭州。(中)拜鏐鎮海鎮東軍節度使、加檢校大尉中書令。賜鐵券。(中)天福二年封鏐越王。(中)天祐元年、封鏐吳王。(中)梁太祖即位。封鏐吳越全至兼淮南節使。(中)唐莊宗人洛。鏐遣使貢獻。求玉冊。(中)乃賜鏐玉冊金印。鏐因以鎮海等軍節度。授其子元瓘。自稱吳越國王。更名所居曰宮殿。府曰朝。官屬皆稱臣。(中)遣使冊新羅、渤海王。海中諸國皆封拜其君長。(中)長興三年鏐卒年八十一。諡曰武肅。子元瓘立。(五代史吳越世家)

○同七年丁酉八月五日乙酉。左右大臣以下着左伏。開見高麗國牒等。(日本)

○天慶二年三月十一日。太宰府牒高麗廣評省。却歸使人。(日本)

○同八年乙巳七月二十六日。太宰府解申請官裁事。言上大唐吳越船。來着肥前國松浦郡柏島狀。舶一艘。勝載參仟解。乘人壹佰人。云々。管肥前國今月十一日解。同日到來。云々。今月四日。三剋。伴船飛帆。自南海俄走來。警調兵士等。以十三艘追。船留肥最埼港鳴浦。爰五日寅一剋。所司差使者問。所送牒狀云。大唐吳越船。今月四日到岸狀。請准例速差人船。引路至鴻臚所。牒者儘加實驗。所申有實。仍副彼牒狀。言上。

云々。(外記)

○長保四年壬寅六月二十七日。諸卿定申。高麗國人不堪彼國苛酷。引率伴類。可住日本國之由言上事。(百撰抄)

七月十六日巳酉。下給宣旨二枚。太宰府申。流來高麗人四人文一枚。又申參來同國人二十人文一枚。(百撰抄)

○寬弘二年乙巳八月十四日庚寅。太宰府解文。宋人曾令久來着之由。奉左府。(百撰抄)

八月二十一日。左大臣、右大臣、左兵衛督申云。宋人定年紀可來由。給官符了。而不待彼期早來。若可被追却名。早任彼官府。可被追却歟。宋人若有申待便風可罷歸之由。隨又可裁許者。有追却名。自廻一兩年。不異安置。若然者。偏可被安置歟。云々。二十四日庚子左頭中將願定來談云。宋人可被安置之由。云々。(小右記)

○長和二年癸丑二月二日甲子。從大貳親信許、唐人所送和布貨物等解文色目等送。云々。四日丙寅參大內。奏唐物解文。即召御前覽之。皇太后宮、中宮、皇后宮、東宮等、被少々奉。云々。(法成寺攝政記)

九月十八日丁未亦御覽唐物云々。(小右記)

參照

長保四年六月高麗人ノ投化ヲ許シ。寬弘二年ニ至リ。又宋商ノ駐留ヲ許シ。比年宋人筑前博多ニ到リ。太宰府其貿易ノ事ヲ管轄セリ。而シテ我部ヨリ宋ニ入ル者ハ。天臺僧ノミニシテ。當時使聘來往ノ事他書見ル所ナシ。云々。(增方湖源)

○承曆二年戊午十月二十五日。詔卿定申。大宋國貢物事。錦唐黃等也。此事已為朝家大事。唐朝舊日本和親久絕。不貢朝物。近日頻有此事。人以爲狐疑。(百練抄)

參照

元豐元年使適事僧仲回來。賜慕化懷德大師。明州又言。傳其國太宰府牒。因使人孫忠。還道仲回等。資絕二百疋、水銀五千兩。以孫忠乃海商。而貢禮與諸國異。請自移牒報而答其物直。付仲回東歸。從之。(宋史日本傳)後三條天皇延久五年十月。宋主。本邦僧成尋。附シテ物ヲ朝延ニ贈ル。承保三年六月二日答信ノ廷議アリ。承曆元年五月五日ニ至ル。長季朝臣ニ命シテ。返信ヲ草セシメ。黃紙ニ書シ螺鈿管ニ入レ。絹水銀等ノ物ヲ添テ。宋國ニ送ル事ハ。百練抄ニ見エ。又承曆四年閏八月、宋商孫忠、明州府ノ牒ニ齎シテ越前國敦賀ニ到ル。同年九月九日宋牒ヲ奏上シ、永保二年十一月二十一日。右中辨匡房ニ命シテ答書ヲ草セシメ、孫忠ニ托シテ宋ニ送ル。其事又百練抄、扶桑畧記、等ニ見エタリ。二書孫忠ヲ孫吉忠ニ作ルハ誤リナラン。(湖源抄)○同四年甲申閏八月五日諸卿定申。高麗國王。請申醫師事。以權中辨匡房朝臣。可令書宰府返牒。云々。(百練抄)

古今著聞集ニ。高麗王惡瘡ヲ病ム。醫ヲ我ニ請フ。帥大納言經信之ヲ拒ム。云々。江談抄ニモ之レニ同シ。端方湖源

日本國太宰府牒。高麗國禮賓省。却廻方物等事。牒得彼省牒備。當省伏奉聖旨。訪聞貴國有能理瘡風疾之醫人。今因商客王則貞廻歸次。仰因便道。牒及於王則貞處。說示風疾緣由。請彼處撰上等醫人。於來年早春。發送到來。理醫風疾。若見功效。定不輕酬者。今先送華錦及大綾、各十一段、麝香一十斤。分附王則

貞。資持將去知太宰府官員處。且充信儀。到可收領者。牒具如前。當省所奉聖旨。備錄在前。請貴府有端的能療風疾好醫人。許容發送前來。仍收領疋段麝香如牒者。貴國權盟之後。數逾千祀。和親之義。長垂百王。方今犯霧露於燕寢之中。求醫藥於滄波之外。望風懷想。能不依々。抑牒狀之詞。頗賤故事。改處分而曰聖旨。非蕃王可稱。宅退陬而跨上邦。誠彝倫道數。况亦託商人之旅艇。寄殊俗之置書。執圭之使不到。封國之禮既虧。雙魚猶難達風池之月。扁鵲何得入雞林之雲。凡厥方物。皆從却廻。今以狀牒。牒到准狀故牒。(日本朝文粹)

○元永元年戊戌三月大宋國獻牒狀。(歷代皇紀)

宋國附商客孫俊明、鄭清等書曰。矧爾東夷之長。實惟日本之邦人。崇謙遜之風。地富珍奇之產。曩修方貢。歸順明時。隔淵久闕來王之義。遭逢黠日。宜敢(致ノ牒)事大之誠。云々。此事叶舊例否。命諸家勘之。四月二十七日。從四位上行式部少輔菅原在良。勘隋唐以來獻本朝書例曰。推古天皇十六年。隋煬帝遣文林斐世清。使於倭國書曰。皇帝問倭皇云々。天智天皇十年唐客郭務棕來聘書曰。大唐帝敬問日本國天皇。云々。天武天皇元年郭務棕等來。安置大津館。客上書函。題曰大唐皇帝敬問倭王書。及大唐皇帝勅日本國使衛尉寺少卿大分等書曰。皇帝敬致書於日本國王。承曆二年宋人孫吉所獻之牒曰。賜日本國太宰府。令藤原經平。元豐三年。宋人孫忠所獻牒曰。大宋國明州牒日本國。(寶記)

參照

百練抄ニ「元永元年六月八日。諸卿定申。諸道勘申。大宋商客牒。可遣反牒並方物哉否。又「保安二年三

月二十六日。諸卿定申。諸道勘申。大宋牒事。或云可遣太宰府返牒。或云可送方物。トアリ當時海外ニ送ルノ書。及贈物等ノ議。歲月ヲ歴テ決セス。朝綱委靡諸政苟且ノ狀。亦之ニ由テ規フヘシ。(湖源)

◎來 朝

歸化、來聘、賞賜、授產業、

○推古天皇十六年夏四月小野妹子至自大唐。唐國號曰蘇因高。(妹子ハ蘇我氏ニシテ 妹子因高則音相通ス)即大唐使人裴世清、下客十二人、從妹子臣至筑紫。遣難波吉師雄成。召大唐客裴世清等。為唐客更造新館於難波高麗館之上。六月壬寅朔丙辰。客等泊于難波津。是日以飾船三十艘。迎客等于江口。安置新館。於是以中臣宮地連麻呂、大河內直糠手、船史王平為掌客。云々。秋八月辛丑朔癸卯唐客入京。云々。壬子召唐客於朝廷。云々。於是大唐之國信物置於延中。時使主裴清世清親持書兩度再拜。言上使旨而立之其書曰皇帝問倭皇。使人長吏大禮、蘇因高等至具懷。朕欽承寶命。臨仰區宇。思弘德化覃被含靈。愛育之情。無隔遐邇。知皇命居海表。撫寧庶庶。境內安樂。風俗融和。深氣至誠。遠修朝貢。丹款之美。朕有嘉焉。稱喧比如常也。故遣鴻臚寺掌客裴世清等。稍宣往意。并送物如別。云々。九月辛巳唐客裴世清罷歸。則復以小野妹子臣。為大使。吉士雄成為小使。福利為通事。副于唐客而遣之。爰天皇聘唐帝。其辭曰。東天皇敬白西皇帝。使人鴻臚寺掌客裴世清等至。久憶方解。季秋薄冷尊何如。想清念此即如常。今遣大禮蘇因高、大禮乎那利等往。謹白不具。云々。(日本書紀)  
○同十七年四月庚子。筑紫太宰奏上言。百濟僧道欣、惠珍為首。一十八人。俗人七十五人。泊于肥后國葦北津。是時遣難波吉士德磨船史龍。以問之曰。何來也。對曰。百濟王命以遣於吳國。其國有亂。不得入。更返於本

鄉。忽逢暴風。漕蕩海中。然有大幸而泊于聖帝之邊境。以觀喜。五月壬午德廣龍二人而副百濟人等。送本國。至于對馬。以道人等十一。皆請之。欲留。乃上表而留之。因令任元興寺。(日本紀)

○同二十六年秋八月癸酉朔。高麗遣使貢方物。因以言。隋煬帝興三十萬衆攻我。返之爲我所破。故貢獻俘虜貞公、普通二人及鼓吹拋石之類、十物、並土物、駱駝一疋。(日本紀)

○同二十九年辛巳。新羅遣奈末伊彌買朝貢。仍以表書表使旨。(日本紀)

○孝德天皇元年大化元年乙巳秋七月丙子。高麗、百濟、並遣使進調。百濟調進兼領任那使任那調。唯百濟大使佐平緣福、遇病留津館。(厚多津)而不入於京。巨勢德太臣。詔於百濟使曰。明神御宇日本天皇詔旨。始我遠

皇祖之世。以百濟國爲內官家。譬如三絞之綱。中間以任那國屬賜百濟。後遣三輪栗隈君東人。觀察任那國界。是故百濟王隨勅悉示其界。而調有闕。由是却還其調。任那所出物者。天皇之所明覽。夫自今以後。可具題國與所出調。汝佐平等不改而來。早須明報。(日本紀)

○同七年辛亥白雉二年。是歲新羅朝貢使、知萬沙冷等、著唐國服泊于筑紫。朝廷惡悉移俗。訶噉追還。于時巨勢大臣奏請之曰。方今不伐新羅。於後必常有悔。其伐之狀不須舉力。自難波津。至筑紫裏。相接浮盈艦舳。召新羅問其罪者。可易得焉。(日本紀)

○天智天皇三年甲子夏五月戊申朔甲子。百濟鎮將劉仁願。遣朝散大夫郭務悰等。進表函與獻物。冬十月乙亥朔戊寅。發遣郭務悰等勅。是日中臣內臣遣沙門智祥。賜物於郭務悰。庚寅釋賜郭務悰等。十二月甲戌朔乙酉。

郭務悰等罷歸。

○同六年十一月乙丑。百濟鎮將劉仁願。遣熊津都督府。熊山縣令。上柱國司馬香法聰等。送大山下境部石積等筑紫都督府。乙巳法聰等罷歸。以小山下伊吉連博德、大乙下笠朝臣諸石爲送使。(同)

○同七年秋九月壬午朔癸巳。新羅遣沙喙冷金東嚴等進調。丁未中臣內臣使沙門法辨奏肇。賜新羅上臣。大角千、庚信船一隻。付東嚴等。庚戌、使布勢臣耳麻呂。賜新羅王輪御調船一艘。附東嚴等。十一月辛巳朔。

賜新羅王絹五十疋、綿五百斤、苳一百枚。付東嚴等。賜東嚴等物各有差。乙酉、遣小山下道守臣麻呂、吉士小鮪新羅。是日東嚴等罷歸。(日本紀)

○同十年十一月甲午朔癸卯。對馬國司。遣使於筑紫太宰府言。月生二日。沙門道久。筑紫君薩野馬、韓島勝婆々、安布師首磐、四人。從唐來曰。唐國使人郭務悰等六百人。送沙宅孫登等一千四百人。惣合二千人。乘船四十七艘。俱泊於比智島。相謂之曰。今吾輩人船數衆。忽然到彼。彼防人驚駭射戰。乃遣道久等。豫稍披陳來朝之意。

○持統天皇元年三月。筑紫太宰獻三國高麗、百濟、新羅、百姓男女并僧尼六十二人。

四月癸卯筑紫太宰獻投化新羅僧尼及百姓男女六十二人。居武藏國。賦田受稟。使安生業。九月甲申新羅遣王子金霜林、級冷金薩羣。及級冷金仁述。大舍蘇陽信等。奏請國政。且獻調賦。云々。筑紫太宰便告崩於霜林等云々。

來朝

九十五

○同二年戊子二月己亥，獲霜林等於筑紫館。賜物各有差。

○同四年九月丁酉。大唐學問僧智宗、義德、淨願、軍丁筑紫國上陽<sup>カミツヤメ</sup>郡大伴部博麻。從新羅送使。大奈未金高訓等。還至筑紫。癸丑，大唐學問僧智宗等。至于京師。戊午遣使者。詔筑紫太宰河內王等曰。獲新羅送使。大奈未、金高訓等。准上述學生上師宿娣等送使之例。其慰勞賜物。一依詔書。

○元明天皇和銅二年己酉五月乙亥。新羅使金信福等貢方物。壬午。右大臣藤原朝臣不比等。引新羅使於辨官廳內。語曰。新羅國自古入朝。然未嘗與執政大臣談話。而今日披晤者。欲結二國之好。成往來之親也。使人等即避座而拜。復座而對曰。使等本國卑下之人也。然受王臣教。得入聖朝。適從下風。幸甚難言。况引昇榻上。視對威顏。仰承恩教。伏深欣懼。(概日)

○元正天皇養老元年丁巳十一月甲辰。高麗百濟二國士卒遭本國亂。投於聖化。朝廷憐其絕城。給御終身。(概日)

○同五年十二月。新羅貢調使、大使一吉、金弼等來朝於筑紫。緣太上天皇登遐。從太宰放還。(概日)

○天平四年春正月丙寅，新羅使來朝。三月戊申。召新羅使輯奈麻、金長孫等。於太宰府。云々。五月庚申。金長孫進。○物。並鷄鵝一口。鵝鴿一口。蜀狗一口。○一口。驢二頭。騾二頭。仍奏請來朝年期。

○同六年十二月癸巳。太宰府奏。新羅貢調使級伐、金相貞來泊。(以上概日)

○同七年二月癸卯。新羅使金相貞入京。癸丑遣中納言正三位多治比真人縣守於兵部曹司。問新羅使入朝之旨。

而新羅國輒改本號。曰王城國。因茲返却其使。

○同十年六月辛酉。遣使太宰。賜綬於新羅使。金想純等使即放還。(同十)

○天平勝寶四年三月己巳。太宰府奏。新羅王子韓阿淦、金泰廉、貢調使大使金暄、及送王子便。金弼言等。七百餘人。乘船七艘來泊。乙亥遣使於大內山科惠我直山等陵。以告新羅王子來朝之狀。(同十)

六月己丑，新羅王子金泰廉等拜朝。壬辰詔曰。新羅國來奉朝廷者。始自氣長足媛皇太后平定彼國。以至于今。爲我藩屏。而前王承慶。大夫思恭等。言行怠慢。闕失恒禮由。欲遣使問罪之間。今彼王軒英改悔前過。冀親來庭。而爲顧國政。因王子泰康等。代而入朝。兼貢御調。朕所以嘉勸勤款。進位賜物也。又詔自今以後。國王親來。宜以辭奏。如遣餘人入朝。必須令資表文。(已上同)

○天平寶字二年九月丁亥。小野朝臣田守等至自渤海。大使輔國大將軍兼將軍行木底州刺史兼兵署少正開國公楊承慶已下二十三人、隨田守來朝。使越前國安置。

○同三年九月丁卯。勅太宰府。頃年新羅歸化。船艦不絕。規避賦役之苦。遠奔墳墓之鄉。言念其意。豈無顧戀。宜再三引問情願。還者給料放却。十月丙辰。徵高麗使於太宰。(已上同)

○同三年十月辛亥。迎藤原河清使判官內藏忌寸全成。自渤海却廻。海中漕風。漂着對馬。渤海使輔國大將軍兼將軍玄菟州判官兼押衛官開國公高南申。相隨來朝。其中臺牒曰。迎藤原河清使總九十九人。大唐祿山先爲迎命。思明後作亂。常內外騷荒。未有平殄。即欲放還。恐被害殘。又欲勒還。慮違隣意。仍地。

◎遣使

遣隋、唐、渤海、新羅使、發跡、漂流、

○推古天皇十五年秋七月戊申朔庚戌。大禮小野妹子遣於大唐。以鞍作福利爲通事。(日本書紀)

參照

隋書倭國傳、大業三年其王多利思比孤、遣使朝貢。使者曰。聞海西菩薩天子重興佛法。故遣朝拜。兼沙門數十人。來學佛法。其國書曰。日出處天子致書日沒處天子無恙。云々帝覽之不說。謂鴻臚卿曰。蠻夷書有無禮者勿復以聞。

○大寶二年六月乙丑。遣唐使等去年從筑紫而入海。風浪暴險不得渡海。至是及發。

○養老二年冬十月庚辰。太宰府言。遣唐使從四位下多治毛真人來歸。

○同年十二月十三日壬申。多治比縣守等至自唐。

○同四年正月丙子。遣渡鳥津輕司從七位上諸君鞍男等六人於鞆國。觀其風俗。

○天平九年二月己未。遣新羅使、大判官從六位上、壬生使主宇太麿奏。新羅國失常禮。不受使旨。於是召五位以上並六位已下官人總四十五人于內裏。令陳意見。四月乙巳朔。遣使於伊勢神宮、大神社、筑紫住吉、八幡、二社、及香推宮。奉幣以告新羅無禮之狀。九月癸巳停筑紫防人。歸于本鄉。差筑紫人。令成壹岐對馬。

(概記)

○天平勝寶二年九月乙酉。任遣唐使以從四位下藤原朝臣清河爲大使從五位下大伴宿稱古麿爲副使。判官主典各四人。

○同三年二月庚午。遣唐使雜色一百十三人。叙位有差。

○同年夏四月丙辰。遣參議左大辨從四位上石川朝臣年足等。奉幣帛於伊勢大神宮。又遣使奉幣帛畿內七道諸社。爲令遣唐使等平安也。

○同年十一月丙戌以從四位上吉備朝臣眞備。爲入唐副使。

○同四年癸卯以七位下山口忌寸人麿。爲遣新羅使。

○同年三月庚辰。遣唐使等拜朝。

○同年閏三月丙辰。召遣唐使已上於內裏。詔給節力。仍授大使從四位上藤原朝臣清河。正四位下。從五位上大伴宿稱古麿。從四位上。留學生無位藤原刷雄。從五位下。

○同六年正月癸丑。太宰府奏。入唐副使從四位上吉備朝臣眞備船。以去十二月七日來着益久島。自是之後。自益久島進發。漂着紀伊國牟路崎。丙寅副使大伴宿稱古麿自唐國至。古麿奏曰。大唐天寶十二載歲在癸巳正月朔癸卯。百官諸蕃。朝賀天子於蓬萊宮含元殿受朝。是日以我次西畔第二吐蕃下。以新羅使。次東畔第一食國上。古麻呂論曰。自古至今。新羅之朝貢日本國久矣。而今到東畔上。我反在其下。義不可得。

時將軍吳懷實見<sub>レ</sub>知古麻呂不<sub>レ</sub>肯色。引<sub>レ</sub>新羅使。次<sub>二</sub>西畔第二吐蕃下<sub>一</sub>。以<sub>二</sub>日本使<sub>一</sub>。次<sub>二</sub>東畔第一大食國上<sub>一</sub>。癸丑。太宰府言。遣使尋訪入唐第一船。其消息云。第一船舉船。指<sub>二</sub>奄美島<sub>一</sub>。去未<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>着處<sub>一</sub>。

○四月癸未。太宰府言。入唐第四船。判官正四位上、布朝朝臣人主等。來<sub>二</sub>泊薩摩國石離浦<sub>一</sub>。(以上概紀)

○天平寶字二年九月丁亥。小野朝臣田守等至<sub>二</sub>自渤海<sub>一</sub>。大使輔國大將軍兼將軍行木底州刺史兼兵署少正開國公楊承慶已下二十三人隨<sub>二</sub>田守<sub>一</sub>來朝。使<sub>二</sub>越前國安置<sub>一</sub>。十二月戊申。遣渤海使小野朝臣田守等奏唐國消息曰。天寶十四載歲次乙未。十一月九日。御使大夫兼范陽節度使安祿山反。舉兵作亂。自稱大燕聖武皇帝。改范陽作靈郡。其宅爲潛龍宮。年號聖武。留其子安卿緒。知范陽郡事。自稱精兵二十餘萬騎。攻潼津關。哥翰壞潼津岸。以墜黃河。絕其通路而還。孝哲避山開路。引兵入<sub>二</sub>至于新豐<sub>一</sub>。六月六日天子遊于劍南。七月甲子。皇太子瑛即<sub>二</sub>皇帝位于靈武郡都督府<sub>一</sub>。改元爲至德。元載乙卯。天子至益州。平盧留<sub>二</sub>後事徐歸道<sub>一</sub>。遣<sub>二</sub>果毅都尉行柳城縣、兼四府經略判官、張元潤<sub>一</sub>來<sub>二</sub>聘渤海<sub>一</sub>。且徵<sub>二</sub>兵馬<sub>一</sub>曰。今載十月當擊<sub>二</sub>祿山<sub>一</sub>。王須<sub>二</sub>發<sub>二</sub>騎四萬<sub>一</sub>來<sub>二</sub>拔<sub>二</sub>平賊<sub>一</sub>。渤海疑<sub>レ</sub>有其異心。且留未<sub>レ</sub>歸。十二月丙午。徐歸道果鳩<sub>二</sub>劉正臣于北平<sub>一</sub>。潛通<sub>二</sub>祿山<sub>一</sub>。幽州節度、史思明、謀<sub>レ</sub>擊<sub>二</sub>天子<sub>一</sub>。安東都護王玄思。仍知<sub>二</sub>其謀<sub>一</sub>。帥<sub>二</sub>精兵六千餘人<sub>一</sub>。打<sub>二</sub>破柳城<sub>一</sub>。斬<sub>二</sub>徐歸道<sub>一</sub>。自稱<sub>二</sub>護知平盧節度<sub>一</sub>。進鎮<sub>二</sub>北平<sub>一</sub>。至德三載四月。王玄志、遣<sub>二</sub>將軍王進義<sub>一</sub>。未<sub>レ</sub>聘渤海。且通<sub>二</sub>國故<sub>一</sub>。天子歸<sub>二</sub>于西京<sub>一</sub>。迎<sub>二</sub>太上天皇于蜀<sub>一</sub>。居<sub>二</sub>于別宮<sub>一</sub>。彌滅<sub>二</sub>賊徒<sub>一</sub>。故遣<sub>二</sub>下臣來告<sub>一</sub>命矣。渤海王爲<sub>二</sub>其事難<sub>一</sub>信。且留<sub>二</sub>進義<sub>一</sub>遣<sub>二</sub>使詳問<sub>一</sub>行人未<sub>レ</sub>至事。○○○○可知。其唐王賜渤海國王勅書一卷。亦副狀進。於是勅<sub>二</sub>太宰府<sub>一</sub>曰。安祿山者。是狂胡狡豎

也。遠<sub>レ</sub>天起<sub>レ</sub>逆。事必不<sub>レ</sub>利。疑是不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>計<sub>二</sub>西<sub>一</sub>。還<sub>レ</sub>更<sub>レ</sub>掠<sub>二</sub>於海東<sub>一</sub>。古人曰。蜂螫猶毒。何況人乎。其府帥船主及大貳吉備朝臣真備。俱是碩學。名顯<sub>二</sub>當代<sub>一</sub>。簡<sub>二</sub>在<sub>二</sub>朕心<sub>一</sub>。委<sub>二</sub>以<sub>二</sub>重任<sub>一</sub>。宜<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>此狀<sub>一</sub>。預設<sub>二</sub>奇謀<sub>一</sub>。縱使不<sub>レ</sub>來。儲備無<sub>レ</sub>悔。其所<sub>レ</sub>謀<sub>二</sub>上策及應<sub>レ</sub>備雜事<sub>一</sub>。一一具<sub>レ</sub>錄<sub>二</sub>報來<sub>一</sub>。(概紀)

同五年八月甲子。迎藤原河清、使高元度等至<sub>二</sub>自唐國<sub>一</sub>。初元度奉使之日。取<sub>二</sub>渤海道<sub>一</sub>。隨<sub>二</sub>賀正使揚方慶等<sub>一</sub>。往<sub>二</sub>於唐國<sub>一</sub>。事畢欲<sub>レ</sub>歸。兵仗樣甲冑一具。代刀一口。槍一竿。矢二隻。分<sub>二</sub>付元度<sub>一</sub>。又有<sub>二</sub>內使<sub>一</sub>。宣勅曰。特進秘書監藤原河清。今依使奏。欲遣歸朝。唯恐殘賊未平。道路多難。元度宜<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>南路<sub>一</sub>。先歸復命。即令中謁者謝時和。押<sub>二</sub>領元度等<sub>一</sub>向<sub>二</sub>燕州<sub>一</sub>。與刺史季岫平章造船一隻。長八丈並差押水手官。越州浦陽府折衝。賞入紫金魚沈袋惟岳等九人。水越州浦陽浦別將。賜祿陸張十等。三十人。送<sub>二</sub>元度等<sub>一</sub>歸<sub>二</sub>朝於太宰府<sub>一</sub>。安置。(同三十)

○寶龜七年閏八月庚寅。先是遣唐使船到肥前國松浦郡合蓋田浦。積日餘日。不得<sub>二</sub>信風<sub>一</sub>。既入<sub>二</sub>秋節<sub>一</sub>。彌遠<sub>二</sub>水候<sub>一</sub>。乃引<sub>二</sub>還於博多大津<sub>一</sub>。奏上曰。今既入<sub>二</sub>於秋節<sub>一</sub>。逆風日扇。臣等望<sub>二</sub>待<sub>二</sub>來年夏月<sub>一</sub>。庶得<sub>二</sub>渡海<sub>一</sub>。是日勅。後年發<sub>レ</sub>期。一依<sub>二</sub>來奏<sub>一</sub>。其使及水手。並宜<sub>レ</sub>在<sub>二</sub>彼待<sub>一</sub>期進<sub>レ</sub>途。

十一月己巳。遣唐使佐伯宿禰今毛人。自太宰還而進<sub>二</sub>節刀<sub>一</sub>。副使大伴宿禰益立。判官海上真人三狩等。留<sub>二</sub>府待<sub>一</sub>期。時人善<sub>レ</sub>之。

今以后。宜依古例向太宰府。不得取北路來。而今違此約束。其事如何。對曰。烏須弗。來歸之日。實承此旨。由是都蒙等發自弊邑南海府吐號浦。西指對馬竹室之津。而海中遭風。着此禁境。失約之罪。更無所避。(都蒙等前年十二月越前國漂着。同十年十一月又渤海使來。交文無體ナルヲ以テ責却セラル)

○同九年冬十月乙未。遣唐使第三船。到泊肥前國松浦郡橋浦。判官勅旨大亟正六位上兼下總權介小野朝臣滋野上奏言。臣滋野等。去寶龜八年六月二十四日。候風入海。七月三日與第一船同到楊州海陵縣。八月二十九日。到楊州大都督府。即依式例。安置供給。得觀察使兼長史陳少遊處。屬祿山亂。常館驛彫弊。入京使人。仰限六十人。以來十月十五日。臣等八十五人。發州入京。行百餘里。忽據中書門下牒。據節人數。限以二十人。臣等請加二十三人。持節副使小野朝臣石根。副使大神朝臣末足准判官羽栗臣翼。錄事上毛野公大川韓國連源等。四十三人。正月十三日到長安城。即於外宅。安置供給。特有監使。旬當使院。頻有優厚。中使不絕。十五日。於宣政殿禮見。天子不衛。是日進國信及別貢等物。天子非分喜觀。班示群臣。三月二十二日。於延英殿對見。所請並免即於內裡設宴。官賞有差。四月十九日。監使楊光耀。宣口勅云。今遣中使趙寶英等。將答信物。往日本國。其駕船者。仰楊州造。卿等知之。二十四日。事畢拜辭。奏云。本國行路遙遠。風漂無准。今中使云。往冒涉波濤。萬一顛覆。恐乖王命。勅答。朕有少許答信物。今差寶英等押送道義所在。不以爲勞。即賜銀鏡酒。以惜別也。六月二十四日。到楊州。中使同欲進途。船難卒成所由。奏聞。便寄乘臣等發遣。其第一、第二船。並在楊子塘頭。第四船在楚州鹽城縣。九月九日。

臣船得正南風。發船入海。行已三日。忽遭逆風。船着沙上。損壞處多。竭力修造。今月十六日。船僅得浮。便即入海。二十三日。肥能前國松浦郡橋浦。但今唐客隨臣入朝。迎接祇供。令同蕃例。臣具牒太宰府。仰令准擬其唐消息。今天子廣平王。名迪、年五十三、皇太子雍王、名适、年號大曆十三年、當寶龜九年。

庚子。勅太宰府。得今月二十五日奏狀。知道唐使判官滋野等。乘船到泊。其寄乘唐使者。府宜且遣使勞問。判官滋野者。令入京。

十一月壬子。遣唐第四船。來泊薩摩國飯島郡。其判官海上真人三狩等。漂着耽羅島。被島人畧留。但祿事韓國連源等。陰謀解纜而去。率遺衆四十餘人而來歸。

乙卯第二船。到泊薩摩國出水郡。又第一船、海中斷離。各分。主神津守宿禰國麻呂。並唐判官等、五十六人。乘其艦而着飯島郡。判官大伴宿禰繼人。並前入唐大使藤原朝臣河清之女喜娘等。四十一人。乘其艦而着肥後國天草郡。繼人等上奏言。繼人等。去年六月二十四日。四船同入海。七月三日着泊楊州海陵縣。八月二十九日。到楊州大都督府。即節度使陳少遊。且奏。放六十五人入京。十月十六日發起上都。至高武縣。有中書門下勅牒。爲路次乏車馬。減却人數。定二十人。正月十三日。到長安。即遣內使趙寶英。將馬迎接。安置外宅。三月二十四日。乃對龍顏奏事。四月二十二日。辭見首路。勅令內使揚光耀監送。至揚州。發遣使領留學生起京。又差內使接庭令趙寶英、英判官四人。資國之資貨。隨使來朝。以



結隣好。六月二十五日。到惟楊。九月三日發自楊子江口。至蘇州常就縣。並未知發日。十一月五日。得信風。第一第二船。同發入海。比及海中。八日初更。風急波高。打破左右棚椽。潮水滿船。蓋拔舉流。人物隨漂。無遺。旬撮米水。副使小野朝臣石根等、三十七人。唐使趙寶英等二十五人。同時沒入。不得相救。但臣一人潛行着舳艫角。顧兩前后。生理絕路。十一日五更。帆檣倒於船底。斷為兩段。舳艫各去。未知所到。四十餘人。累居方丈之舳。舉舳欲沒。載纜枕杙。得少浮上。脫却衣裳。裸身懸坐。米水不入口。已經六日。亥刻漂着肥前國天草郡西仲島。臣之再生。欲造所救。不任歡幸之至。謹奉表以聞。(以上同三十)

○同十年甲申。以太宰少監正六位下道朝臣長人、為遣新羅使。為迎遣唐判官海上三狩等也。

秋七月丁丑。太宰府言。遣新羅使下道朝臣長久等。率遣唐判官海上真人三狩等來歸。

○延曆二十四年七月癸未。太宰府言。遣唐使第三船。今月四日。發自肥前國松浦郡鹿島。指遠值嘉島。忽遭南風。漂着孤島。船居。巖間。潮水盈溢。判官正六位上三棟朝臣今嗣等。脫身就岸。官私雖物。不追。上收。射手數人。留在船上。縱絕船流。不知何去者。勅使以國信為重。船物須人力。乃全。而今不願公途。求荷存。泛船無人。何以能濟。奉使之道。豈其然乎。宜加科責。以儆懲沮。(後紀十參照)

○唐書憲宗記。平城天皇大同元年丙戌曰。日本國判官正五位上兼行鎮西府大監高階真人遠成。右可大中大夫。試太子

中元。餘如元。勅。日本國使判官正五位上兼行鎮西府大直。高階真人遠成等。奉其君長之命。赴我會同之禮。越溟波而萬里獻方物於三檢所。宜褒獎並錫班榮。可依前件。(唐元和元年正月二十日八日與日本使位記)

○承和三年五月辛巳。恐遣唐使船風或波或變。漂着新羅境。所次太政官准舊例。牒彼國執事省。先告諭之曰。不淪舊好。隣種彌新。迺發皇華。朝章自遠。仍今遣使修聘。聘唐。海晏當時。雖知利涉。風濤或變。猶慮非常。脫有使船漂着彼境。則扶之送過。不俾帶過。因以武藏權大掾紀三津為使。齎牒發遣。(後紀)

○同年七月辛巳。太宰府馳驛言。今月二日。遣唐使四船。共進發畢。是日太宰府馳驛奏。遣唐使第一、第四兩船。漂蕩却廻之狀。兩船密封奏。同共到來。

甲申勅符。今月六日、九日、二道飛驒奏狀。具知漂廻共着肥前國也。使等忠貞之操。不敢告勞。蒙冒險難。廻涉蒼海。而事不諧偶。中路却廻。靖言念之。憂心何已。今案奏狀。兩船並已無完。必須改營。宜俟修造畢。次遂渡海耳。其第一、第三船。未知平不。辭嗟乎懷。又勅符太宰大貳藤原廣敏等。得今月十日飛驒奏。知遣唐第一、第四、船。廻着肥前國之狀。使等不利西風。漂廻管難。宜安置府館。迄于更發。依舊供億。又案使奏。兩船摧殘更須改營。府使修造。令得渡海。其匠手者復將擇遣。又第二、第三、兩船。疑亦或廻着。宜值嘉島涯畔。着船處。為置斥候。以備接援。如有漂着。亟以上奏。己丑。遣遣持節大使藤原朝臣常嗣等上表言。伏奉今月十七日聖書。精守飛越。手足未屠。知是玄監無私。能照表裡。漬渥不置。普霑巨細。臣常嗣等。自營臆市畢。遠入大瀛。日夜漂蕩。無生願。只待蕭鐸於

水波。占殯葬於魚腹。而天不滅人。裁泊壞。臣等固雖萬禱。靈祇再延。瞬息猶傷。給詔未達。心神半死。今持資報旨。慰喜非常。臣等願所庸礫。曷吝重煩。更煩天覽。伏增帖焦。

辛卯太宰府馳驛奏。第二船漂迴之狀。壬辰。勅符副使小野朝臣篁。得今月八日飛驒奏狀。知得着肥前國松浦郡別島也。近開第一、第四、兩隻船。半路漂没未弼尋有茲奏。轉以驚嗟。本謂忠貞。必蒙利往。不知此行負幽明。雖無巨災。艱虞足患。今案來奏。船船有損。辦艇亦失。還太宰府。繕補其不完不足者。然后與持節使等共果國命。

八月戊戌朔。太宰府馳驛奏。遣唐使第三船水手等十三人。駕編板漂着之狀。已亥。勅符。遣唐大使藤原常嗣。省太宰府。去月二十日飛驒奏言。第三船水脚十三人。編板如桴。駕之。漂着對馬島南浦。其水脚等申云。船實依數解散者。翻水不收。悔而何及。言念災變。永用憫傷。又案同府別奏。言彫弊未復。早疫相仍。使人等六百有餘。不堪供給。伏望准寶字寶龜例。使人入京。水脚還鄉。又留判官錄事各一人。與府司共修造破船者。並依來奏。使者宜知此情。判官已上至水手。惣自舟途入京。還塔。脫有不欲更入都者。隨願駐之。但大使副使。去留任意。其緣修造事。應留。判官並錄事者。任大使之簡定。

辛丑。遣唐第三船人九人。駕桴。漂着肥前國。乙巳勅曰。遣唐第三船。未遂利涉。半途漂損。縱乘桴所着。使下之徒。有二十有五人。漂着之後。已經旬日。而判官錄事史生。知乘船事等。惣一百餘人。來知所去。存亡難量。宜仰太宰府。差海邊諸路之人。遣絕島無人處。漂損人物。一向尋覓。募以殺帛。

丁巳。大宰府奏言。問遣唐第三船、漂蕩之由。真言請益僧真濟等。僅作書答云。桅折棚落。潮溢人溺。船頭已下百三十人。任波漂蕩。爰船頭判官丹墀文雄議云。我等空渴死船上。不如壞船作筏。各乘覓水。錄事以下爭放。取船板。造桴各去。自外無復所言。

壬戌太宰府馳驛奏。遣新羅使進發。並遣唐第三船。漂着對馬島上縣郡南浦。船上唯有三人之狀。

九月辛巳。遣唐大使副使等。自太宰府入還節刀。

十月戊午。遣新羅使紀三津還到太宰府。

十二月丁酉。遣新羅使紀三津復命。三津自失使旨者。被新羅誣。却歸來到。則所以遣三津於新羅者。遣唐四個船。今欲渡海。恐惑風變。漂着彼場。由是准之。故實先遣告諭。期其接援。而三津到彼。失本朝旨。稱專來通好。似畏怯媚。託私自設。執事省疑與太政官牒相違。再三詰問。三津逾增迷惑。不能分疏。是則三津不文而其口亦訥之所致也。故執事省牒中云。兩國相通。必無詭詐。使非專對。不足為憑。但其副介年。何除其貴。輕舉其下。加以當爾之時。篋身在本朝。未及渡海。而謂帆飛已遠。斯並聞商帆浮說妄所言耳。荷校滅耳。蓋在玆歟。又三津一介綠衫。孤舟是駕。何擬為入唐使者。如此異論。近于誣罔。斯事若只存大略。不詳首尾。恐後之觀者。莫辨得失。因全寫執事省牒。附載之。新羅國執事省。稱朝聘。兼有贊資。及檢公牒。假偽非實者。牒得三津等狀。備奉承王命。專來通好。及開函覽牒。但云修聘巨唐。脫有使船漂著彼界。則扶之送過。無得滯過者。主司再發專使。詰問丁

寧。口與牒乖。虛實莫辨。既非交隣之使。必匪由裏之賂。事撫實。豈令虛受。其太政官印篆跡分明。小野篁船帆飛已遠。未必重遣三津。聘于唐國。不知島嶼之東西。窺利偷學官印。假造公牒。用備付候之難。自還白水之遊。然兩國相通。必無詭詐。使非專對。不足為憑。所司再三。請以政刑章用。但奸類主司。務存大體。舍過責功。恕小人荒迫之罪。申大國寬弘之理。方今時屬大和。海不揚海。若求尋舊好。彼此何況。貞觀中高表。致彼之後。惟我是賴。唇齒相預。其來久矣。事須牒太政官并着青州。

最事與給過海程糧。放還本國。請處分者。奉判准狀。為太政官。請垂詳悉者。

九月辛巳。遣唐大使副使等。自太宰府入京。奉還節刀。

十月戊午。遣新羅使紀三津。還到太宰府。(以上續後)  
(紀五卷)

○同四年三月壬午。遣唐大使藤原朝臣常嗣。出自鴻臚。發向太宰府。丁亥。遣唐副使小野朝臣篁。發自鴻臚。向太宰府。

七月發未。太宰府馳傳言。遣唐二個船。共指松浦郡晏樂崎發行。第一第四船。遇逆風。流着壹岐島。第二船左右便漂着值嘉島。(同六)

○同五年三月甲申。勅曰。遣唐使頻年却廻。未遂過海。夫冥靈之道。至信乃應。神明之德。修善必祐。宜太宰府監以上。每國一人率國司講誦。云々。於國分寺及神宮寺。安置供養。使等往還之間。專心行道。令

得穩平。

五月甲申太宰府奏。遣唐使第二船進發。(以上同)  
(七卷)

○同六年八月己巳。勅。太宰府太宰大貳從四位上南淵朝臣永河等。得今月十四日。飛驒所奏。遣唐錄事大神宗雄送太宰府牒狀。遣大唐三個船。嫌本船之不完。倩駕楚州新羅船九隻。傍新羅南。以歸朝。其第六船宗雄所駕是也。餘八個船。或隱或見。前後相失。未有到着。艱虞之變。不可不備。宜每方面戒防人。不絕炬火。贏貯糧水。令後着船。共得安穩。其宗雄等。安置客館。得待後船。是日令十五大寺讀經祈願。以船到着。為修法之終。遣神祇少副從五位上大中臣朝臣磯守。少佑正七位上大中臣朝臣肆守。奉幣帛於攝津國住吉神。越前國氣比神上。並祈船舶歸着。

癸酉。太宰府飛驒上奏。入唐大使藤原朝臣常嗣等歸着之由。甲戌勅。參議太宰權帥正四位下兼左大辨藤原朝臣常嗣。大貳從四位上南淵朝臣永河寺。得今月十九日奏上。知遣唐大使藤原朝臣常嗣等。率七隻船。廻着肥前國松浦郡生瀨島。與先到錄事大神安雄船。總是八艘。宜依例勞來。或寬旅思。但自限入京事。須省約。何則時屬秋獲。恐妨民業。宜以大使常嗣朝臣為第一艘。令備後權椽伴須賀雄。知乘船事。春道永藏。兩人。相隨之。其判官長岑宿禰高名。菅原善守。准判官藤原貞敏。錄事大神宗雄。准錄事高丘百與。讚岐權椽丹堀高主。知乘船事槻本良棟。深根文主。古人大和耳主。陰陽師春苑玉成等。十人。各造船聯次入都耳。就中如有大使常嗣朝臣引之共登者。任聽之。又信物要藥等。差檢校使。取陸路通運自餘人物等。

陸行水漕。可有議定。宜待後勅。又未到第二船、並一隻船、後能候來報奏聞。

九月甲午。遣唐持大使參議正四位下行左大辨兼太宰權師藤原朝臣常嗣。進節刀。乙未天皇御紫宸殿。云々、獨召大使藤原朝臣常嗣。昇自東階。天顏咫尺。勅曰。遠涉危難之途。平安參來乎。嘉賜大座。云々。(同八)

○十月丁巳。遣唐使錄事正六位上山代宿禰武益、所駕新羅船一隻。歸着筑前博多津。

○同七年三月巳卯。勅。遣唐三個船。去年夏六月發。今諸船迴來。稍經年月。伺候之事。恐有懈怠。宜命太宰府、及綠海諸國。爲未回來第二船。依例舉火候之。

四月癸丑。太宰府上奏。遣唐知乘船事菅原梶成等、所駕第二船廻着於大隅國。

庚申。勅符。太宰大貳從四位上南淵朝臣永河。少貳從五位下文屋朝臣眞屋等。得今月八日飛驒奏狀。知遣唐知乘船事菅原梶成等。分駕一隻小船。廻着大隅國海畔。梶成等漂入異域。萬死更生。久言苦節。誠可矜恤。迄于入都。依舊勞來。量賜布帛。以資衣裳。又准判官良峰長松所駕之船全否。未期鬱陶于懷。宜逾戒邊面。無絕候問。若有來着。俾得安穩。

六月壬戌。太宰府馳驛奏。遣唐第二船。准判官從六位下良岑朝臣長松等。廻着大隅國。(同上同)

○寬平六年八月二十一日任遣唐使。以從三位參議左大辨兼勘解由長官菅原朝臣道眞爲大使。右少辨兼式部少輔大外記紀朝臣長谷雄。爲副使。遣真奏言。臣某謹奏。在唐僧中璫。去三月附商客王訥等。所到錄記。大唐測弊載之具矣。更告不朝之間。終停入唐之人中。璫雖區々之旅僧。爲聖朝盡其誠。代馬越鳥。豈非

習性。臣等伏檢舊記。度々使等。或有渡海不堪命者。或有遭難遂亡身者。唯未見至唐。有難阻飢寒之悲。如中璫所申報。未然之事。推而可知。臣伏願以中璫錄記之狀。遍下公卿博士。詳被定其可否。國之大事。不獨爲身。且陳款誠。伏請處分。謹言。寬平六年九月十四日。大使參議勘解由長官。從四位上兼守左大辨行式部權大輔春宮亮菅原朝臣某。

○同七年五月十五日唐使入朝。(扶桑)

○延喜八年戊辰正月八日。左大臣(時)奏。伯耆國言上。渤海國使斐璆等着岸狀解文。三月遣使迎斐璆於京師。(扶桑)

○同九年庚午閏八月九日。令仰。唐人貨物年來遣使令檢進。此度停遣使、令太宰府檢進之。又給藏人所牒令仰可進上物色目太宰府。(同上)

○元曆二年乙巳三月十三日丙午。對馬守親光者武衛(賴)外戚也。在任之間爲平氏所襲之由。依有其聞可迎取之且今日被仰送。參河守(賴)之許。剩作過書所被遣也。(通書)五月廿三日丁巳。參河守受二品之命。爲對馬守親光迎。可遣船於對馬島之處。親光爲遣平氏攻。三月四日渡高麗國。云々。仍猶可遣高麗之由。下知彼島在廳等之間。今日既遣之。當島守護人、河內五郎義良、同送狀於親光、是平氏悉滅亡訖。不成不審。早可令歸朝之趣載之。云々。六月十四日乙丑。參河守範賴并河內五郎義良等受二品命。渡使者於高麗國之間。對馬守親光歸著彼島云。是去々々自當島欲上洛之折節。平家零落于鎮西之間。路次依不通。不能解纜。猶以在國之處。

爲中納言知盛卿、并少貳種直等奉行。可令參屋島之由。及其催。九州二島中國等皆雖從于平家之方。親光猶運志於源家之間。不行向。仍三箇度被遣追討使。所謂高二郎大夫經直(種直家子)兩度拒押使安房(種直邸等)一箇度也。此輩額下國。或知行國務。或及合戰。雖存命之間。凌風波。去三月四日。令越波高麗國之時。相伴姪婦。仍構假屋於曠野邊產生。于時猛虎闖來。親光郎從射取之訖。高麗國主感此事。賜三箇國於親光。已爲彼國臣之處有此迎歸朝件。國王殊惜其餘波。與重寶等。納三艘貢船。副送之。云々。文治二年六月十一日丁巳。親光朝臣以書狀申送云。去月八日還任對馬守訖。是則依御舉狀。遂所加朝恩也。云々。(東鑑)

附錄

○保元前後三十餘年ノ間兵禍相踵キ。外邦交渉始末ニ至テハ文籍載スルモノ寡シ。其間時々往來シタルモノハ細徒商人ニ限レリ。太宰府モ亦喋血ノ地トナリ。府令行ハレヌシテ武家ノ專轄ニ屬セシコトヲ證スヘシ。(増力 溯源)

### ◎田 秩

太宰職分田、公廩田、善客儲米、國分寺料、秩限祿令、

○凡在外諸司職分田。太宰帥、十町。大貳、六町。少貳、四町。大監、少監、大判事、貳町。大工、少判事、大典、防人正、主神、博士、一町六段。少典、陰陽師、少工、筆師、主船、主厨、防人佐、一町四段。諸令史、一町六反。(田令)

○天平二年三月辛卯。太宰府言。大隅、薩摩、兩國百姓。建國已來。未曾班田。其所有。悉是墾田相承爲佃。不願改動。若從班授。恐多喧訴。於是隨舊不動。各令自佃焉。(十卷紀)

○天平八年五月丙申。先是有勅。諸國司等除公廩田。事力借儀之外。不得運送者。太宰府管内諸國。已蒙處分訖。但府官人者。任在邊要祿同京官。因此別給仕丁公廩稻。亦漕送之物也。數立限又一任之內。不得交關所部。但買衣食者聽之。

○同十六年戊午。太政官奏。鎮西府將軍准從五位官。判官准從六位官。主典准從七位官。倍給二季祿。及日料。並留應入京。調庸物相折。通融隨時便給。又特賜公廩田。將軍十町。副將、八町。判官、六町。主典、四町。奏可之。

○天平勝寶元年閏五月乙巳。定諸寺墾田。云々。筑紫觀世音寺別五百。(同廿七卷)

○天平寶字二年夏五月丙戌。太宰府言。承前公廩稻合一百束。然中間官人隨意費用。今但遺一十餘萬束。官人數多所給甚少。離家既遠。生活尙難。於是以前遺公廩。悉合正稅。更割諸園正稅。園別逼置不失其本。每年出舉以所得利。依式班給。其諸園地子稻者。一依先符任爲公廩。以充府中雜事。

○神護景雲二年九月辛巳。先是勅。如聞太宰府收觀世音寺墾田。班給百姓。事如有實。深乖道理。宜下所司。研其根源。即仰太宰府。搜求舊記。至是日。奉勅班給百姓見田二十四町四段。捨入寺園地廿町六段。依舊爲公地。(同廿九卷)

○大同二年十月丙子。太宰府言。壹岐、多嶺兩島。校出隱田一百四十町。順進諸園例。賜島司公廩田。并郡司職田。以外悉班百姓口分。(類聚國史五十九卷)

○弘仁十四年二月丙午。太政官謹奏。應令太宰府管內諸園。佃公營田事。一合九國口分田。并乘田。七萬六千五百八十七町。口分田。六萬五千六百七十七町。乘田。一萬九百十町。應割取佃。一萬二千九百五十五町。別有口分田。五千八百九十四町。乘田。六千二百一町。隨邑可輸地子。而府解總申輸租。宜依本邑。應役徭丁。六萬二百五十七人。五人作一丁。

右班田之歲。擇收百姓口分及乘田。水旱不損之間。依件割置。號公營田。率徭丁五人。令營一丁。給功並食。一如民間。以正稅宛營料。秋收之後。返納本倉。每園令有乘田。若有年中益丁者。隨亦割加。擇村里轉丁者。各爲正長。置其所堪。令領一町以上。綠田之事。總委任之。若遭風損蟲霜之害。依實免損。近百姓居。各建

小院。所獲之稻。除田租納官兩邑以外便納此院。令易出納。獲稻五百五萬四千一百二十束。三千六百二町。

町別四百六十束。肥後國。八千九十二町。町別四。除三百九十七萬三千六百九十九束。國別佃功一百四十五萬一千四百束。町別百租

料一十八萬一千四百二十五束。五束。調庸料。一百五十萬七千七百九十束。人別調庸丁食料。七十二萬三千八百

八十四束。人別米。修理溝池官舍料。一十萬束。國別納官。一百八萬四百二十一束。

右目錄也。今納官之數。起於論定息利。須田租納官二邑爲糧之功。率一束給一束。令易成事。

一應免調庸事。課丁。六萬二百四十人。九國各全輸。有數。三萬二百九十九人。半輸二萬九千九百四十一人。調庸准

額。一百五十萬七千七百九十束。

右課役之民。率多貧窮。備貢調極爲大難。逃亡之由。亦無他。今須調々庸者。夏月以正稅宛寬價而交易秋收之後。以營田之獲返納。夫貧乏之民。夏作調庸等物。迫於無食。減直賣失臨貢調日。更倍價求民之大弊。故有此議。

一應給徭丁糧事。徭。六萬二百五十七人。人別。役口。糧稻。七十二萬三千八百四束。九國各。右貧下之民。朝不給夕。

身當公事。且求且役。飢餓之輩。十而七八。商量以營田之獲。依件宛給。

一應量修理池溝官舍料事。料稻。一十萬束。九國各。有數。

右百姓減少。破壞彌多。計算徭帳。每園無餘。今商量件料將宛役夫功食。其亦可用獲稻。以前按參議、太宰大貳、從四位下小野朝臣峰守表云。洪水滔天。大旱饑地。自然之數。大聖無免。唯堯湯之世。有二十

年之蓄。不聞道僅相望。棄捐溝壑者。積善多故也。方今頻年不稔。類以疫癘。臣所忝道。非常被害。賑恤加。府庫稍罄。寬政頻行。民猶不足。比屋無爨炊之烟。連戶多荒涼之門。因斯薄賦者。係已闕欠。公用守常責民輸貢之費。無任。非有變治恐難。易曰通其變使民不倦。劉子曰。明王務修其法。因時制宜。苟利於民。不必法古。害於事。不可循舊。夏商之衰不變法而已。三代之興。不相襲而王。由是觀之。法宜變動。非一代也。今法者。溺於故律。儒者拘於舊禮。若握一世之法。以傳百代之民。猶以一衣擬寒暑。一藥治瘵。臣變易常制。輒上<sub>二</sub>新議<sub>一</sub>。事之由趣。具<sub>二</sub>表左<sub>一</sub>。既免調庸。兼給糧食。於民爲優。又古者。九年耕必有三年之食。以三十年通。雖有凶年溢。民無菜色。今之所議九國十年之積。三千二百餘萬。以之混合正統。永代蕃不謝上世代。冀倉廩之實。指斯可待。禮節之知不在遐年。無任惻款之至。謹詣朝堂上表以聞者。伏奉去正月二十七日勅。岸守所言。便宜議定奏聞者。臣等才量淺近。無稱天旨。但政或有宜於古。而不利於今。或有便於彼。而不待於此。然則岸守所言。抑有可取。但古來所行誠悍卒政。臣等商量誠限四年。依件行之。伏聽天裁。謹以申聞。謹奏。(以上政事要略五十三卷)

○承和九年八月庚寅。太宰府言。豐後國言。前介正六位上中井王私宅。在日田郡。及私營田在諸郡。云々。

(續後紀十二卷)

○貞觀七年三月廿二日癸卯。以筑前國水田三十町。充對馬上縣下縣兩郡司統領職田。(三代實錄)

○同十五年十二月十七日。太宰府言。筑前國去仁壽二年班田其後歷十九年。死亡口分散入富家。無益貧身。

徒苦賦役。仍須早班口分。令民安堵。但課役之民。日無儉安。不課之戶。時多閑逸。論其身事。固非同年。然則所得之分。多少宜殊。昔唐制。丁男、中男、給田一頃。殘疾廢疾。四畝。寡妻妾四十畝。差降之法。誠非無故。今定課丁。給三段三百二十九步。不課男給二段。女一段。然則女子。得半男之分。乘田益舊年之數。又依弘仁十四年二月二十一日格。管內諸國始置公營田。而筑前國耕作數年。即以停止。尋其由緒。緣土地薄瘠。獲輸數多也。今須班田之日。擇良田九百五十町。不論土浪人。願充令耕佃。夏時以正稅買備調庸。秋日以獲稻填納本倉。然則百姓免徵責之酷。實賦絕逋懸之煩。又府之備隣缺。其來自邈代而云貞觀十一年。新羅海賊竊窺間隙。掠奪貢綿。自斯遷甲冑。安置鴻臚。差發俘囚。分番鎮戍。重復分置。統領選士備之警守。今所用糧米無闕有數。出納之事非無勾當。如以朝夕。資給米鹽。多煩。仍差置書生駐仕等。計口給食。結番宿直。自餘之邑類。狼雜件國割女子口分。置公營田。所遺之田。猶倍他國。須分置一百町。名警固田。如其耕營。收所輸之地子。充年中之雜用。但和割地子。因准例進納。又府儲料稻。惣三萬束。凡使糧并水脚費。及厨家雜用。凡百庶事惣在其中。諸國所備各有色數。而或致逆期。或置未進。府中之用。常若闕乏。須割置田二百町。名府儲田。收其地子。以充府用。但穀同上。依請許之。左京職言檢去承和三年二月九日格調錢准外丁總三分之一。人別輸調錢百文係八十文。仍准折正丁成足。然則人別應輸絕五尺。以此准當時沾法。益饒益錢百八十三文而。去年以往正丁一人所輸。調庸錢十四文。即是彼錢新貴時之法也。貞觀新出饒出饒益幣錢回依官符宣旨。雇役夫三十之所輸。不足一人功食。然則須以五尺絕直爲調法。然而俄有增加。幣民難堪。望

請貞觀錢十文定令輸貢勅宜別令輸貞觀錢三文。畿內諸國亦宜准此。(三代實錄二十四卷)

○同年三月九日。參議太宰權帥從三位在原朝臣行平。起請二事。其一事請營壹岐島水田一百町。使充對馬島年糧。曰檢文簿。六國一年所漕運對馬島。年糧穀二千斛。運賃並雜田料穀類。三萬四千五十束。就中筑前、筑後、肥前、豐前、豐後、等國各三百二十斛。肥後國四百斛。運賃穀一萬七十四束。并網丁狹抄、水手、百六十五人。係丁稻、三千二百八十束。凡厥所費。大畧如件。而往古以來。全到着者。實年中漂五六之三。四。以故運輸之國人物從盡檢領之島。糧儲常全。壹岐島司。并習俗人民等習申云。壹岐島者、肥前國等。且恐犯人夜著岸對馬島上。壹岐島又亦如之。其潮落潮來。不似他處。而陸地人民不漂波程枚蕩沒。連踵溺死不絕者。今謹檢故實。延曆以往件年糧穀。從六箇國。遞送於壹岐島。壹岐島受領轉漕於對馬島。而大同以來已停廢。伏以。古人遠圖深達物理。但令六國運。猶未由救弊。因檢文書。壹岐島課丁二千餘人。並是半輸者也。千人貢御油。千人進府儲油并雜穀等。又同島水田六百十六町而沒八十六步。就中除百姓口分田。并雜職田等之外。死者口分。并疫死口分。園造田等。一百餘町也。今商量。役十人丁。營百町田。其勢易於反掌。停進府之雜物。運對馬島。年糧事。又伏於人民。假令停壹岐島。所進雜油。并雜穀等。令進六國。停六國所運年糧。令營壹岐島田租。利害所返納。稻二萬九千六百三十餘束。即其支度用途。載在別紙。但反經之可否利害難明。因召彼島守賀茂直峰并練事書生等。令陳利害。勘之已訖。其二事請令肥前國松浦郡庇羅值嘉兩鄉。更建二郡號上近下近。置值嘉島。曰檢案內。元有九國二島。至于天長元年。停多觀島。隸大隅國。是只貢百領鹿皮。

費三萬六千餘束稻之故。今件二鄉地勢曠遠戶口殷阜又土產所出。物多奇異。而從委郡司。次令聚斂。波上之民。厭私求之苛。切欲貢輸於公家。惣是國司難巡檢。鄉長少權勢之所致也。加之地居海中。境隣異俗。大唐新羅人來者。本朝入唐使等。莫不經歷此島。府頭人民申云。去貞觀十一年新羅人。掠奪貢船綿等。其賊同經件島來。以此觀之。此地是當國樞轄之地。宜擇令長以慎防禦。又去年或人民等申云。唐人等好取其石。多採香藥。以加貨物。不令此間人民觀其物。又其海濱多奇石。或鍛練得銀。或琢磨似玉。唐人等好取其石。曉士人以此言之。不委以其人之弊。大都皆如此者也。望請合件二鄉。更建二郡號上近下近。便為值嘉島。新置島司郡領。任土貢。但其俸料舉定正稅公廩之間。令兼任肥前國權官。於是公卿奏議曰。臣聞聖人濟世以便物為先。明王馭民以制宜為貴。今行平所請。上件二條。漸欲省風浪運漕之費。存封疆任土之規。有以祥矣。臣等伏以商量營水田。充年糧。事頗乖仍舊。謀合權宜。請試許二年。先息耗。合兩鄉號一島。事苟謂利公。豈期膠柱。請其所陳。將以改置。謹錄事狀。聽天裁奏可。(同二十)

○凡西海道管内諸國自非當土百姓。不得賣買墾田及占開隣畝窺隙。故亦為之。是日加主鈴直丁一人。

○同三年正月十五日勅遣從五位上守左近衛權少將兼行太宰少貳藤原朝臣房雄。太宰府警固之事。准坂上大宿禰瀧守例。令左近五人、右近衛三人、隨身並乘而發焉。(同三十)

○同三年己亥十月十五日辛未。令太宰府、豐前、長門等國。禁止出境內之馬。



○同四年六月七日。勅曰。前令太宰少貳藤原朝臣房雄。行警固事。令房雄遷任肥後守。無人勾當。更致解體。其器仗、烽候、是長官之職。然則警有例。何必別配勾當。宜停少貳勾當府使、隨宜處置。又令筑後、豐後、兩國長官、先經府司後聽入京。若無府解。不得輒發。緣大貳安部朝臣貞行申請。(同三十)

○仁和二年六月七日。下知陸奧、出羽、兩國太宰府。令慎警固。緣石清水善壽宮樓鳴之恠也。(同四十)

○寬平五年癸丑閏五月三日庚午。勅符曰。追討新羅海賊事。當今務在農。要勿令失時。且征且田。良將之術。勅到奉行。(小右)

○同六年二月慧星見。四月新羅賊來。損人物。擾吏民。(扶桑)

○同六年九月五日。對馬島司。告新羅賊徒船四十五艘到來之由太宰府。同九日進上飛驒使。同十七日卯時。守文室善友。召集郡司士卒等仰云。若等若箭立背者以軍法將科罪。立額者可被賞之由言上者。仰訖。即率列郡司。以前守田村高良。令反間。即島分寺上座僧面均。上縣郡副大領下今主等為押領使。百人軍各結廿番。遣絕賊移要害道。豐圓。春竹率弱軍四十人。度賊前。凶賊見之。各銳兵而來。向守善友前。善友立楯令調弩。亦令亂聲。時凶賊隨亦亂聲。即射戰。其箭如雨。見賊等被射並逃歸。將軍追射。賊人迷惑。或入海中。或登山。合計射殺三百二人。就中大將軍三人。副將軍十一人。所取雜物。大將軍縫物甲冑、貫革袴、銀作太刀、纏弓、革胡篳。充夾保呂各一具。已上附脚力。多米常繼進上。又奪取船十一艘、太刀五十柄、棒千基、弓百十張、胡篳百十房柄三百十二枚、僅生獲賊一人。其名賢春。即申云。彼國年穀不登。人民飢苦。倉庫悉空。

王城不安然。王仰為取殺絹。飛帆參來。但所在大小船百艘。乘人二千五百人。被射殺賊。其數甚多。但遺賊中。有最敏將軍三人。就中有大唐一人。(扶桑略記二十)

○同六年九月十八日子二刻。太宰府飛驒使來。言上。打殺新羅賊二百餘人之由。云々。寅四刻。召前後飛驒使於陣頭。給白衾各一條。緣其早來也。一人給勅符。一人給位記等。還遣之。(北山)

○昌泰二年己未四月五日。太政官符。應停史生一員置弩師事。右得太宰府解備。肥後國解備。此國地接海崖。防備隣賊。雖有弩機。無師講習。望請省史生。置弩師者。府依解狀。謹請官裁者。左大臣(時)宣。奉勅依請。

○延喜十四年甲戌四月式部大輔三善清行。上封事極論時事。於其第一條請精選沿海弩師之事。其文曰。  
臣某言。(中)緣邊諸國。各置弩師者。為防寇賊之來犯也。臣伏見。本朝戎器。強弩為神。其為用也。短於逐擊。長於守禦。古語相傳云。此器神功皇后奇巧妙思。別所製作也。故大唐雖有弩名。曾不如此器之勁利也。

臣伏見。陸奧、出羽、兩國。動有蝦夷之亂。太宰管内九國常有新羅之警。自餘北陸、山陰、南海、三道濱海之國亦皆可備隣寇者也。而今件弩師皆充年給。許令斥賣。唯論價直之高下。不問才伎之長短。故所充任者。未知軍器之有弩。况曉機弦之所用乎。假令天下太平。四方無虞。猶宜安不忘危。日慎一日。况萬分之一。若有隣寇挑死者。空懷此器。孰人施用手。伏望令六衛府宿衛等。練習弩射之術。試其才伎。隨其功勞。充任伴國弩師。然則人才適名。城戍易守。(本朝)

○同十七年丁丑九月八日甲寅。太宰府言。對馬島下縣郡基子濱。鯨乍生將寄。其後九月上旬鄰賊數船將發來者。(日本紀略)

○同二十一年辛巳六月天皇親書敵國降伏之四字。納于宮崎宮。

○延長五年丁亥。延喜式成。定待蕃之諸事。其要領ヲ抄出ス

○凡太宰府管内諸國。射田每郡置二町。其一町賜步射之上手。一町賜騎射之超勝自餘有兵士。國每郡置一町。其田地子交易輕貨。國司備試上番兵士不限騎射步。人別令射十箭。每日所試勿過二十人。樹量能不。隨狀給之。其能射人。及所給物數。附朝集使送者省。

○凡太宰鼓吹丁。筑前、肥後、各七十二人。筑後肥前各五十四人。豐前豐後各三十六人。並免其徭役。凡太宰府。並九國二島撰資丁。賜徭丁十一人。(延喜式)

○凡諸國出舉、正稅、公廩、雜稻。筑前國。云々。府官公廩十五萬束。衛卒料二萬二千四百束。(隨口數有增減。下皆同之)修理府官舍料六千束。

筑後國云々。府官公廩十萬束。衛卒一萬八千二百五束。修理府官舍料六千束。

肥前國云々。府官公廩十五萬束。衛卒料一萬八千一百五束。修理府官舍料六千束。

肥後國云々。府官公廩卅五萬束。衛卒料三萬五千七百九十五束。修理府官舍料一萬束。

豐前國云々。府官公廩十萬束。衛卒料一萬七千五百五十四束。修理府官舍料六千束。

豐後國云々。府官公廩十五萬束。衛卒料一萬六千四百七十二束。修理府官舍料六千束。

凡太宰及國司巡行部內者。師僮仗十人。貳六人。監以下三人。史生一人。(以上主稅式)

凡太宰所部國。放烽者。明知使臣。不問客主。舉烽一炬。若知賊者。放兩炬。二百艘已上放三炬。

凡太宰府。定額兵馬二十疋之中。十疋並分置鴻臚館。備急速之儲。

凡壹岐對馬防人府官量事。差所部諸國百姓強健者。作蕃令守。(以上兵部省式)

○諸國器仗。筑前國甲四頭、橫刀十口、弓二十張、筑後國征矢四十具、初發四十具、

右數年所造具依前件。(中)筑前、筑後、肥前、肥後、豐前、豐後、日向、等國送太宰府。府官勘校貯納府庫。具錄色目。附朝集使申送。

○承平五年乙未十二月卅日庚寅。賜官符於太宰府。殺害新羅人事。(日本

○長德三年丁酉六月十三日諸卿定申高麗國返狀事。僉議不可遣返牒。可警固要害。又牒狀不似高麗國牒。是

大宋國之謀畧歟。(百練抄)

十月一日。太宰府飛驒到來申。高麗人虜掠鎮西之由。因止音樂。庭立奏。事了。令諸卿定申之。(日本

十一月二日癸亥。太宰府飛驒使來申。伐南蠻卅餘人之由。五日丙寅。賜官符於太宰府。(日本

○同四年戊戌二月太宰府追伐高麗國人。(百練抄)

九月十四日庚午。太宰府言上。下知貴賀島(賀賀ハ直賀。五島ノ古名ノ誤リカ)追捕南蠻由。(日本)

○長保元年己亥八月十九日己巳。太宰府言上。追討南蠻由。(日本)

八月。勅太宰府。討南蠻海賊府。將軍大藏春實擊得賊船。賞對馬邦。及筑前岩門縣。以相城岩門。(鎮四要略)

○長和三年甲寅三十二與新羅戰。(和漢合選)

三月新羅賊來。西府官兵相擊破。賊兵咸亡。(鎮四要略)

參照

二書今年ノ寇賊ヲ以テ新羅ト爲セトモ。新羅亡ヒシコト既ニ久シ。蓋新羅兇惡我制取ニ服セス。屢々禍蒙

ヲ醸シテ西埗ヲ動擾シ。其毒我ニ入ルコト深シ。故ニ古來他ノ寇聞テ誤傳シテ新羅トセシモノアリ。此レ

亦前訛ヲ襲ヒシモノナリ。(靖方湖源)

○寬仁三年己未。太宰府解申請官裁事。

言上。刀伊國賊徒或擊取。或逃却狀。

右件賊船五十餘艘來着對馬島却畧之由。彼島去月(三月)二十八日解狀。今月七日到來。即載在狀言上先了。且

整舟船。且與軍兵。警固要害所々。然間壹岐島講師常覺。同七日申時參來申云。合戰之間。島司及島內人、

民皆被殺略。常覺獨逃脫者。同日襲來筑前國怡土郡。經志摩早良郡。奪人物。燒民宅。其賊徒之船。或長十

二個(元ノ)尋。或八九尋。一船之楫三四十許。所乘五六十八、二三十人、糧乃奔騰。次帶弓矢。負楯者、七八

十人許相從。如此一二十隊。登山絕野。斫食馬牛。又屠犬肉。曳羈兒童。皆悉斬殺。男女怯者追取。賊船四五百人。又所々運取穀米之類。不知其數。云々。事出慮外。要害地廣。雖召人兵。來未多。雖整舟船。勢未○。雖然與所差遣兵士。並彼住人。文室忠光等。合戰之場。賊徒中矢者數十人。或扶以載船。其中追所斫首數輩。兵士等中矢十餘人。同八日移來同國那珂郡能古島。重錄在狀言上又了。但彼郡人民。或迷鬪戰。或爲賊虜。飛驒言上之前。不申子細也。以前少監大藏朝臣種材、藤原朝臣明範。散位平朝臣爲賢、平朝臣爲忠、前少監藤原助高、備仗大藏光弘、藤原友近等遣警固所。令相禦。同九日朝賊船襲來。欲燒警固所。拒却之間。奮呼合戰。其間中矢者十餘人。賊徒遂不能前戰。還着能古島。其後二箇日。風猛波高。不能相攻。十一日未明同國早良郡至志摩郡船越津。先是分遣精兵。豫令相待。同十二日會時上陸與大神宮擬檢非違使財部弘延等合戰。中矢之賊徒三十餘人。生得四人。其中一人被疵。一人死。少貳平朝臣致行、前監種材、大監藤原朝臣致冬、散位爲賢、同爲忠等。差加兵士。以船三十餘艘令攻追。同十三日賊徒至肥前國松浦郡。攻却村間。爰彼國前介源知、率郡內兵士合戰。中矢者數十人。生得者一人。賊船不能進攻。遂以歸却。○兵船等攻戰云々。又差遣救兵四十餘艘了。但生虜者等皆高麗人者。以通事令尋問之處。申云。高麗國爲禦刀伊賊。遣彼邊州。而還爲刀伊被獲也者。其疑難決。追賊之船還之後。搜實誠追可言上。又所擊獲首虜並戎具等。追將進上。且錄在狀謹解。寬仁三年四月十六日。

三品帥親王(在京、其人未詳)正二位行中納言兼權師藤原朝臣隆家、正五位下行大貳兼筑前守源朝臣道濟、從五位下行

少貳藤原朝臣盛規。正六位上行大典上毛野朝臣師善、從五位下行大監菅原雅隆、大監正五位上大藏朝臣光順、正五位下行少監豐島真人靜風、正六位上行少監上毛野朝臣行隆。(朝野群載)四月二十五日早旦。惟圓來云。鎮西事已無音者。即歸去後不幾來云。從備中參上者申云。異國者刀人。於壹岐島打得其一人。付兵士令參上者。先經言上可左右歟。直令參上如何。留山崎可進府解之由。指旨了。(後聞此事太虛言、更無令參上之者、云々近代只以虛言爲宗)酉時計。惟圓持帥書來(四月十六日之書)示異國人九日來着合戰等。子細在府解。又示可辭退哉否事。惟圓云。使者乘隼船參上。但異國八日俄來着能古島。同九日亂登博多津。府兵忽然不能徵發。先平爲忠同爲方等爲師首。馳向合戰。異國軍多被射殺。不留戰場。將入船中。又有奔存者。又有生虜者等。又奪取兵具甲冑者。一船中有五六人。合戰場每人持楯。前陣者持鎗。次陣持太刀。次陣持弓箭者。箭長一尺餘許。射力太猛。穿楯中人。府軍被射殺者只下人也。爲將軍者不被射。乘馬馳向射取。只忌加不良聲(鎗)引退。(刀伊國人之中有新羅國人等、云々)乘船遁去。傍岸棹船。府軍等依無兵船。不能追擊。從陸地馳行。刀伊人更下船。欲燒管崎宮。府兵射殺前行兵一人。驚乘船逃遁。十日、十一日、北風猛烈。不得還渡。逗留海中。神明所爲歟。兩日間。府令營造兵船卅八艘。令追襲。賊徒遁去。指本州灣去。府兵船又令廿餘艘乘勝逐之。又致行朝臣調十餘艘相追。但先可致壹岐、對馬島、限日本境。可襲擊。不可入新羅之境之由。都督所誠仰也者。使者又云。如只今。似被討平也。賊徒甲冑兵具等少々被奪取。又云。從陸地令捕進刀伊國者之由。十六日以前所不承也者。縱橫說難信受而已。後聞帥使說。壹岐對馬島人等悉取載船合戰之間島人等叫云「馬をかけて射よ」病に似たり」仍官軍等馳進射。刀人遁走歸乘船。此間被

取載之二島者。多下從船。遁來博多津云。件刀人爲體。多食又多飲水。馳馬以加不良射仁有恐怖氣者。又云。以兒爲荒卷。落置博多津云々。食人。云々。五月十八日參內。右大臣公季、大納言齋信、公任。中納言行成賴宗、實成。參議道方、公信、通任等先參入。刀伊國事於壁後。問行成卿。(對馬守遠晴申狀。遠守理忠被殺事、從海陸令襲擊者、飛驒云。刀伊國者二人被射殺者、)事定已了者。余(實)著陣座。大臣給府解二枚(今月七日八日)云。可被行事可定申。又云。件解注官裁可奏狀也。非飛驒申狀如何。余答云。諸卿會議如何。大臣曰。警固要害可加追討。有勤之者可加賞事。府解注官裁。須給官符。然而非勅符。遲到歟。函上注飛驒。猶可給勅符。但官符文可注違例由。又可賞事尋前例。不載勅符。仍可載官符。可被行種々內外御禱。山陰、山陽、南海道等可警固要害事等。定申了。余云。此外又不可申。但可警固事。同可給北陸道歟。大臣諾。仰左大辨道方。大臣引見寬平外記日記云。有警固北陸、山陰、山陽、南海等道要害。叶余定申者。又云。飛驒若可給察馬乎。答不覺由。被問外記。無所見者。諸卿云。雖慥無所覺可給歟。推而所量也者。未被行勅符事之前。稱所勞退出。後聞可加賞事非奏狀事。猶被載勅符者。少納言信通所談。或云。賞事不可被募云々。飛驒二人給察馬。云々。廿一日依異國凶賊著鎮西之事。被立諸社御使(大納言公任卿行之)廿七日頭辨經通合攝政命來曰。太宰府解文事(飛驒解文刀伊國)今日可定申者。申可參入由。(略)未刻許參入(宰相乘車後)覽之左大辨道參入。召外記順孝。問上達部參否。申言。大納言。(任)右衛門督(實)確有所勞相扶宜者可參入也。自餘故障者。頭辨經通下給太宰府解文云可定申者。令申云。見參上。達部數少。隨仰可定申。被命云。重召遣大納言。可定申者。召遣之間。大納言、右衛門督等參

入。先是經通下給太宰解文云可定申者。定申云。府解文云。申刀伊國人內。獲得者三人。推訊之處申云。高麗國爲禦刀伊賊。遣彼邊州而還爲刀伊被獲也。云々。數千人刀伊賊外高麗人何必被捕乎。僞稱刀伊人歟。決斷府可言上歟。兵具首虜不可令進。又四王寺。(太宰府)御修法殊可被行。對馬島司遠晴。早可遣本島。但差副堪事者。令勤防護。仰國々。令運兵糧。催遣防人。又壹岐守理忠被殺害事。此度解文儘尋問可言上也。而無其事。可仰其由歟。事若有實暫遣〇〇使。可令警固歟。定申趣以經通。令申攝政。命云。任上達部定申。可給報符者。但兵糧糯米可注進之由。可加載報符者。即件事等。仰經通。五月三日太宰報符草。今朝見之。有改直事等。可覽攝政之由。相示左中辨了。左中辨示送云。給太宰之官符。令觀攝政殿了。命云。大吉。但可入農業不可懈怠之由者。依無仰事。所不合作。件事要領事也。四日。太宰府報符從左中辨許見送之。止奸猾襲來文。可改奸猾來侵之由示遣了。件官符。今日請印云々。廿四日帥納言消息書(今月十)今日到來云。追打刀伊賊之兵船未歸來。仍重不言上。歸來之後。可上府解。兵船等自壹岐向對馬了者。其後不聞案內。疫癘方發。無爲術。但止萬事。令遣兵船戎具等。令勤行要害警固事。追打刀伊之官軍等。皆府無止。武者等向。于今不歸來。太以鬱歎者。(小右)

四月十八日乙巳。攝政(賴)以下定申飛驒事。仍賜太宰府勅符並五箇條。警固要害防禦凶賊。祈禱佛神可守當境之由也。廿一日戊申。奉幣伊勢大神宮以下十社。依刀伊國賊徒事也。(日本)

寬仁三年四月八日。太宰府言上。刀伊賊來侵之由。(皇年)

六月廿一日今日帥書(賴)付脚力送之。高麗人未斤達。五月廿九日。到着筑前國志摩郡。申云。去年三月十六日。從彼國康州。隨米千石。參着京師。六月十五日罷歸之間。被放逆風。去月八日到大宋國明州。今年五月廿四日罷歸本國之間。遭逆風來者。依有大疑禁。固令訊問者。廿九日參內。(中)秉燭後。左中辨經通。下給太宰府言上。筑前國、壹岐、對馬等島人牛馬。爲刀伊人被殺害。並被追取解。又勤功者注申事。又處々合戰狀。勘問刀伊人及此度流來未斤達等文。傳仰云。太宰言上解文中。注進勤功者可賞哉否。又流來者並初刀伊人等勘問等可定申。抑勤功賞有無如何。大納言公任。中納言行成申。不可行之由。其故者。有勤之者可賞進由。雖載勅符。勅符未到之前事也。余云不可謂勅符到不。假令雖不蒙賞事。至有勤功者。賜賞有何事。寬平六年新羅凶賊到對馬島。島司善友打返。即給賞雖無彼募。前跡如此。他事相同。就中刀伊人。近來警固所。又追取國島人民千餘人。並殺害數百人牛馬等。亦殺壹岐守理忠而太宰府發兵士。忽然追返。并射取刀人。猶可有賞。若無賞進。向後事可無進士歟。大納言齋信同(余)定。其後大納言公任、中納言行成。及已次皆同伴等定文。注太宰府言上賊徒合戰之間雜事。一府所注進勤功者事。右大將藤原朝臣(實)中宮太夫藤原朝臣(信)權大納言藤原朝臣(任)權中納言藤原朝臣(成)皇太后權大夫源朝臣(房)左大辨源朝臣(道)右大辨藤原朝臣(朝)資平朝臣等定申云。先日賜勅符之日。被募功伐之間。有功績輩。隨其狀。可加抽賞之由。而所注申者。在勅符未到着以前。不可理必被行其賞歟。但散去餘衆。非無向後之畏。爲勵後輩。聊可賞進歟。一、生虜者勘問事。同前諸卿等定申云。所注申之人合戰間。雖多中矢者。捕得賊徒。唯三人也。而勘問之場。共陳申高麗國人之

爲刀伊賊徒等被虜之由。縱雖非刀伊國之人。同船送數日之間。盡見其案內。而不窮問其趣。難散鬱結。又拷訊之者不承伏時。度々可究拷也。加之不注杖數。頗以不愜。重以窮問。可言上其旨歟。又言上流來高麗國人事。同前諸卿定申云。先日賊徒之中多有高麗國入者。此間流來輩。非無事疑。安置別所。重令尋問。可經言上之由。可被下知歟。抑異國賊徒來候之恐。不可不慎。先後來觸。何不怖畏。方々可被斬麟歟。太宰注進成勳功者。散位平朝臣爲賢。前大監藤原助高倭伏大藏光弘。藤原友近。友近隨兵紀重方。以上五人。警固所合戰之場。相戰者雖多數。賊徒正中<sub>二</sub>件<sub>一</sub>爲賢等矢。但重方不裁先日府解事。標子細<sub>ナカコト</sub>。依不注申也。令尋實誠。追所言上也。筑前國志摩郡住人文屋忠光。賊徒初來志摩郡之日。與所差遣兵士。合戰之間。中<sub>二</sub>忠光<sub>一</sub>者多。又斬賊徒之首進上。并進彼戎具等。同國怡土郡住人多治久明。賊徒到來之間。於當郡青木村南山邊相戰。賊徒合戰。射取賊一人。斬其首進府。先日解文難注子細。仍件久明自漏矣。大神守宮擬檢非違財部弘延。賊徒擊却之間計要害所々件。守宮等。差加兵士。豫所遣也。而於筑前國志摩郡船越津邊。合戰之間。中<sub>二</sub>件守宮等之矢<sub>一</sub>者多。就中生捕者二人。但一人被疵死了。前肥前介源知。賊徒還却之間。於肥前國松浦郡合戰之間。多討賊徒。又生捕進一人。前少監大藏朝臣種材。賊徒逃却之日。依有兵船遲出之告。以少貳兼筑前守源朝臣道濟。遣博多津。且令解纜。且問道其案內之處。奉使者等各申云。賊船數少。猶造兵船。一度可能向者。其中種材獨申云。種材齡過七旬身爲功臣<sub>實</sub>之後。(天慶中太宰少監兼對馬守大藏朝臣種材實時純友平大有功)待造了兵船之間。恐賊徒早逃。奔命忘身。一人欲先向者。道濟以種材所言而爲善。整出衆軍了者。依賊船之早去。誠雖遂戰。種材所言。忠節不淺。壹

岐講師常覺。賊徒三襲。每度擊返。後不堪數百之衆一身逃脫。身雖非在俗。其忠不可隱。右去四月十八日給當府。勅符云。簡裏若有攻戰忘身。勳功超輩者。隨其狀跡。加以褒賞者。言上如件。事定了。子四刻退出。件定文未清書。仍書其可奉由仰左大辨了。

筑前志摩郡五百四十七人、被殺害者百十二人、被追取者四百三十五人、牛馬七十四匹頭、

早良郡六十四人、男廿四人、女四十人、牛十頭、馬九匹、被殺害者十九人。(男廿四、女廿)被追取者二百十六人。(男廿八、女廿)牛馬卅三匹頭。(牛十六匹、馬十八匹)

能古島人九人。(女六人)駄四十四匹、牛四頭。(女三人)

壹岐島守藤原理忠被殺害。被殺害島內人民百四十八人、法師十六人、童廿九人、女五十九人、被追取女等二百卅九人、遺留人民卅五人。諸司九人、郡司七人、百姓十九人

對馬島銀穴燒損了云々。被殺害者十八人、被追取人百十六人。男三十三人、童女合八十三人、女五十六人上縣郡百四十一人、被

殺害者九人、被追取男女童百卅二人、男三十九人、童女九十三人下縣郡男女并百七人、被殺害男女并百七人、被追取男女童九十八人。男三十人、童女六十八人、童女九十八人并三百八十二人。男百二人、童女被燒亡人々住宅四十五宇爲賊徒被切喰牛馬百九十九匹頭。馬八十二匹、(小右)牛百十七頭、(記)

七月廿一日。藏人右少辨資業、合攝錄命云。太宰府言上解文等、(定中先度解文)事。又々可警固要害事。祈禱事等。如先日報符可勤行事。新羅人能可守護事。兵庫糶米追可催納事。可給官符者。即仰下了。府解等上達

七月十三日直物。有叙位除書事。種材任壹岐守。若所望歟。鎮西武者。非忽無所望者歟。仍依任歟(小右)  
八月三日都督(陸)言云々。副府解并內藏石女申文。太宰府解、申請官裁事。言上、對馬島判官代長岑諸近、  
越高麗國。隨身爲刀伊賊徒被虜女拾人歸參狀。二人、筑前國志摩郡安樂寺領板持庄人、即進府。一人病船中  
不參府。八人、對馬島人。二人到來之間。病惱死去。五人又病惱留本島。一人進府。副進賊虜女內藏石女等  
申文。右得對馬島去六月十七日解狀。同廿一日到來備。得管上縣郡伊奈院司、同十六日解狀備。刀伊賊徒到  
來間。判官代諸近、并其母妻子等被虜。而賊船還寄當島之日。諸近獨身逃脫。罷歸本宅。然間以昨夜盜取  
小船。逃亡已了。定知爲恐當島之厄。罷渡陸地歟。早被大府、將被召返者。島內人民爲賊被虜。僅所遺民又  
渡他處。若無被召返之定。惣遺民不可留跡。望請府裁被仰下管內諸國。尋在所。將被糾返者。而又得同島今  
月九日解狀。同十二日到來備。件諸近以去六月十五日。晦跡逃亡。仍其由言上先了。而以今月七日。諸近到  
來申云。刀伊賊到來之日。諸近母、伯母、妹、妻子、從者等並十餘人。被取乘賊船。慮外任反筑前、肥前等  
國、但賊徒還向之次。寄對馬島。爰諸近獨身逃脫。罷留本島。而竊惟離老母妻子。獨雖存命。已有何益。不  
知相尋老母。委命於刀伊之地。欲申事由於島司。渡海制重。仍竊取小船。罷向高麗國。將近刀伊境。欲問老  
母存亡。爰彼國通事仁禮罷會申云。刀伊賊徒。先日到來當國。殺人掠物。欲相戰之間。遂電趣日本國。艦船  
儲兵相待間。無幾還向。重殘滅海邊。仍豫於五個所。儲舟千餘艘。所々襲擊。悉以擊殺了。其中多有日本國

之虜者。彼五箇所之內。且三箇所所進三百餘人也。待集遣二箇所之人。乘船可被進日本國之由。已有公定。  
早還對馬島。可申此由者。爰罷會被賊虜中本朝人等。問老母存亡。即申云。賊徒等到着高麗地之間。取載強  
壯高麗人。以病瘋厄弱者皆入海了。汝母並妻妹等。皆以死了者。只會伯母一人。欲罷還本土之處。本朝同○  
國之制已重。無故罷還者。定可當公證。縱雖得書牒。無○證。更不可被信用。因之受乞日本人。爲證件人。  
欲罷還之處。高麗國且以賊虜十人充給。抑諸近依思老母。已忍罪過。知母死亡。至于今者。進身於公廳。左  
右可隨裁定者。投若異國。朝制已重。何況近日其制彌重。仍召諸近。身相副件女三人。差島使前掾御室爲親  
進上如件者。謹檢案內異國賊徒刀伊、高麗、其疑未決。今以刀伊之被擊。知不高麗之所爲。但新羅者元敵國  
也。雖有國號之改。猶嫌野心之殘。縱送虜民○爲說。若誇勝戰之勢。僞通成好之使。抑諸近所爲先後也。越  
制素重。況乎賊徒來侵之後誠云。以先行者。爲與異國者。而始破制法而渡海。無書牒而還。以將來虜者。優  
而無坐其罪。恐向後愚民偏思法緩。輒○渡海。爲懲傍輩禁候其身。須待高麗國使申上其案內。然而來不難知。  
旬日欲移。下民之言。誠雖難信。境外之爲。非可默爾。仍注在狀。言上如件。謹解。寬仁三年七月十三日。  
內藏石女等解申進申文事。注申被追取刀伊賊徒。罷向高麗國。海路雜事。并歸參本國案內等狀。右石女、安  
樂寺所領。筑前志摩郡板持庄之往人。阿古見、對馬島住人也。而並被追乘賊船。日來之間。見其案內。所々  
合戰之日。石女等罷乘兩船之內。中矢賊徒五人也。而着對馬之岸之間。皆以死了。此外傍類船被死亡者。  
追日不斷。爰罷着高麗國岸之後。賊徒等每日未明之間。上陸地。滅海邊別島等之人宅。運物取人也。盡則隱

島々。撰取強壯之者。打殺老衰之者。又日本虜者之中病羸者。皆以入海了。夜則各々消急去也。如此送二十餘箇日之程。五月中旬之頃。高麗國兵船數百艘襲來擊賊。爰賊人等勵力雖合戰。依高麗之勢猛。無敢相敵之者。則其高麗國、船之體高大。兵仗多儲。覆船殺人。賊徒不堪彼猛。船中殺害所虜之人等。或又入海。石女等同又被入海浮浪。仍合戰案內不能見給。無幾有高麗船扶了。即勞所合蘇生也。但見被救乘船之內。廣大不似例。○○造二重。上立櫓左右各四枚。別所漕之水手五六人。所○之士二十餘人許。下縣櫓。又一方七八枚也。船面以鐵造角。令衝破賊船之料也。舟中儲雜具鐵甲冑、大小鉞、熊手等也。兵士面々各々執持之。又大石打破賊船。又他船長大已以前前合戰事畢之後。石女等一類三十餘人。各給驛馬。近金海府之途中。十五箇日。每驛以銀器供給。其勞尤豐。官使仰云。偏非勞汝等。只奉尊重日本也者。着金海府之後。先以白布各充衣裝。兼以美食給石女等。六月卅箇之間。令安置彼府。爰對馬判官代長岑諸近。爲尋訪追取賊徒之母、妻子等。到來高麗國。聞母子之死亡。欲歸本朝。仍爲證據申請虜女十人。離岸之日。彼朝公家充給歸糧料。人別白米參斗、于魚卅隻。兼給酒食。但金海府前召集之日本人、并三百餘人。是箇所軍船所進也。殘二箇所人等來集之後。差使可返進之由。且言上公家者。徃反案內言上如件。寬仁三年七月十三日。多治見阿古見。內藏石女。(小右記)

九月十九日入夜唯圓師持帥納言(隆家)書。其狀云。從高麗國虜人送使(鄭子)來對馬之由。申彼島解文。仍言上其由。具案內注府解等。明日臨時祭始。一府大事也。息々間具事等不令申付者。九月四日書。(小右記)

九月廿二日。召使云。今日右府(公季)有可被定申事。可參入者。答依犬死穢不可參由了。若太宰府言上高麗國事歟。件事昨日入道殿(長)有被示事。其趣者爲刀伊國賊被虜者二百七十人許云々。男六十人 女二百人相送者二百餘人云々。只牒對馬命云。給絹米等可歸途也。先尋新羅國貢調時給物例。可被行歟者。太宰解文並高麗牒等尋取。後日可見之。廿三日宰相(賢平)云。昨日右大臣按察大納言齋信、權大納言公任、左大將教通、右衛門督實成、右兵衛督公信、右大辨朝經參入、頭辨經通下給太宰府解文、高麗國牒等。諸卿定申云。高麗國使召上太宰府暫安置便處。厚賜資糧。可被問此間持疑事等。又先日太宰解文注刀伊國高麗國牒注女真國。此事可被問太宰府。又馳驛可申。而以脚力言上。旬日多廻。同可被問也。給報符。又隨申上。其度可被定下歟者。(中)今朝源大納言(俊)示送云。高麗使事其定如何。數多者著小島。送旬月者。可量國強弱。可知衣食乏。以早返爲先。見牒案內。始自文書手跡。無所耻不論才之淺深。可作返牒。歸祿等程如何。內々可給位階由云々。牒已不送日本何授位階。又知本位進一階所作也。牒文無本位。此問憤申侍。於一朝中事者。雖無是非。誰人謂其旨酌。異國事先々所不緩意也。只可歸送先日捕得者流來者等者等也。二百餘人男女。何阿容異朝謀詐乎。追々被尋問。自可知實不。使人住事。未得意侍。依彼朝謀略之旨。我朝可被推行之有樣。未思得侍者。報依觸穢。不預僉議由。但昨定旨。以宰相相談說。告大納言。(不可被強尋問歟。只以差使送使)大納言重示送狀云。定旨大略承侍。不馳驛由。大府失也。不高麗失。依後々重言上。可被定下事如何。雖有彼朝許。可被行旨如何。只如不知。早被廻却使上計也。彼國牒中女真時々注貢獻由。是可所攝。尤可責不順旨也。整得異國凶賊。以虜民送當朝。尤



大事也。宗朝可牒我朝而別府安東護府牒送對馬島。此旨頗可顯返牒許也者。余(實)又報事旨了。廿四日今朝源納言(實)示送云。世間所惡思者兩納言(實任)也。今度事内々承寄侍。被聞四條大納言(公)若案内被申歟者。高麗使經歷二島對馬參太宰府如何。入秋之後。風波不靜歟。廻却之期。已及嚴冬。彼國牒對馬使者。指其處。更召上太宰。往還之間。若有漂沒。極可不便歟。又於太宰被問何事乎。經兩島之程。計之見衰弱由歟。賜返牒并物。從對馬返遣宜歟。以此由示達四條大納言。報云。定日申。往反之間。若經其日。無便廻却。彼是云。猶問可然事可遣者。仍不強申。可有議事也。但衰亡事見聞歟者。十二月卅日戌刻許。冒雨前大納言俊賢卿送書狀云。只今自太宰府言上。問高麗使日記。自對馬島。着筑前國。彼國人卅人乘船已漂沒。二艘僅到來也。先日案○令出見流來虜人等。使申。伴者高麗人而不知其來由者此尤可疑。問安東護號。申云。伴府彼朝鎮東海府也。他府皆改其號爲州也。彼府獨爲總攝府。仍所送虜人也者。端書云。自對馬不被歸。被迎府事。極奇議也。如案漂沒可哀者。件事所示尤理也。稱賢卿相所定也。彼日不預參。後聞此定。前大納言聞此定。謗難可然。四條大納言預彼議。余示此事。所答有諸氣。初陳海道難由。傍卿云。猶可召上府者。不能強執。所同也者。今般定頗不宜。前大納言彼定時似嘲會談人等。緣彼時案相當。臨夜冒雨所馳示歟。(小右)

○同四年庚申二月十六日戌戌右大臣以下參入被定高麗返牒事令太宰府牒官符。(山本)

四月十一日有召參右府。下給太宰府言上高麗人郎子良欲歸去府解。仰云。前日定下子良等祿法並遣高麗返牒等了。彼到着之日。隨給祿物並返牒等。可返遣之由。可給官符。即下大夫史奉親。令作官符。依火急事。自

殿上方召上官符。忽於結政所請印。入夜退出。八月廿五日。高麗國使郎子良給祿之由府解。並子良祿物等右府被奏。而今日依凶事不申不能奏進之。(左經)

さて壹岐對馬、の人をいとおほく刀夷國にとりもていきたりければ。新羅のみかと。いくさをおこし給ひて。みなうちかへし給ひてけり。さて使付てたしかに此島に送給へければ。彼國の使には。大貳金三百兩とらせてかへさせ給ひける。(大)

十二月廿九日。大夫史奉親朝臣持來太宰府解云。左右大辨道方具有所勞不被任。仍令申事由於左府光之處。被仰云。令汝申者。仍所持來也者。南蠻賊徒到來薩摩國。虜掠人民等之由也。即參左府申事由。次參關白殿和。令覽府解。次爲御使參御寺。申此由。仰云。道長改年之後。儘可追討之由。可賜官符於太宰府。(左經)

○寬治元年丁卯。異賊船來亂我。勅肥後守經隆。追討賊徒。(經四)

○承德元年丁丑。異賊船百餘艘。來松浦澳。及筑前海。下枝船。調軍器。將攻上九國之地。太宰府之官軍。九州諸士大防禦。破賊船若干艘。賊徒咸沒溺海水。於是諸士播功被賞者多。肥前州藤津郡吏伊佐平次兼元、時有戰功。賜祿封大江四處。且令兼元列府官。云々。(歷代錄)

○承徳元年ハ宋ノ紹聖四年、遼ノ壽隆三年、高麗ノ肅宗二年ニ當レリ。是歲賊虜掃蕩ノ事他證ナシ始ク茲ニ

揭クテ異聞ヲ博ム薩藩舊記ニ「平貞時四世貞道來居伊作郡、因稱伊作平氏」トアリ伊作氏、菊池氏、今年ノ戰ニ由テ家ヲ起セシコト亦タ傍證ナシ。行狀記、鎮西志、紀事略々同クシテ年紀ニ差異アリ並ニ確據トスルニ足ラズ(湖方)

○永曆元年庚辰四月廿八日對馬國司言上。高麗國金海府。禁錮林進房並貢銀採丁事。令諸道勘申。十二月十七日。諸卿定申。高麗國留對馬島商人之事。(百練) 十二月十七日。今夜有高麗留商人之定。云々。可尋諸道勘文定文等。(山槐)

附錄

○此ヨリ先キ久壽元年甲戌冬十月香推宮々司ノ訴ニヨリテ德大寺公能ニ命シテ官符ヲ下セリ。曰ク源爲朝久在太宰府。忽諸朝憲。咸背論言。泉惡顯聞。狼藉尤甚。可早令禁進其身。依官旨執達如件(鎮四)當時太宰府兵制張ラス一爲朝ニ對シテモ尙功ヲ策スルコト能ハサリシコトヲ證スヘシ。(湖方)

◎賑 給

褒賞、旌節、地子交易法、起證文、義倉、續命院、免租稅、殖產事業、

○持統天皇五年正月丙戌詔曰。直廣肆筑紫史益拜筑紫太宰府典。以來於今二十九年矣。以清白忠誠。不敢怠惰。是故賜倉封五千戶。綿十五疋。綿二十五屯。布五十端。稻五千束。(以上)

○同八年夏四月戊午。以淨大肆贈筑紫太宰率河內王。並賜贖物。(本紀)

○大寶三年七月甲午。以災異顏見年穀不登。詔減京畿。及太宰府管內諸國調半免天下之庸。(續紀)

○和銅四年秋七月壬子詔。大赦天下。賜高年布粟有差。復各施糶布賑恤鰥寡。不能自存者。人別賜糶一斛。京師畿內、及太宰所部今年調諸國今年田租。

○同七年三月甲辰。金元靜等還蕃。勅太宰府。賜綿五千四百五十斤船一艘。(以上)

○養老元年二月辛巳。賜太宰師從三位多治比真人。池守綾一十疋。綿二十疋。綿三十疋。布一百

端。褒善政也。(同七)

○同五年六月乙酉。詔陸奥筑紫邊塞之民。數過煙塵疫、勞戎役。加以父子死亡、室家離散、言念於此深於懷。宜勿出今年調庸。諸國兵家。殺獲逆賊。乘勝追北者。給復二年。冒犯矢石致戰死者。父子並復一年。如無子者。鄉里議其親族亦復之。

○同六年夏四月壬寅。太宰府言。日向、大隅、薩摩、三國士卒。往討集賊。頻遭軍役。兼年穀不登。交迫飢寒。謹案故事。兵役以後時有飢疫。望降天恩。給復三年。許之。

○天平元年八月癸亥。天皇御大極殿曰。云々。今年所出租賦及到太宰府路次。驛戶租調。自神龜三年已前。官物未納者。皆免。(同十)

○同七年秋七月二十六日巳卯。大隅、薩摩、隼人、朝貢。云々。八月十三日乙未。勅太宰府。奉幣部內神祇。撰疫氣。令府大寺及諸寺。讀金剛般若經。仍遣使賑給疫民。並加湯藥。二十三日丙午。太宰府言。管內諸國疫癘大行。請停今年貢調。奏可。

○同八年冬十月二十二日。詔曰。如聞比年太宰所管諸國公事稍繁。勞役不少。加久。去冬疫瘡男女惣困。農事有廢。五穀不饒。宜免今年田租。續民命。

○同九年四月癸亥。太宰管內諸國疫瘡時行。百姓多死。云々。又賑恤貧疫之家。並給湯藥療之。(以上同)

○天平寶字四年八月甲子。勅云々。壹岐對馬多糶等司。身居邊要。稍苦飢寒。出舉乏稻。曾不得利。欲運私物。路險難通。於理商量。良須務愍。宜割太宰所管諸國地子各給。守、一萬束。掾、七千五百束。目、五千束。史生、二千五百束。以資遠戍。稍慰窮情。(同廿)

○寶龜元年正月甲申。太宰管內大風。壞官舍、并百姓廬舍、一千三十餘口。賑給被損百姓。(同三)

○同三年十月丁巳太宰府言上。去年五月廿三日。豐後國、速見郡、歛見鄉。山崩填洞。水為不流。積十餘日

忽決。漂沒百姓卅七人。被埋家卅三區。詔免其調庸。加之賑給。(同卅)

○同五年十一月丁酉。太宰府言。日向、薩摩、兩國風雨。桑麻損盡。詔不問寺神之戶。並免今年調庸。(同三十)

○延曆九年八月乙未朔。太宰府言。所部飢民八萬八千餘人。請加賑恤。許之。

○同十年五月辛未。太宰言。豐後日向大隅等國飢。並賑給之。(以上同)

○同十九年夏四月庚辰。以流來裔裔人所資綿種。賜紀伊、淡路、阿波、讚岐、伊豫、土佐。及太宰府等諸國殖之。其法先簡陽地沃壤掘之。作穴深一寸衆穴相去四尺。乃洗種漬之。令經一宿。明旦殖之。一穴四枚。以土掩之。以手按之。每旦水灌。常令潤澤。待生芸之。(類聚國史 百九十九)

○天長五年甲申。筑前國人難波郡安良賣叙位二級。免戶田租。安良賣。父母共沒。常拜靈塋。朝夕盡哀。又年十六嫁宗像郡大領外正七位上宗像朝臣秋足。秋足死。于今十五年遠近聘之。誓死。終志。本邦之名教孝節可嘉。(類聚三)

○承和二年十二月癸酉。故參議刑部卿從四位上小野朝臣峰守前為太宰大貳時。建議命院一處。以備往來之舍宿。但不藉公力。恐不得長存。乃叙本意。具修解文曰。管九國二島之民。或公或私。徂來相續。其求輕者。暫經時月。其事重者竟歲始還。客宿於府倉之下。貨寄於閭閻之間。若至疾病纏身手足不隨。官司督察非養病之處。主家爭趨忘死之人。遂使露道路暴死風霜。縱有時得痊癒。亦以飢寒死者。十而八矣。見其如此。心深歎恤。聊建議命院一處。楹皮葺屋七宇。鼎一口。墾田百十町。以擬飢病。有志無力。庶幾萬一。地隔人遠。

執檢難周。轉以屬人。更增踈廢。若遂不因公力。恨心願之徒已。伏望令府監。或典。一人乃觀音寺講師。勾當其事。相替之日一事以上皆依實勘付。若不如修理。令致破損。及非法費用等之類。並以官法論。未及上聞。岑守物故。其家就大臣。追以陳請。勅報曰。思撫黎甿。不忘寢寐。宇縣遐遠。無聞控告。見此特納。爰知忠槩。速令所司。俾充所請。勾當之官。遷替之日。與奪解田。一准國司。(續後記四卷)

○承和五年夏四月庚子勅。筑前、筑後、肥前、肥後等五個國。頻年遭疫死亡者。半蘇息之輩。既渡造船。就中擇窮貧者給復一年。

○同九年 庚寅。太宰府言。豐後國前介正六位上中井王私宅在日田郡及私營田在諸郡。任意打損。郡司百姓因茲吏民騷動未逞安心。又本自浮岩筑後、肥後等國威陵百姓妨農養業。為蠹良深。中井尚欲入部。徵舊年未進。具微私物而調庸木進。代進上私物。倍取其利。望請准據廻曆十六年四月廿九日格旨。令還本云。

○同十年三月甲寅令。義倉物賑。東西悲田病者及貧窮者。

○仁壽三年五月庚戌。太宰府言上。壹岐島女子伴部刀自賣生三男。勅賜正稅三百束。及乳母一人。

○九月辛丑。詔太宰府。出穀三萬八千七百餘石。賑給管内患痘瘡者。(文德實錄五卷)

○天安元年七月辛亥。下制太宰府。免對馬島賊類被劫入賊黨。及獄中死亡。實無罪者妻子。(文德實錄)

○貞觀二年閏十月十二日戊午。太宰府言。管豐後國權椽正六位上越智宿禰廣歲乞駭骨曰。廣歲齡及八十。筋力衰耗。空妨官職。無益公家。請罷官歸鄉。以待終。許之。(三代實錄)

○同七年八月十五日。太宰府言。對馬銀穴。在下縣郡。自高山底。穿鑿巖。掘入四十許丈。白晝執炬而得入。頃年以來。處々崩塞。費人功而。去夏霖雨。穴底水湛。計其功。力非可堪。司私輒穿去。望請准延喜十五年例。以彼島例。舉大豆。遺百斛并租地子穀百斛。且充其料。令堀開許之。(三代實錄十一卷)

○同十五年十二月二日。太宰府。々中飢疫。賑給之。(三代實錄二十四卷)

○元慶元年十二月廿一日。是日令太宰府。量唐人賂漢中。并從二人衣糧。入唐求法僧知聰。在彼二十餘載。今年還此。漢中隨智聰來。智聰言曰。漢中是大唐處士。身多伎藝。知其才操。勸令同來。不事參求。獨取艱澁。願加優恤。以慰旅情。詔依請焉。(同三十卷)

○同二年三月五日辛丑。詔令太宰府。採豐前國規矩那銅。宛彼那徭夫百人。為採銅鑄作。先潔清齋戒。申奏八幡大菩薩宮。